



「ボランティア国際年+10」記念  
**第20回全国ボランティア  
 フェスティバルTOKYO**



わたしたち

**市民がつくる、強くしなやかな社会**

2011年**11月12日(土)13日(日)** 会場：**両国国技館、青山学院大学**ほか

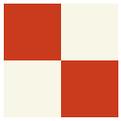
主催：第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会

東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター  
 「広がれボランティアの輪」連絡会議  
 全国社会福祉協議会



独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

ともに創る未来 ～2011.3.11 東日本大震災～



# ごあいさつ

## 「第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO」を振り返って

2011年11月12日、13日の両日にわたって開催いたしました「第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO」は、全国から3,800名を超える参加者をお迎えして、大盛況のうちに無事終了することができました。ご参加いただいたみなさまをはじめ、実行委員会委員、運営スタッフ、ボランティア、本フェスティバルに助成、協賛いただきました団体、企業の皆様に心から御礼を申し上げます。

2010年5月に実行委員会を立ち上げて以降、計24回の委員会において本フェスティバルの企画、運営などについて意見を交わしていただきながら、開催に向けた準備を進めてまいりました。途中、2011年3月11日に発生した東日本大震災により、すべての実行委員が被災地支援の取組みにかかりきりになり、開催内容の検討や分科会などの開催プログラムの準備が進められるか、大変不安を感じました。しかし、毎月開催される実行委員会には多くの委員が駆けつけ、熱心に内容の検討や準備を行っていただきました。

今回の大会テーマとさせていただきます「市民(わたしたち)がつくる、強くしなやかな社会」は、震災の発生を受け、逆境にくじけることなく、市民の持つたくましさや柔軟な思考を活かして、これからの新しい社会を自分たちの手で作り上げていこうという意志を表すものです。初日の式典から最終日の閉会式まで、その隅々に日頃の取組みの成果や工夫が映し出されていきました。それは、フェスティバルを単なるイベントではなく、一人ひとりの参加者の活動内容や意見を交換す

るフォーラムとして開催するという実行委員会の意図が反映された結果でもあります。

一方で、全国から多くの参加者をお招きするにあたっては、その準備が十分ではなかったという反省も、振り返りの実行委員会の場で出されました。また、多くの運営スタッフやボランティアに関わっていただいたにも関わらず、その力を十分に引き出し、活かすしかなかったという意見も出されました。これらについては、この場を借りてお詫び申し上げます。

フェスティバルの2日間を振り返ると、開催に多くの方の力が結集されたこと、多勢の参加者が全国から集い、その知恵や活動を交換し合ったことなど、これまで以上に人と人のつながり、活動のつながりが生まれたことを実感できる場となりました。私自身、多くの会場で足を運びながら、年齢を問わず、ボランティア精神が日本で定着しつつあることを感じ、大変心強く思いました。

これらのつながりが、今後、新たな社会を私たち自身の手で創りあげていく上で活かされることを心から願っております。

最後になりましたが、皆様の今後の活動がますます発展されることを祈念いたしております。ご参加、ご協力、誠にありがとうございます。

第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO  
大会会長 古川 貞二郎

## 「第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO」を終えて

2011年11月12日～13日に行われました第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYOには、開会式に秋篠宮殿下、同妃殿下をお迎えする中、全国各地から多くの方々にご参加をいただき、たいへんにぎやかに開催させていただきましたこと、心より御礼を申し上げます。

また、開催に向けて実行委員、運営サポーター、ボランティア、出演者、事務局それぞれの皆様にはただでさえ多忙な中、準備から実行へと本当に真剣にお取り組みいただき、感謝を申し上げたいと思います。

東日本大震災の発生した2011年3月11日の前日3月10日は、第13回目の実行委員会でした。その議事録をみると、開催当日まで約8ヶ月となり、全体テーマの絞り込みや、各分科会がかなり具体的な内容となり、参加申込受付のための準備なども始まって、いよいよ活動が佳境の時期へと向かう内容となっていました。

そしてその翌日、会議に参加していたメンバーはそれぞれの職場や活動先で大震災に遭遇し、その後の日常を大きく変化せざるを得ないことになったのです。

準備にかかわっていたほとんどの方々が市民活動やボランティア推進に関係する活動をされているので、震災後はボランティアフェスティバルの準備どころではないというのが本音だったかもしれません。

開催の内容も震災を経て大きく変更することとなり、時間の経過とともに刻々と変わる被災地の状況を踏まえなが

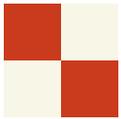
ら、限られた時間の制約の中で準備を進めました。大きくダメージを受けた日本の市民社会がより強く復興へ向けて進むために、何かしらの役割を果たす集いにしたいという思いを胸に計画に取り組んでまいりました。

震災で一時は開催そのものを見直そうという話もありましたが、震災があったからこそ、全国の皆様に復興に向けて市民の力を結集することの大切さを伝えたいと、開催を決意し、その全体テーマを「市民(わたしたち)がつくる、強くしなやかな社会」とし、数多くの震災関連の分科会も新たに組み込むこととなりました。

2009年の秋に東京での開催が決定し、準備委員会から開催まで約2年、実行委員会だけでも開催後の振り返り委員会を入れて25回を数えました。各プロジェクトチームの打ち合わせなどを含めばおそらく200回を超える議論が交わされたものと思います。

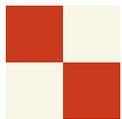
開催両日も秋の晴天に恵まれ、開催においてはいろいろ反省点もありますが、まずはご参加いただいた皆様にかしらをお伝えすることができたのではないかと考えております。被災地の一日も早い復興を祈るとともに、開催に関わられたすべての皆様に心から御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会  
委員長 枝見 太郎



# 目次

ごあいさつ	
大会概要	2
大会運営体制	3
大会運営スケジュール	4
大会プログラム・テーマの決定	5
大会プログラム	6
プロローグ・開会式	7
シンポジウム	8
分科会・フィールドワーク一覧	12
分科会	14
交流会	76
クロージングセッション	77
引継式・閉会式	80
ふれあい広場	81
広報実績	83
大会制作物	84
参考資料① 実行委員会設置要綱	85
参考資料② 実行委員会・事務局名簿	86
参考資料③ 推進委員会設置要綱	87
参考資料④ 協賛団体・協力団体・推進団体	88
主旨文	



# 大会概要

**開催日** 2011年11月12日(土)～13日(日)

**会場**  
1日目 11月12日(土)  
メイン会場：両国国技館  
分科会会場：江戸東京博物館、国際ファッションセンター、共和フォーラム  
2日目 11月13日(日)  
メイン会場：青山学院大学  
分科会会場：国連大学、東京ウィメンズプラザ、こどもの城

**テーマ** わたしたち  
「市民がつくる、強くしなやかな社会」

**内容**  
1日目 11月12日(土)  
プロローグ、開会式、シンポジウム、分科会・フィールドワーク(4会場・28テーマ)、交流会  
2日目 11月13日(日)  
分科会・フィールドワーク(4会場・34テーマ)クロージングセッション、引継式・閉会式  
両日開催  
ふれあい広場(ボランティア・市民活動団体の活動紹介、地域性に富んだ情報発信)

**参加登録料** 3,000円(大学生以下無料) ※交流会費は別途(3,000円)

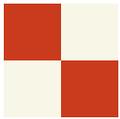
**参加者数**

一般参加者		2,730名
関係者		1,117名
関係者内訳	① 出演者	332名
	② ボランティア	371名
	③ 分科会運営協力者	240名
	④ 実行委員、分科会企画者等	105名
	⑤ 東京都社会福祉協議会職員	69名
合計		3,847名

**主催** 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会  
東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター  
「広がれボランティアの輪」連絡会議  
全国社会福祉協議会

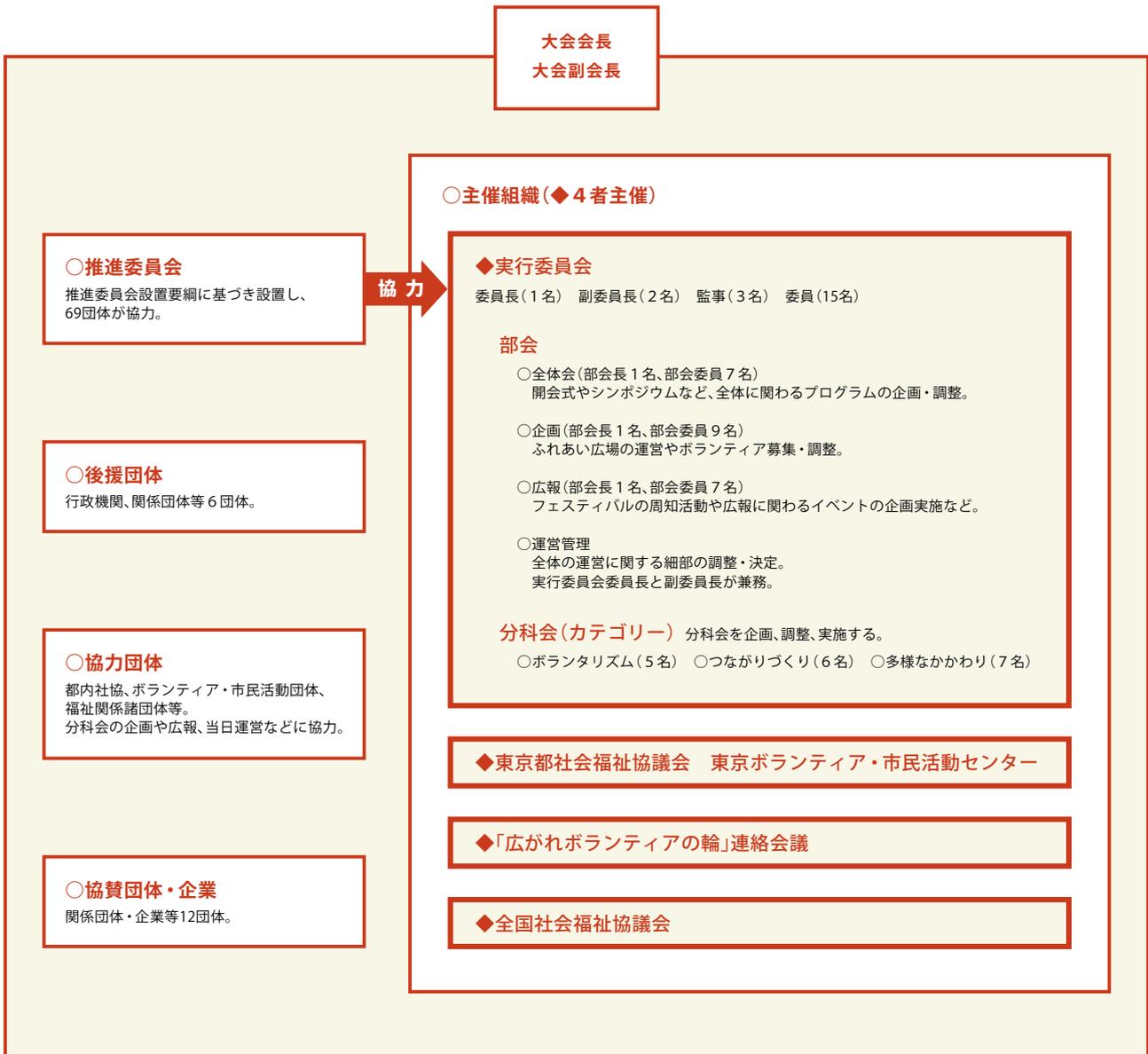
**後援** 厚生労働省、文部科学省、東京都、墨田区、渋谷区、国連ボランティア計画

**事務局** 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会事務局  
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ10F  
東京ボランティア・市民活動センター内  
TEL:03-3235-1171 / FAX:03-3235-0050



# 大会運営体制

大会実施にあたり、21名(主催3団体の職員を含む)で構成される実行委員会を立ち上げ、各委員は部会と分科会カテゴリーのいずれかに所属した。各部会で検討・調整された事項については、月1回～2回開かれる実行委員会にて共有・最終決定され、企画・準備から当日の運営、報告に至るまで、実行委員を中心に主体的に行われた。

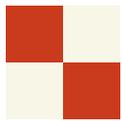


## ■工夫したポイント

- ・迅速かつ柔軟な対応のため、実行委員会を主導・中心とした企画・運営
- ・部会を用いた議論の活発化

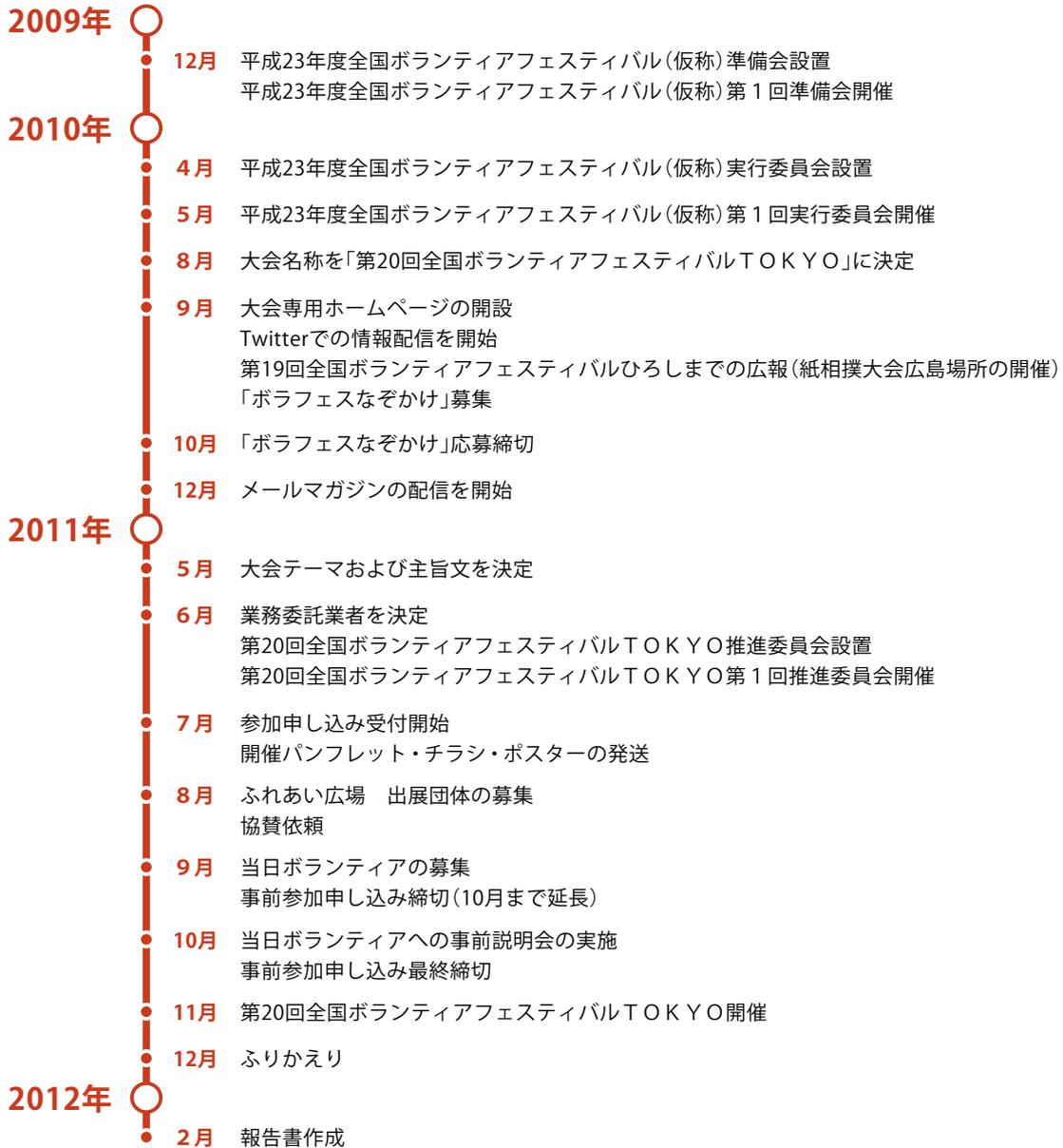
## ■次へ生かすポイント

- ・部会、分科会担当の兼務による各委員の負担増
- ・協賛団体・企業へのPR不足



# 大会運営スケジュール

## ● 主なスケジュール



## ● 実行委員会等実施状況

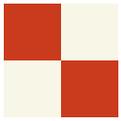
準備会 4回／実行委員会 24回

## ● 各部会実施状況

運営管理部会 13回／全体部会 12回／企画部会 11回／広報部会 18回

## ● その他

シンポジウム打合せ 1回／Ustream使用に関する打合せ 1回／クロージングセッション打合せ 1回／  
当日ボランティア事前説明会 5回／当日ボランティア出張説明会(学校・企業等にて) 8回／  
メールマガジンでの情報配信 17回



# 大会プログラム・テーマの決定

実行委員会を中心に話し合いを進め、大会を構築するためのコンセプト作りを行った。様々な社会課題や分野ごとの取組みなどについて議論し、以下の4つのポイントに絞った。さらに、2011年3月の震災を受け、その視点も加え、市民(わたしたち)がつくる、強くしなやかな社会とはどのようなものかを考えていこうという方向性でテーマを作り上げた。この方向性のもと、以下に記載した「テーマ」や「コンセプト」などを打ち出す形でプログラム構成を考えた。

## ● コンセプトについて

### ・ボランティアな活動の本質・原点とは

～ボランティアフェスティバルが始まっての20年を振り返る～  
この20年にあった様々な動きのもと、変化を遂げてきた「ボランティア」の考え方。そもそもボランティアとはどういうものか。これからのボランティアの役割やあり方を考える。

### ・江戸から学ぶ、「東京」らしさ

時代の移り変わりの中でいま一度、「東京」らしさや特色に焦点を当てる。持続可能な都市であった「江戸」や「江戸しぐさ」、古いものと新しいものとの融合といった部分、また、地方との役割、島嶼(とうしょ)との関係、国際都市としての東京なども捉えていく。

### ・これからの「つながり」のあり方

地縁型のものやテーマ型のものなど、地域には様々なつながりが存在している。しかし、今、つながりが薄れ、様々な課題が生じている。愛媛、広島と続く「チカラ」。今、どのようなつながり方が求められているのか、つながりの原点とは何か、そしてつながりが生む「チカラ」について考える。

### ・市民の社会参加におけるあるべき姿

市民の社会参加という言葉が聴くことが多い。誰しものが地域に関わることが求められてきているのではないか。その様々なあり方について考える。

## ● テーマ、主旨文について

○テーマ 「<sup>わたしたち</sup>市民がつくる、強くしなやかな社会」

○主旨文 裏表紙に掲載

決定にあたって様々な議論を行う中で震災が起これ、この震災をどのようにテーマに含めるか、さらに議論が行われた。主旨文(裏表紙に掲載)は、過去の大会にはなかったものだが、このような時期の開催に際し、実行委員会としての「想い」を伝えたい、という気持ちから作成することになった。

また、今回の震災を受け、多くの方がボランティアとして関わったり、触れたりすることがあったため、コンセプトにも含まれている「ボランティアの原点や本質」を改めて考えるという部分にも議論が広がった。

(以下、議論の経過を一部抜粋)

- ・震災復興をテーマとするのはいかがか
- ・震災に注意が行き過ぎて、他分野への視線が弱くなっている
- ・復興支援の色をあまり濃く出さない方がいいのではないか
- ・11月にどのようになっているかといった時期を見越した内容にすることも必要
- ・その後の生活支援という視点も入れてもいいのではないか
- ・震災の経験をこれからのまちづくりにどう活かすか
- ・日本、復興、再建などを入れると、それ以外の人は来づらくなる  
「ボランティアは社会を強くする」「強い社会のためにボランティアは必要だった」という気持ちを伝えるような言葉の方が、直接的な言葉よりもいいのではないか
- ・復興支援だけではなく、いかにボランティアを引き続きつなぎとめて、社会に根付かせていくか
- ・ボランティアをどう打ち出すか
- ・学生もボランティアに対する意識が変わってきている
- ・ボランティアは難しいものではないということを伝えたい
- ・今までボランティアをしたことのない人が、この震災でボランティアに関わった震災だけがボランティアではないということを知ってもらう機会としたい
- ・今までボランティアをしてきた人も、ボランティアを初めてした人も参加できるような視点で作りたい
- ・今だけでなく、「長く」様々な人とつながっていく、そんな思いが入っていくとよい
- ・参加者と一緒という思いは残したい

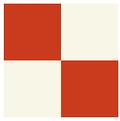
## ● シンボルデザイン

ボランティアフェスティバル(Volunteer Festival)の頭文字、「V」と「F」をシンプルに表現し、家紋のようなデザインにした。また、開催場所である両国国技館と近隣の名所東京スカイツリーをアイコン化してロゴマークに組み入れた。



## ■ 工夫したポイント

- ・東京らしさの出し方(江戸らしさを感じられる両国エリアと、都会らしさを感じられる青山エリアの2ヶ所の会場)
- ・これまで参加したことがないであろう参加者層の開拓を意識



# 大会プログラム

## 1日目 11月12日(土)

### ● プロローグ 12:45～12:55(両国国技館)

和太鼓演奏 菊一太鼓(墨田区太鼓連盟)

### ● 開会式 13:00～13:50(両国国技館)

○挨拶 開催地代表 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO 大会会長 古川 貞二郎  
主催者代表 全国社会福祉協議会 会長 斎藤 十朗

○メッセージ 国連ボランティア計画 事務局長 フラビア・パンシエーリ 氏

○来賓祝辞 厚生労働大臣政務官 津田 弥太郎 氏  
東京都副知事 佐藤 広 氏

○秋篠宮殿下 おことば

○ボランティア功労者厚生労働大臣表彰 個人代表 大内田 寧子 氏(東京都)  
団体代表 厚木市食生活改善推進団体 厚味会(神奈川県)  
学校代表 熊谷市立大原中学校(埼玉県)  
中央推薦代表 株式会社 デンソー(愛知県)

○受賞者代表挨拶 大内田 寧子 氏(東京都)

○閉会挨拶 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 委員長 枝見 太朗

### ● シンポジウム 14:00～15:30(両国国技館)

○シンポジスト 阿部 志郎 氏(横須賀基督教社会館 会長/「広がれボランティアの輪」連絡会議 顧問)

加雅屋 拓 氏(NPO法人NPOコミュニケーション支援機構 代表[略称a-con])

野中 ともよ 氏(NPO法人ガイア・イニシアティブ 代表)

○コーディネーター 山崎 美貴子(東京ボランティア・市民活動センター 所長/「広がれボランティアの輪」連絡会議 会長)

### ● 分科会・フィールドワーク 16:00～17:30

28のテーマごとの、課題提起や解決に向けた協議や研修

### ● ふれあい広場 12:00～18:00

墨田区内のNPO・市民活動団体など、全41団体によるブース出展

### ● 交流会 18:00～19:30(両国国技館)

○主催者挨拶 山崎 美貴子(東京ボランティア・市民活動センター 所長/「広がれボランティアの輪」連絡会議 会長)

○乾杯 深野 紀幸 氏(墨田区社会福祉協議会 事務局長)

○紙相撲大会東京場所 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO 実行委員

○次回開催県PR 第21回全国ボランティアフェスティバルみえ 実行委員

○締めめの挨拶 星宮 正典 氏(渋谷区社会福祉協議会 事務局長)

## 2日目 11月13日(日)

### ● 分科会・フィールドワーク 9:30～12:30

34のテーマごとの、課題提起や解決に向けた協議や研修

### ● クロージングセッション 13:30～15:00(青山学院講堂)

○コーディネーター 枝見 太朗(第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 委員長)

○登壇者 鹿住 貴之(同実行委員会 副実行委員長)

須藤 美智子(同実行委員会 副実行委員長)

### ● 引継式・閉会式 15:00～15:40(青山学院講堂)

○フラッグ引継

○次回開催地代表挨拶 森下 達也 氏(第21回全国ボランティアフェスティバルみえ推進委員会 会長)

○合唱 こどもの城児童合唱団(楽曲:①地球の仲間 ②タンポポ ③立ち上がれ ④あしたははれる)

○閉会の言葉・被災地へのメッセージ

枝見 太朗(第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 委員長)

### ● ふれあい広場 9:00～16:00

渋谷区内のNPO・市民活動団体など、全55団体によるブース出展

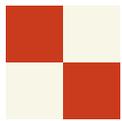
## ■ 工夫したポイント

- ・東京らしさの出し方
- ・開催地域の子どもたち、NPO・市民活動団体や福祉団体との協力による開催
- ・流れをイメージした2日間の構成

(シンポジウムでのコンセプトにもとづく大きな課題提起→具体的な課題に対して分科会の実施→様々な課題を受けてのまとめとしたクロージングセッション)

## ■ 次へ生かすポイント

- ・各日の開催エリアが異なることによる分かりづらさ
- ・分科会数の多さに伴う選択のしづらさ
- ・参加しやすいプログラムの組み立て(時間配分など)



# プロローグ・開会式



「第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO」は、第20回目の節目の大会となるだけでなく、2001年の「ボランティア国際年」から10年目の記念大会でもある。また、3月に起こった東日本大震災の後に開催される大会にもなった。

両国国技館にて、多くの来賓の方々や秋篠宮同妃両殿下のご臨席と、秋篠宮殿下のおことばをいただき、二日間の初日が開幕した。

## ● プロローグ



いよいよ初日の開幕



菊一太鼓（墨田区太鼓連盟）の子どもたちの力強い演奏

## ● 開会式



過去の大会を振り返るオープニング映像の上映



厚生労働大臣政務官 津田弥太郎氏ほかご来賓の皆さま



秋篠宮同妃両殿下 ご臨席



アリーナのほか、升席も使用



国連ボランティア計画  
フラビア・パンシエーリ氏



秋篠宮殿下のおことば



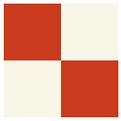
ボランティア功労者厚生労働大臣表彰

## ■ 工夫したポイント

- ・江戸らしさの出し方(会場の選定／プロローグの太鼓演奏)
- ・会場の雰囲気を生かしたレイアウト(升席の使用)
- ・20回目の節目や震災への取組みを意識した演出(オープニング映像)

## ■ 次へ生かすポイント

- ・全体の時間配分



# シンポジウム

今回のシンポジウムのテーマは「市民(わたしたち)がつくる、強くしなやかな社会」。このテーマはどのような意味を持つのだろうか。3月11日の東日本大震災により、私たちは未曾有な体験をした。翻って、我が国の経済環境もリーマンショック以来悪化し、若者たちをはじめとする就職難など、社会で様々な不具合が目立つようになった。地域の中には孤

立や自死、または虐待や暴力などがあり、自然環境問題あるいは外国に住む方々の暮らしの問題など多様である。これまで、私たちは様々な領域でボランティア活動に取り組み、社会や地域を耕してきた。シンポジウムでは、3人の方をお迎えし、ボランティアや市民活動の原点を問い直し、様々な社会の課題にどのように立ち向かっているのか見つめた。

● **テーマ** わたしたち 市民がつくる、強くしなやかな社会

● **シンポジスト** 阿部 志郎 さん(横須賀基督教社会館 会長/「広がれボランティアの輪」連絡会議 顧問)  
加雅屋 拓 さん(NPO法人NPOコミュニケーション支援機構 代表[略称a-c o n])  
野中 ともよ さん(NPO法人ガイア・イニシアティブ 代表)

● **コーディネーター** 山崎 美貴子(東京ボランティア・市民活動センター 所長/「広がれボランティアの輪」連絡会議 会長)



## 取組みとそこから見てきたこと

山崎 3人のシンポジストからご自身の紹介と思いのたけを語っていただけますか。

阿部 私たちは毎日たくさんの人に出会います。皆さんもこの会場においでになる際、何十、何百という人に電車の中で、道で、駅で会っています。でも、一歩ずれ違えばその人がどんな顔をしていたかさえ覚えておりません。でも、そうした出会いの中に、時にめぐり会いが起きます。それは皆さん方のパートナー、恋人と出会った時を思い起こしていただけると、それがめぐり会いです。心と心が響き合う出会いをめぐり会いと申します。

こうした出会いの機会がだんだん減ってきました。戦後貧しい時代には、この地区も全部焼け野原、みんな近所で協力をしながらバラックを建て、そこに朝顔を植えたりしたのです。食べるものがありませんので、お米もみそもしょう油も貸し借りをしました。支え合いながら耐えたのです。

経済が復興してきますと、「家つき、カーつき、ババ抜き」という言葉が生まれました。まだ家も車もない時代に、若い女性が結婚をする相手に対して条件を出したのです。車を持ち、家を所有していること。しかし、ババ

抜き(姑のいないこと)であること。テレビ、冷蔵庫、洗濯機、車、ケータイと私どもは新しいものを追い求めてきました。当時、モノを大事にし、人を軽んじる風潮が生まれた日本(人)は、アジアではエコノミックアニマルと軽蔑されるようになりました。

もう1つの合い言葉は「バスに乗り遅れるな」。1台しかないバスにみんな走って、人を押し分けてバスに乗ろうとしました。この時、走れない人がいる、飛び乗れない人がいることは念頭にありません。競争社会に移ったのです。産業界が教育に要求をしました。通常の勤務だけでなく、残業・夜勤に耐える体力を持った子どもを育ててくれ。技術革新をしていくので、知能の高い子どもを世に送れ。教育では学習到達度をはかるテストが実施され、偏差値が設けられました。平均以上の子どもは大事にされ、平均に達しない子どもを「落ちこぼれ」と申しました。ここからいじめ、校内暴力、不登校、虐待など、この20年間に児童虐待は50倍に増えています。

こうした状況の中で2DKが普及しプライバシーを重んじてきました。人にかわりたくない。団地に住んでいる人の調査によると、35%の人が他人とのかかわりを持っていないという結果が出ています。団地に住んでいる友人が申します。朝出勤をする時に鞆を持って玄関に立つ。廊下に足音が聞こえる間は立ったまま待つ。シーンとしたらドアを開けてサッと出て行くと。



阿部 隣の人と顔を合わせてあいさつをするのが億劫。こういう心理が私たちに働きます。

今子どもの4人に1人は放課後にひとりで遊んでいます。友達がいないのです。年寄りも孤立・孤独という問題に悩んでいます。私がお会いした73歳の女性ですが、「昼間は人の顔が見え、車が走り、気が紛れます。でも、夜中真っ暗な中でふと目を覚ますと、骨を刺し心の凍る寂しさです。寂しいから死にたいけど、意気地がなくて死ねません」と。こういうお年寄りが増えて、東京23区で1日平均10人の方が孤独死をしています。これで良いのか、日本の社会は一体どうなっていくのか、を今私たちはお互いに問わなければなりません。

そこに突如3月11日の東日本大震災が襲ってきました。ここにおける被災者、ボランティア、それを支援する人々の姿勢が一変しました。私は感銘を受けています。日本の社会はこれで変わるのではないかという希望を抱かされているところです。



加雅屋 私は、本業は広告会社でマーケティングプランナーをしています。特に私が携わっている仕事は商品開発の仕事が多く、調査を通じて、全国の皆さんの声を聞きながら、どういった商品づくりが受け入れられそうかということを検討します。クライアントを手伝いながら、商品の味、パッケージ、そして、広告にどう生かしていくかという部分を統括するという仕事をしています。

休日には、a-con(エーコン)という団体で、ボランティアとして、NPOの広報やコミュニケーションのサポートなどに取り組んでいます。例えば、アジアの各国で教育の支援事業を行っている「シャンティ国際ボランティア会」からの相談を受け、我々は5~6人のチームを結成します。会の事務局に伺いまして、まず話をじっくり2~3時間、それを何回か繰り返していきます。

そうしていくうちに、シャンティ国際ボランティア会が世の中に対して何を伝えたいのか、また、大切にしているのかということが分かってきます。今回ご紹介している事例では、今まで関わりのあった皆さんに寄付を呼びかけるといったダイレクトメール(以下、DM)を年に2回送っているのですが、そのDMをもっと伝わりやすいようなメッセージやデザインに変えて、寄付をもっといただけるように工夫しようということになりました。

我々の方で、このDMを受け取る人は普段はどのよ

うな暮らしをしているのか、どのような言い方をしたら思いが伝わるなどの研究を行ったり、まずこのDMが家に来て封をあける時に皆さんがどこからどういう順番でご覧になるのかという目線の設計、そして一番大事なメッセージをどのようにすべきか、そういうことを事務局のスタッフと我々ボランティアのメンバーで色々話し合いながら作っていくという活動をしています。

これが私のボランティア活動の多くの部分を占めているのですが、本業も月曜日から金曜日、時には土・日曜日もあります。他の時間、家庭サービスなどもある程度きちんとしながら、その他の時間はボランティア活動に費やすということをしています。

実はそういった生活をしている人が、だんだん周りにも増えてきていると感じていて、「プロボノ」という言葉も最近かなり、いろんなメディア等で取り上げられています。プロボノというのは、私の例でいうと広告会社での仕事の専門技術や知識を生かすボランティア活動を言います。そういった方たちが増えていて、皆さんといろいろ話をすると当然社会に何かしら自分の力を生かしたい、貢献したいという気持ちを持っています。では、それが続く理由になっているかという、それ以外にもさまざまな理由があるのではないかと感じています。私の場合は、人との出会いが非常に広がったこと、本業での覚悟が深まったこと、人生をどうしたらよいか真剣に考えるようになりました。

野中 今何をしているのかということ、NPO法人ガイア・イニシアチブというものを立ち上げまして、その代表をしております。加雅屋さんからお話があったように、プロフェッショナルな仕事の領域、金を稼いでいる生業とともに、「プロボノ」という、無償でその専門知識を生かして社会に貢献するということに取り組んでいます。

振り返ると、親からは「お人に何かしら役に立つ、傍を楽にして差し上げることを、君ができるようになりなさい。それが働くということだよ。漢字の名前をつけると、親が意味を決めてしまうから、だから、平仮名で「ともよ」にするから、自分で人生を築いていきなさい」と言われ育ちました(笑)。大学院ではジャーナリズム専攻でしたので、カメラを持って世界中を飛んで歩くという仕事をしたいなと思っていたのですが、NHKのお仕事とご縁をいただいて、10年間テレビの仕事を



野中 しました。そして、結婚して子どもを授かり、一人娘を育てる中で“命”というのが本当に連続と続いていることを実感しています。

ボランティア活動については、時代背景によってとらえ方があってと思いますが、「労働というのは必ず対価としてお金で数えられることである。労働と対比すると、ボランティアというのは金をもらってはいけません。」そう考えられてきた時代もあると思うのですね。それで、阿部先生のお話にあったように高度経済成長の時は、労働生産性とお金を儲けることができると良い人間。それができない弱い者を、助けてあげなければいけません。手を差し延べるのがボランティアだと考えられました。私はボランティアの定義を一つにまとめなければいけないということはなく、それぞれの考え方があっていいと思っています。

でも、2011年3月11日、震災という目覚まし時計が鳴りました。日本は高度経済成長でお金、お金とやってきて、それで本当に良い社会になったのか。世界第2位のお金持ち国でも地球のクシャミにも満たない、ハックションくらいでグラグラと揺れて、2万人近い方の命が一瞬にして亡くなる。「お金がある」と言っても、地震や津波が「じゃあ、僕、お金をもらって帰ります」とは言わないわけです。だから、私たちににとって一番大事なものは命であるとあらためて思うのです。

その後、某ビール会社の社外取締役を務めたり、国の審議会なども仕事をさせていただいています。「いろんなことをしていますね」と言われるのですが、私にとっては何も変わらない。たった1つだけ、私の時間を子どもたちが笑顔でいられる日本づくり、地球づくりのために役に立ちたい。それから命輝く未来づくりに何がしかお役に立ちたいという、それだけです。

### 一番大切にしていることは？

山崎 お三方の立ち位置で一番大事にしていらっしゃることは何でしょうか。

阿部 三和銀行(現三菱東京UFJ銀行)の頭取をした川勝堅二さんという方がいました。この人がロンドン支店長をしている時に財界人の家族が集まってよくパーティーをする。奥さんは奥さん同士で集まって歓談をする。その話題がボランティア活動になる。川勝夫人が「ボランティアをしていないのは恥ずかしい」とボランティア活動を始めた。夫の堅二さんは「私まで巻き込まれて連れていかれましたよ」と笑ってました。ボランティアは、してもしなくてもよいのです。自主的です。私たちはしてもしなくてもよいことは大体しません。しかし、しなくてよいことをしないのが恥ずかしい。こういう社会をつくるのが、「強くしなやかな社会」だと思います。

今回の震災で被災をした16歳の高校生の話です。津波が来て逃げた。家に戻ってみると、自分の家の前の通りまでは全部流された。自分の家は残っている。その高校生が流された人々に「申しわけない」と言ったのです。今回の震災で、私たちはその高校生と同じ思いを

持ったのではないのでしょうか。「自分は被災をしないで幸運だった」とどなたもおっしゃらない。自分が安全地帯にいて、悲しみ、苦しんでいる方々にすまない。そういう思いを持っているのです。私は今回、国民意識の構造が変わったと思っています。これは新しい文化を私たちがつくっていく大きな希望だと思います。何かをしないのが恥ずかしい。それによって一歩踏み出して行動するのがボランティアであり、恥ずかしいと言わせる社会が私たちの望む社会なのではないのでしょうか。

加雅屋 ボランティアを通じて非常に良かったと思っているのは、本当に世の中って、知らないことが沢山あって、面白いことがいっぱいある。そして、逆に言うとならなくてはいけなひどいこともたくさんあって、それがいかに見過ごされてきたかということに気づいたというのはすごく大きかったです。

山崎 野中さんの著作を拝見すると、ご自分の立ち位置のところで、「正しい義に照らせ」と書いてありますね。

野中 「命にまさる正義なし」という言葉は、高校3年の時に書いた言葉です。父が外資系の仕事をしていたので、家にいろいろな国の方たちがホームパーティにいらっしやる。地球人にはいろいろな種類がいる。違いがあるから友達同士になれる。それでお互いに出会えてよかった。これにまさる幸せはないということと同時に、違うからといってせめぎ合ってやっていたのでは話は進まないと考えようになります。そしてそういうものの根源が命です。たった1つ、全員が共通に持っている、生まれて一番大事な価値、これが命。これが私にとって一番お互いに大事にしなければいけない正義だと気がつきました。

阿部 シンポジウム前に4人で弁当をいただきました。野中さんが、座られてから合掌して「いただきます」とおっしゃった。美しい姿です。合掌やお祈りをする人は世界中にたくさんいます。でも、食事をする時に「いただきます」「ごちそうさま」という言葉を持っているのは日本だけです。給食費を払っているのに、なぜ子どもたちに「いただきます」と言わせるのかと、学校給食で最近保護者の間から反発が起こり、やめた学校もあります。「いただきます」は、それを備えてくれた両親、生産者に対する感謝です。同時に動植物の命をいただくことに対する礼儀なのです。私たちの先祖は命への畏敬、自然との共生を私どもにこの言葉を通して伝えてくれました。「いただきます」というのはあいさつです。アイヌの言葉で「イランカラプテ」といいますが、あなたの心に触れさせてくださいという意味です。心と心がふれ合うあいさつを、私はまずボランティア活動の中で皆さん方に実践をしていただきたいと思います。

## 「市民(わたしたち)がつくる 強くしなやかな社会」とは

山崎 今日この会場にいらっしゃるお一人お一人はだれも例外なく生から死に向かって歩んでいます。そういう私たちの大切な命なのですが、この災害の中で身近な人の命を奪われてしまった方は、本当に命というものは生ある人のためにあるということ、その嘆きや悲しみやつらさや無力さを感じながら、痛感された方がたくさんいらっしゃると思うのです。

そして野中さんがおっしゃられたように、私たちは右肩上がりで歩いてまいりました。先ほど阿部先生がこれまでどのような社会の変動があったのか、非常にわかりやすく話してくださいました。

こういう時代状況の中で、私たちは今回のテーマの「市民(わたしたち)がつくる 強くしなやかな社会」について、お考えをお話していただけますでしょうか。

阿部 沖縄の言葉に「五本の指は丈が違う」とあります。指はそれぞれ長さが違い、働きが違うのです。野中さんがおっしゃったように人もみんな違うのです。違うから特色があるのですね。

しかし、掌(たなごころ)は1つです。このフェスティバルは全国から集まって、みんなが心を1つにする。小指に刺さった棘は小指の痛みだけではないのです。体全体の痛みなのです。それを分かち合う印がこの掌にあります。

ところが、人間という言葉に間があります。間(あいだ)があるのです。人と人は違うから壁がある。この壁をなくすことはないのです。それではどうするか。松尾芭蕉が、「よく見れば、なずな花咲く垣根かな」とうたいました。垣根がある。でも、そこになずなの花がきれいに咲いています。何が必要かといえば、人と人の垣根を越えて友情の花を咲かせることです。それがボランティアの役割です。どうか皆さん方、人と人、人間というのは間に生きるのです。人と人の間に生きる。この人の間にある壁を越えていく助け合いと愛情の花をボランティアとして咲かせようではありませんか。

加雅屋 「強くしなやかな社会」ということで宿題をいただいて考えたのですが、私自身は、個人がフワフワ柔らかい必要はないのではないかと。例えるならば、レゴブロック。強くしなやかな社会における人というのは、レゴブロックのようなものでよいのではないかと思います。もともと持って生まれた色や形は何なのかということをよく自分で見つめ直して、だけどレゴブロックはいろんな組み合わせでどんな形にもなる。ブロックそのものは非常に個性があって固いものですが、いろんな形につながっていけるということが、強くしなやかな社会なのではないでしょうか。

野中 年齢、経験は取り払い、お互い尊重する。例えば、ボランティア歴3年の人と33年の人が対等に「どうぞよろしく！」と言えるような社会でありたいですね。

山崎 お三方の話をうかがって、ボランティア活動というのは、活動されている地域や社会、活動者自身も豊かになるということがよく分かりました。それから野中さんから、ボランティア活動が、社会的な貢献をする大きな武器にもなっていることもわかりました。

ボランティア活動は、阿部先生のいう「人と人との間に」、そして加雅屋さんのいう「信頼」、「助け合い」、「支え合い」という精神を生み出す力があるということもわかりました。そして、地域社会の絆を強める役割があるということもわかりました。私たちは競争原理に基づく右肩上がりの社会を今まで目指してきましたが、大切なことは持続可能な社会をつくらなければならないために私たちができることは何か、ボランティア活動の本質、原点は何かということを考えて続けたいと思います。

阿部先生は「文化をつくる」とおっしゃいました。東京らしさは、今ここにある東京だけではなくて、脈々と私たちが生活を紡いできた中にあります。それから、いろんな職人の文化があります。その紡ぎの中で、私たちは「お互いさま」を、そして支え合うことの大切さも学びました。この江戸から始まった営々と続く文化を私たちはまた次の世代へ伝えていく。次の世代へ私たちの命をつないでいくことだと思います。

東京ボランティア・市民活動センターでは、「つなぎ、つながり、つながり合う」を合い言葉にしてきました。皆様にも、これからのつながりのあり方をぜひ考えていただければと思います。皆様と想いを共有しながら、この2日間を1つの起点にして、また次の20年間を歩み続けてまいりたいと願っております。ありがとうございました。

東京ボランティア・市民活動センター発行  
『ネットワーク』2012年2・3月号(316号)より転載。



※当日の様子はユーストリームで動画を配信。  
(協力：ソーシャルブリッジ株式会社)  
<http://www.ustream.tv/channel/volufes>

# 分科会・フィールドワーク一覧ガイド 1日目(12日)・2日目(13日)

## (1) ボランティア

	番号	テーマ	ページ
1日目 16:00～17:30	1	東京のボランティア・市民活動の30年を振り返る	14
	2	語って、気づいて、見つけよう～ボランティア+???～	15
2日目 9:30～12:30	3	温故知新 開拓者との対話からつむぐボランティア・市民活動の未来	16
	4	ボランティア憲章をつくろう！～日本人のボランティアを考える～	17
	5	ボランティア活動が生み出す効果・意義の日本版可視化ツール公開分科会～災害時と日常の地域での活動の効果・意義について考える～	18
	6	NPOの根本は「ボランティア」～自発的な個人が支え、支えられるNPOをめざして～	19

## (2) 震災

	番号	テーマ	ページ
1日目 16:00～17:30	7	災害に備えるつながりづくり	20
	9	被災者主体のボランティアコーディネーションを考える～多様な市民の参加による力強い復興を目指して～	21
	10	自然学校の社会的意義～災害対策の拠点として～	22
	11	一人で悩まないで！ 自殺に追い込まない～こころのケア活動に求められるボランティアの姿勢・役割～	23
2日目 9:30～12:30	8	映画『ミツバチの羽音と地球の回転』から考えるこれからのエネルギー	24
	12	災害復興の課題を考える～東日本大震災被災地の復興に向けて～	25
	13	災害時要援護者とつながりづくり～都会における災害時要援護者を支えるために～	26
	14	ボランティア・市民活動は“包摂型”のコミュニティをつくれるのか～東日本大震災の支援活動を通して問う～	27
	15	大規模災害に備えよう！～東日本大震災からの学び～	28
	16	新しい公共熟議～3.11をきっかけにこれから求められる新しい公共とは～	29

## (3) 地域づくり・まちづくり・つながりづくり

	番号	テーマ	ページ
1日目 16:00～17:30	17	無縁社会～新たなつながりの可能性を求めて～	30
	18	当事者の声を聴いて考える～「子育て」を、地域で支えあう仕組みづくり～	31
	19	下町・墨田が歩んだ福祉の歴史(みち)～人情あふれる下町のくらしから～	32
	20	ボランティア活動と学び～地域社会を担う人材の養成を考えよう～	33
	21	ケアするための学び～ボランティア活動・市民活動と教育のつながりを学ぶ～	34
	22	ふれあいの居場所の必要性	35
2日目 9:30～12:30	23	地域の絆を結び直す～「消えた高齢者問題」・孤独死を超えて～	36
	24	地域における市民のつながり～「こころのケア」ボランティア活動への誘い～	37
	25	まちとむらを結ぶ森林づくり	38
	26	島民の願いとつながりづくり	39
	27	外国につながる人たちとの共生・地域のつながりを考える～「生活圏としての新宿」における実践から～	40
	28	人が人となつながらあうために～世界各地の実践から学ぶ～	41
	29	「患者が先生」 みんなで作るこれからの医療とは？～市民参加で生まれる新たな視点～	42
	30	あなたの活動に+ESD！～ボランティアパワーを地域の未来づくりにつなげよう～	43
	31	厳罰化ではなく「寛容な社会」へ～すべての人間は人間である～	44

## (4) 若者

	番号	テーマ	ページ
1日目 16:00～17:30	32	水谷修さん講演会 夜回り先生が熱く語る～今、子どもたちを救えるか！？～	45
	33	若者よ、ボランティアへ行こう！～若者と一緒に考える未来のこと～	46
2日目 9:30～12:30	34	ニート・ひきこもりの再チャレンジを支援する	47
	35	多文化ユース・フェスタ2011～多様なことは楽しいこと！ 素敵なおこと！～	48
	36	大震災における中・高校生の支援の可能性～現地高校生の活動と栃木・東京の中・高校生の後方支援～	49
	37	※出演者の都合により中止	—

## (5) 生き方・働き方

	番号	テーマ	ページ
1日目 16:00～17:30	38	江戸しぐさに学ぶ今しぐさ	50
	39	企業の社会貢献活動発表会～進化する「社員参加型」の社会貢献活動～	51
2日目 9:30～12:30	40	喫茶の力～働く・出会う・広がる、障がい者の喫茶コーナーの取り組みから～	52
	41	社会人ボランティアやプロボノを広げる仕組みを考える	53
	42	NPO長期インターンシッププログラム！～若者、NPO、そして社会に何をもたらすのか？～	54
	43	それぞれの働き方、これからの生き方	55

## (6) お金

	番号	テーマ	ページ
1日目 16:00～17:30	44	NPO・ボランティアだからできるお金の集め方と助成(使い方)〈市民ファンド〉	56
	45	NPO法人会計基準～ボランティアの価値を換算すると？	57
	46	NPO法制改正が問う 市民に支えられるNPOのあり方とは	58
2日目 9:30～12:30	47	NPOの基盤強化～助成財団との新たなつながり～	59

## (7) 活動分野別のつながり

	番号	テーマ	ページ
1日目 16:00～17:30	48	遊びにきてね。おもちゃ図書館 〈第一日目〉	60
	49	ボランティア(法律対象外)としての移送サービスを社会福祉協議会を通して考える	61
	50	精神保健福祉ボランティア全国の集い 代表者会議	62
	51	大震災！ その時、仙台の外国人は？	63
2日目 9:30～12:30	52	遊びにきてね。おもちゃ図書館～被災地の子どもたちへ届けよう、楽しい遊びを！～ 〈第二日目〉	64
	53	災害の際の在宅支援活動～食事サービス活動を通じて	65
	54	市民活動としての移送サービス 道路運送法と今後の活動展開	66
	55	映画『「大丈夫。」-小児科医細谷亮太のことば-』上映後に伊勢監督との対話	67
	56	視覚障害者の読書をサポート～あなたにもできること～	68

## フィールドワーク

	番号	テーマ	ページ
1日目 16:00～17:30	57	TOKYO油田と下町ツアー	69
1日目 16:00～17:45	58	賀川豊彦と関東大震災～日本のボランティア活動の原点について～	70
	59	江戸文化と鬼平～長谷川平蔵の活躍の舞台をバスでタイムスリップ～	71
	60	ミツバチが教えてくれた人と人のきずな～銀座のミツバチがつなぐ地域の連携～	72
1日目 19:30～21:30	61	東京下町から山の手へ～てんぶら油バスで節電の町東京を走るナイトツアー～	73
2日目 9:30～12:30	62	興望館セツルメントを見る・聞く・考える！	74
	63	第五福竜丸展示館見学～核の脅威と放射能汚染被害を考える～	75

### ■ 工夫したポイント

- ・参加者が選びやすいようなカテゴリー分け
- ・多様な分野における分科会内容の企画
- ・分科会の形式を、「話し合う」「学ぶ」「体感する」アイコンで表示
- ・同じ分野においても、多様な視点の取り込み

### ■ 次へ生かすポイント

- ・分科会数の多さ(参加者の偏り、選択の難しさ)

## 分科会

## 1

## 東京のボランティア・市民活動の30年を振り返る



日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 66人

会場 国際ファッションセンター 11階 115

## 出演者

## ◆コーディネーター

安藤 雄太さん (東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー)

## ◆パネリスト

吉澤 英子さん (大正大学 名誉教授/初代東京ボランティア・センター 所長)

坂巻 照さん (元・毎日新聞 論説委員/元・東京ボランティア・市民活動センター 運営委員)

山崎 美貴子 (神奈川県立保健福祉大学 名誉教授/東京ボランティア・市民活動センター 所長)



## 1 概要

1981年に東京ボランティア・センターから始まり、今年、開設30周年を迎えた東京ボランティア・市民活動センター(以下、TVAC)。この間、東京ではどのようにボランティア・市民活動が発展してきたかを、センターの運営を通して東京におけるボランティア活動、市民活動に深く関わってこられた方々の話を聞くことで振り返る。

## 2 主な内容

## ○安藤さん

終戦後、焼け野原となった東京で、肩を寄せ合い、戦後の生活を始めていく中で、大学生を中心として多くの自主的なボランティアグループが立ち上がった。子どもたちの学習指導や、施設でのボランティア活動を中心にしながら展開し、今なお当時のグループが活動しているところもある。1961年には「第1回学生ボランティア会議」が開かれ、横のつながりや学習の必要性を受け、1962年「ボランティア東京ビューロー」が開設された。またこの60年代は、富士福祉事業団の立ち上がりや、各区市町村社協でボランティアの推進が始まった。

1970年代になると、地域ごとのボランティア活動と合わせて、女性たち(特に主婦層)のボランティア活動が活発になってくる。また、東京都や国でもコミュニティケアという考えが大きく打ち出された。東京都では、1972年には「杉並・老後を良くする会」をはじめ、1973年に「東京都ボランティアコーナー」を開設。その後さらに活動が活発化し、東京ボランティア・センターが立ち上がった。

## ○吉澤さん

吉澤さんの学生時代(1950年初)、大学での休暇を利用して養護施設に泊り込み(自らの食料(米)持参)子どもたち及び職員と生活を共にした。主として学習、生活指導、子どもたちの衣類修理の活動で、その活動過程で感ずるところがあり学生や地域住民への活動参加を呼びかけた。とくに、学生の若きエネルギー結集が、子どもたちの生活への刺激となり、心のふれあひの大きさを実感した。

戦時中の考え方に、減私奉公や奉公という用語に表されているように、自らを犠牲にしての働きが協調されていたため、その考え方の払拭の意味で、ボランティアという用語の使用を打ち出した。ところがボランティア活動の名称のもとに募金活動をし、自らのポケットマネーにしていた例などが浮上。それへの対応として、この用語をなくす運動を展開しようかとさえ思われた。ボランティア活動とは、生きとし生ける人間として、自らの持てる能力を生かし、誰もがそれ

なりに社会活動にかかわるべく、犠牲にも近い役割を果たすことの意義を強調することが重要であると思った。したがって、その意を持って、自らを生かし自ら主体的に活動の場をもつことは当然のことの思いが、コーナーやビューローの根底にあった。

その後主婦(女性)の活力をも社会活用する風潮が高まり、文部省婦人教育の領域での普及が目立ってきた。

当時、東京都社会福祉協議会(以下、東社協)企画部の心ある職員との話し合いで、東社協の一部に椅子一つ、机一つを提供してもらい、ボランティア東京ビューローの名称のもとに現在のボランティアセンターの出発をみた(1963年)。

その約10年後のこと、初めて民間から起用された女性民生局長の強い理解のもとに都の出先機関の一部屋を拠点とし、390万円の活動予算によって東京都ボランティア・コーナーの開始となった(1973年)。少ない予算ではあったが、行政とボランティア(公、民)の機能分担の在り方を考える契機として、またその課題を含んでのスタートとなった。

## ○坂巻さん

坂巻さんが、最初に福祉に関わりを持ったのは、学生時代の肢体不自由児のキャンプだった。当時はボランティアだからと言って、今のようにお金を出してもらったり、印刷機を貸してもらったりというようなことはなく、自分でアルバイトをしたお金でイベントを企画したり、無料で講義をお願いしたこともあった。1981年に東京ボランティア・センターを設立し、坂巻さんは運営委員として都民に広めようとボランティア祭りを発案するが、賛成の声ばかりではなかった。いろいろな人が楽しく参加し、その中から自分の生き方に目覚めるのもボランティアと考えていた。その一つとして、車いすミニマラソンを企画し、様々な人が参加した。

今では、ボランティアも広がり、有償ボランティアやNPOが誕生した。多様なボランティアの中で、今一度、志を確認していかなければいけない。

## ○山崎

1990年代後半は、阪神・淡路大震災をきっかけとしてボランティア元年と言われているが、ボランティアはこの頃から始まったわけではない。しかし、震災をきっかけに、行政とは異なる、行政ではできない活動として、多くのボランティアが集まり、社会的にも認知された。また、少子高齢化が急速に進み、経済も右肩上がりではなくなってきた現代、ホームレス、環境、不登校等社会的問題も出てくる。経済的な対価を目的としない組織の活動の必要性や、企業や労働組合のCSR、経団連や連合団といった様々なところがボランティア活動に着目した。また世間の追い風となり特定非営利活動促進法が成立した。

総合ボランティアセンター構想の流れから、ネット

ワーク作り、幅広い市民活動、行政との協働、ミッションの明確化とボランティア・センターからボランティア・市民活動センターへと機能を拡大、強化してきた。

我々は、強くしなやかな社会を目指し、いろいろな方とのネットワークや公私協働のあり方とできることを、次の世代を考えながら進めていく必要がある。

## ○まとめ

ボランティアは特別(変わり者)という時代から、主体的につながりを支える社会を目指し、ボランティアは自然なものとして広がっていく。住民一人ひとりが「お互いさま」という心で広がり、根付く仕組みづくりをし、ボランティア風土を絶やさないようにしていきたい。

全国一律ではなく、様々な地域差や特性を考えていく点において、ボランティアの力が必要となる。思いはどこにあるかを考え、思いをどう表現していくかが、ボランティア活動が地域を変えていく運動体の原点になっていくのではないだろうか。

## 3 分科会担当者コメント

現在のように、ボランティアという言葉も定着していない30年前から今日に至るまでは、ボランティア・市民活動が制度化されてきた30年だった。当日のパネリストをはじめとする各個人発意の思いや運動が根っこにあり、それが今に繋がっているということを感じた。

自分が生かされている恩恵を社会に還していく、この思いがボランティアの原点であることも改めて感じた。



(左から順に)安藤さん、吉澤さん、山崎、坂巻さん

## 分科会

## 2

## 語って、気づいて、見つけよう～ボランティア+???～



グループワークの様子

**日時** 11月12日(土) 16:00～17:30 **参加者** 20人

**会場** 国際ファッションセンター 10階 107

**出演者**

池畑 雄太さん (渋谷社会福祉協議会しづやボランティアセンター)  
 田村 晃一さん (武蔵野市民社会福祉協議会ボランティアセンター武蔵野)  
 吉良 裕美子さん (渋谷社会福祉協議会しづやボランティアセンター)

話し合う

**1 概要**

4～6人のグループにわかれ、提供されたテーマについて考えた。自分の経験や考えを語り、相手の体験から新しい視点を見つけ、明日からの自分にプラスになるものを見つけ、そして新たな出会い・つながりを持ち帰ることをテーマに話しあいを行った。

**2 主な内容**

「ボランティアって自分にとってどんなもの？一言で表すと…」、「今日はこれを話したい！今日このグループでこれを聞いてみたい！」の2つのお題について個人で考え用紙に記載、グループ毎に発表、ディスカッションをし、それらを踏まえ明日から自分にプラスできることを言葉にして書き、全体で発表し共有した。

○グループワークで出た意見

(1)「ボランティアって自分にとってどんなもの？一言で表すと…」

- ・「出会い」…人・言葉との出会い。サラリーマン後ボランティアに出会い人生が変わった。
- ・いろんな人に出会い生き方も変わった。生きがいでもある。

(2)「今日はこれを話したい！今日このグループでこれを聞いてみたい！」

- ・「ボランティアをしようと思った理由、ボランティアをして自分の中での変化」  
→高校は義務教育ではないと周りから言われ今までの自分とは違う新しい一歩を始めたかった。  
夏休みに障害児学童ボランティアに参加。障害者に偏見はなかったが身近に接して戸惑いを感じた。  
最終的に壁をもっていただけだと思っていたことが分かったことが変化。

(3)「明日から自分にプラスできることを言葉にする」

- ・初心その一歩
- ・出逢いを大切に
- ・一日一日ありがとう
- ・じっくり焦らず相手の事を考え自分にやれることをやる

多種多様な方と様々な視点からディスカッションができ、ボランティアに対する考えを再確認するとともに新しい視点を持ち帰り新しいネットワークも繋がった有意義な時間となった。

ネットワークを作り意見交流し、この分科会からまた新しい何かを始めていただければと新しいネットワーク構築・ボランティア活動の発展を願いとめとした。

**3 分科会担当者コメント**

この分科会の大きな目的は「形(言葉)にして持ち帰る」とこと「今日のこの分科会が、新たな一歩(スタート)となること。参加者へのお土産が「昨日までの満足」ではなく、「明日からの糧」となるようにするには…と考え、今回のような企画に至った。分科会自体が短い時間だったので、参加者の方には1分+5分と時間を区切って、個人ワークの成果を発表していただいた。限られた時間内に表現するというのに慣れていない方もおいでだったが、懸命に取り組むみなさんの中から、熱気が生まれ、笑いが起こり、そしてつながりへと発展していく過程があったことで目的が達成できたかと思う。参加者自身が形にした言葉と、この場で生まれたつながりが、明日への糧となることを願ってやまない。



今日の思いを持ち帰ってもらうためのお土産 (渋谷区の作業所の製品)



日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 36人

会場 青山学院大学 9号館 922

### 出演者

#### ◆コーディネーター

早瀬 昇さん(社会福祉法人大阪ボランティア協会 常務理事)

#### ◆パネリスト

星野 昌子さん(NPO法人日本国際ボランティアセンター 特別顧問)

安藤 周治さん(NPO法人ひろしまね 理事長)

筒井 のり子さん(NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会 理事/龍谷大学 教授)

山ノ川 実夏さん(三井住友海上火災保険株式会社 総務部 地球環境・社会貢献室 課長)



## 1 概要

ボランティア・市民活動のこれまでを、コーディネーターからの説明と、NGO、地域作り、ボランティアコーディネーター、企業の社会貢献活動それぞれの分野での先駆者である4名のパネリストの活動の歴史を聞いて振り返った。

その後、参加者からの質問やコーディネーターからの話題提供に対してのパネリストの取り組みや考えを聞きながら、これからのボランティア・市民活動推進をどうすれば良いかとのテーマについて考えた。

## 2 主な内容

### ○導入部

コーディネーターから分科会のねらい「ボランティア・市民活動の意味や未来を探す」ことについての説明と、戦後のボランティア・市民活動の歩みについて年表を使用しての発表があった。また、それぞれのパネリストがどのような分野の先駆者であるかを紹介した。

### ○実践報告

#### ①発表者:星野 昌子さん

青年海外協力隊第一期に参加した経緯や活動についての報告があり、その後NGOとして海外で活動する中での行政や他団体等との関わりの変化について説明。行政、企業、NGO等いろいろな団体が一緒になって活動していくには、それぞれの目的が違うことでの難しさがあるが、無理にそれらをあわせるのではなく、いろいろな立場でいろいろな目的を持ちながらも同じ方向を目指していける社会が求められており、そのような社会を目指していくことが、ボランティアの未来につながっていくとの話があった。

#### ②発表者:安藤 周治さん

中国地方の過疎と現状について、過去から現在までの写真を交えて説明。「ここで暮らしたい」という人たちの思いを受け、過疎地域で住民への聞き取り調査を実施。株式会社やNPOとして、調査結果から得たニーズに対して「道の駅」や「買い物バス」など社会実験を繰り返して、過疎を逆手にとった地域の活性化・まちづくりを行ってきた。

「さー、大変だ」という声から始まるまちづくり、暮らしの質を高めるまちづくり、この二つの視点が、これからの地域活性化の活動に重要との話があった。

#### ③発表者:筒井 のり子さん

学生時代に実習を通じて出会い働くようになった市民団体で経験してきたことを交えて、ボランティアコーディネーター組織が時代にあわせて変わってくる

こと、またその重要性が年々増してきていると感じている。

ボランティア活動の発展には、コーディネーターとその人達が行うコーディネーターが重要になってくるとの話があった。

#### ④発表者:山ノ川 実夏さん

創業100年をきっかけに始まった自社の社会貢献活動の取り組みの20年を、合併など会社の変遷、社員の社会貢献活動団体で行っているNPOへの助成金寄付活動や、水辺の環境保全活動など具体的な事例を挙げて説明。2000年代以降「CSR」という言葉が広まるにつれて、周囲の理解も深まり社会貢献活動をしやすくなった状況がある。

会社が、また社員一人ひとりが地域の社会の課題に気づき解決へ向けた活動に参加していくことが、これからの企業の社会貢献活動にとって重要であるとの話があった。

### ○パネルディスカッション

参加者からの「まちづくりの中での社協の役割は?」といった質問や、コーディネーターからの「行政との関係」「NPO、NGOとの関係」「広報の方法」などの話題提供に対して、それぞれのパネリストが自身の取り組みや、考えについて発言を行った。

どのパネリストも自分たちの考えをしっかりと持って、協力するところと譲らないところをはっきりとさせる必要性を感じているとのことであった。

### ○まとめ

やりたいことを突き詰められる幸せ、現場で活動することの楽しさを感じられる幸せ、活動によってみんなが喜ぶ場面にいられる幸せ、こういった幸せを感じられることがボランティア・市民活動にとって重要ではないか。

そういった活動するにあたっては自分の価値観に自信を持つことが重要であり、その思いが社会を良くしていく。そこにボランティア市民活動の未来があるのではないだろうか。

## 3 分科会担当者コメント

事前申し込みは43名だったが、当日はその8割の34名と当日参加2名の36名、事務局ボランティアと登壇者含め47名だった。コーディネーターの早瀬さんが戦後の日本のボランティア・市民活動の歩みを丁寧にたどった後、4名のパネリストからその歴史の中でどのような活動をしてきたか、どういう背景で活動に入ってきたのかをお話いただいた。

海外協力、過疎での活動、全国的な活動、企業のCSRの取り組みなどボランティアの多彩な活動のあり方を歴史的な流れを通して学ぶことが出来たのは有意義なものだった。事務局を担当して本当に良かった。しかし、多くの皆さんに参加いただけるような宣伝が弱かったことが大きな反省点である。



安藤周治さんの報告



出演くださった5名の方々

## 分科会

## 4

## ボランティア憲章をつくろう！～日本人のボランティアリズムを考える～



日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 17人

会場 青山学院大学 1号館 121

## 出演者

岡本 榮一さん(元・大阪ボランティア協会 理事長/西南女学院大学 教授/ボランティアリズム研究所 所長)  
三輪 真之さん(計画哲学研究所 所長/元・早稲田大学 客員教授)

## ◆進行

枝見 太朗さん(富士福祉事業団 理事長)

話し合う

## 1 概要

地域における様々な生活課題は、公的な福祉サービスだけでは対応できず、ボランティアやNPO、市民によるきめ細かな活動の必要性は高まっている。東日本大震災後も、地域を支え合い、共に生きていこうとする力は、地域の再生に向けて動いている。しかし、一方で、ボランティアなどの活動は、社会の仕組みや歯車に組み込まれ、都合のよい労働力や、行政や企業の下請け先となる危険性もはらんでいる。これらの両面性を、どのように認識しておくべきなのか。また、ボランティアとはそもそも何なのか。この分科会では、ボランティアの意味を深く考え、ほっとけない、という一人ひとりの発意から始まるボランティアの本質を「憲章」として表すことを参加者と考え合った。

## 2 主な内容

## ○岡本榮一さん

ボランティアリズムには3つあり、①アメリカ・イギリスでよく使用されるVolunteerismは、ボランティア活動を支える精神、自発性尊重などの活動原則(自発性・無給生・社会性など)を意味する。②Voluntarismは、<意志>の働きを先行させ、それを重視する「主意主義」の立場を表す。③Voluntaryismは、民間活動(Voluntary Action)の根っこにあり、「NPO」「Voluntaryセクター」などの民間活動やその運動を支える思想である。特に、国家=行政の対置概念であると説明した。これらのボランティアリズムは「課題解決」に向かって、運動的意味で<弾道>を描く。それは、理性的働きとは違い、精神・意志・志・願望、ボケーション(使命)などと関係がある。続けて、日本のボランティア活動の歴史を6つの活動分野から俯瞰し、ボランティア活動の支援組織と支援行政の役割の再考が必要と指摘した。その後、阪神淡路大震災で120万人のボランティアが活動し「ボランティア元年」と言われる1995年や、NPO法制定の1998年辺りから日本は「市民社会」に突入したと話した。市民社会とは、ブルーリズム(価値の多様性)を前提に、政府(行政)、企業(営利組織)、NPO等のボランタリー組織(非営利組織)の3セクターが独立しながら影響しあう。この関係は、人権擁護、民主主義などを共有しつつ、各セクターが独自の役割を果たし、時に他のセクターと協働し、時に批判(アドボケート)する<切磋琢磨しあう関係>だと説明した。また、市民社会では、各セクターが地域や国家を越えて活動できると話した。

続けて、ボランティアと政府(行政)との関係には、①国家による全体主義的な専制・動員のモデル、②中央政府・行政主導の補完モデル、③政府(行政)とボランタリー組織との、対等な独立・協働モデルの3種があると説明した。そして、近年「協働」が安易に使われ

るが、本来、「協働」の前提には、分離(セクターの固有性確認)、独立(ミッションの明確化、主体性、責任制)が必要であると話し、日本では「分離・独立」の理念が不足していると指摘した。

## ○三輪真之さん

計画哲学とは人間哲学を強く意識した計画論である。この人間哲学の前提となる根源範疇には、「認識論的」と「存在論的」がある。「認識論的」な概念のキーワードは、「信じる」「異なる」であり、具体的には、こころ、精神、靈魂、神仏、いのりなどがある。一方、「存在論的」な概念のキーワードは、「証される」「同じ」であり、もの、物質、宇宙、からだ、いのちなどがあると説明した。この視点から見ると、日本人は本来、「認識論的」であり、「認識論的なもの」を好み、「認識論的人間」を評価する。また、「ボランティア」も「認識論的」な概念であり、ボランティアには本来、「認識論的な概念」が似つかわしく、「存在論的な概念」には馴染まないと話した。次に、憲章について、欧米型の憲章「charter」は、契約内容を記録するための「証拠文書」という特徴がある。一方、市民憲章、児童憲章など日本型の憲章は、信条・信念・主義など、祈願内容を唱えるための「誓いの言葉」という性格を持つ、と説明した。市民憲章の例として、秋田市民憲章を挙げ、自分にできることは何かと想像することが大事と指摘した。また、憲章作成の前提として、この憲章が、国内向けか・世界向けか？ボランティアの意識・対象・背景・実績などに関する吟味が必要とした。

最後に、ボランティア憲章の私案として、以下を挙げた。「わたしたちは、わたしたちのこころをつたえるために、わたしたちにできることをします。ともに誓いましょう 愛を、希望を、行動を」

## 3 分科会担当者コメント

ボランティアだからこそ、成し得ることがあると思う。一方で、ボランティアは、体制に誘導され得るし、行政や企業に組み込まれたり、廉価な労働力として使われる現状もある。制度の含み資産と捉えられているのでは？と思うこともある。このように、主体性に基づく活動も、様々な思惑に絡め取られる危険性を含む。そこで、ボランティア憲章とは、ボランティアとは何かを示し、私たちの態度を宣言し、巧みな思惑に警鐘を鳴らすものだと思う。これにより、ボランティアの本質を示し、ボランティアの強みを守ろうとしている。ボランティア憲章は、まだこれからつくるものだ。憲章自体に意味がある他に、実は策定の段階に様々な人たちが入り、意見を交し、創り出す過程に深い意味があると思う。



「ボランティア」について考え合った(左から岡本さん、三輪さん)



会場とのやりとりも

## 分科会 5

ボランティア活動が生み出す効果・意義の日本版可視化ツール公開分科会  
～災害時と日常の地域での活動の効果・意義について考える～

**日時** 11月13日(日) 9:30～12:30 **参加者** 28人 **会場** 青山学院大学 1号館 138

**出演者**

## ◆コーディネーター

村上 徹也さん (市民社会コンサルタント/日本福祉大学 教授)

## ◆アドバイザー

足田 恵子さん (杉並区社会福祉協議会/NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会 理事)

## ◆学生報告者 (被災地で活動した学生ボランティア)

安部 詩織さん (立教大学 経済学部 2年生)

上原 直人さん (星薬科大学 3年生)

直井 友樹さん (東京理科大学 薬学部 4年生)

深澤 悠さん (東京外国語大学 外国語学部 3年生)

横坂 愛さん (東京学芸大学 教育学部 4年生)

## ◆協力

ボランティア活動が生み出す効果・意義を可視化する研究会

話し合う

**1 概要**

東日本大震災の被災地では無数のボランティア活動が行われてきた。しかし、災害時のボランティア活動の盛り上がり、平時の地域での活動につながらないという課題も、災害のたびに指摘されている。災害ボランティア活動にも、日常の活動に共通する効果や意義があるのではないのか。

この分科会では、「ボランティア活動が生み出す効果・意義の日本版可視化ツール」の視点をもとに、災害時と日常のボランティア活動をつなぐ効果・意義について考えた。

**2 主な内容**

○分科会担当者より、この分科会の趣旨・視点について説明

・タイトルにもある「ボランティア活動が生み出す効果・意義の日本版可視化ツール」とは、ボランティア活動が生み出す「伝えにくい価値」を見えるようにするために、ボランティアと関わる人たちが作成を進めてきたツールである。最初はイギリスのツールを用いて、自分たちの活動を当てはめ可視化することを試みたが、なかなかしっくりこない部分があった。そこで、そのまま日本で使うのは難しいと考え、日本版の作成を進めてきた。

・そんなとき東日本大震災が起これ、多くのボランティアが被災地内外で活動する中、これまで考えてきたボランティアの効果・意義は災害時にも当てはまるのか、このツールは災害時のボランティア活動の効果・意義の可視化にも利用できるのかと考えた。また、災害時のボランティア活動の盛り up を日常の活動にもつなげていくために、共通する効果・意義、災害時と日常時の活動をつなぐ効果・意義を考える場とする。

○「ボランティア活動が生み出す効果・意義の日本版可視化ツール(Ver.1.0)について説明

・コーディネーターの村上さんより、本ツールの目的、使用する対象、使い方などの説明があった。  
・本日は直接このツールは使用しないが、効果・意義を考える際の視点として参考にしてほしい。また、持ち帰り、ぜひ職場等でやってみてほしい。

○被災地で活動した学生ボランティアとのパネルディスカッション

・安部さん、直井さん、横坂さんの3人の学生ボラン

ティアに、それぞれ①どんな活動をしたのか、②被災者にとってどんな意義があったと思うか、③そこで何を得たのか、の3点について、フリップに書いて説明してもらった。

・アドバイザーの足田さんが、より詳細な部分について質問して引き出し、ポイントをまとめた。

<まとめ>

・3人に共通することとして、本当に役に立つことができたのかという無力感を少なからず感じており、だからこそ戻ってきてからも多くの人に伝えたいと考え、行動している。代弁者となっている。これは中長期的・派生的な効果があると考えられる。

・ボランティアがいることにより「一人じゃないと感じた」という住民の方の話があった。何をしたかだけでなく、いることの存在そのものに効果があったと言える。

・自分と相手だけの関係性でなく、コミュニティにどう効果があるかを見ていくことも重要である。

○グループディスカッション

・グループに分かれ、各グループに学生ボランティアが一人ずつ入った。自己紹介を兼ねて、参加者が自分が関わっているボランティア活動に学生を誘うという設定で、魅力的な呼びかけを一人1分で行なった。

・学生ボランティアより、参加者の呼びかけに対するフィードバックを行なった。そして、それを参考に、日常のボランティア活動の効果・意義を多角的に考えた。

・学生ボランティアの話参考に、被災地でのボランティア活動について、そして参加者それぞれの日常のボランティア活動について、①自分から見た効果・意義、②自分にとっての効果・意義を考え、共通点を考えた。

○発表・共有

<ボランティア活動から得られたこと>

・人とのつながり

・達成感。日常の活動でも達成感をもってもらえるように、効果をフィードバックできれば。

・自分が関心のある分野やテーマの情報が得られる。

・課題を知ることができた。それにより、危機感をもった。

・地域への思い入れをもった。

<災害時と日常のボランティア活動を比べてみて>

・災害時はテレビ等で見える部分が多いので伝わりやすいが、日常的な活動も表に出していけないといけない。

・日常の活動でも緊急性のある活動は多くある。緊急

性や楽しさを伝えていくことが大切。

・日常の活動をどれだけしているかが、災害時にどれだけ動けるかに関わる。日常の延長である。

○参加者の発表を受けてコーディネーターのまとめ

・日常の活動を積極的に伝えてきたか、それがないとギャップが埋まらない。

・共感をどうつくるか。社会課題を解決していくことを見せたい。

・日常の活動をしている人たちが多い地域が、災害時にも強い地域である。行政などにもその価値を示していくことが重要である。

・自分にとっては、ボランティア活動は自分を活かすチャンスである。できあがったものではない部分に関わるため、ボランティアになることができる。なぜボランティアなのかを考え、素人性の価値が伝わるような伝え方や見せ方、プログラムを考える必要がある。

**3 分科会担当者コメント**

今回は、災害時と日常のボランティア活動の効果・意義の共通点を考えることにより、災害時のボランティア活動の盛り up を一過性のものに終わらせず、どのように日常につなげていくかを考えることを試みた。学生ボランティアの報告からは、自分にとって、関わる相手にとって、そして共感者を増やすなど多様な視点で向き合っている様子が伺えた。

参加者からは、「伝えることの大切さを実感した」「共感できるかどうか(自分ごととして捉えられるか)が大事だと感じた」などの声も聞かれ、今回のねらいであった災害時と日常の活動のつながりと、効果の発信を意識したコメントも見られた。

「日常の活動の効果を積極的に伝えてきたか」。これは、ボランティア個人だけでなく、ボランティア活動を推進・支援する我々ボランティアコーディネーターにとっても大きな課題である。今回の議論を踏まえ、あらゆるボランティア活動の効果・意義を発信できるよう、特に数値で表しにくい効果や、すぐには表れにくい中長期的・派生的な効果を可視化するツールのブラッシュアップを目指したい。

## 分科会 6

NPOの根本は「ボランティア」  
～自発的な個人が支え、支えられるNPOをめざして～

日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 16人

会場 青山学院大学 1号館 13S

## 出演者

## ◆事例報告

鹿野 順一さん (NPO法人@リアスNPOサポートセンター 代表理事)  
大久保 朝江さん (杜の伝言板ゆるる 代表理事)

## ◆聞き手

横田 能洋さん (茨城NPOセンター・コムズ 常務理事・事務局長)



## 1 概要

社会福祉協議会やNPOなど、住民を支える活動をしている団体も、東日本大震災による被害を受けた。特に事業を中心に展開してきた団体は「顧客」を失うこととなり、地域の人たちを支える活動の継続が困難になっている団体も出てきている。しかし復興は外部からの支援だけでは成り立たず、地元の団体が従来の機能を回復し、事業を再開できるようになることが欠かせない。本分科会では、被災しながらも、地域を支える活動の再開に向けて、地域とともに歩んでいる2つの団体からお話を伺った。

## 2 主な内容

○@リアスNPOサポートセンター 鹿野さん

震災以降、31団体がNPO法人認証の申請をし、既に20団体が認証されている。沿岸部だけでは8団体が法人申請し、5団体が認証されている。新設法人のうち、震災支援関連の活動を行うと見られる団体は8～10団体。岩手県庁が5月に調査したところでは、被災したNPO法人が16法人。うち建物被害が13法人、書類や帳簿などの損失が10法人。被災がなかったのが32法人、その時点で連絡が取れなかったのが5法人、その他2法人。

@リアスNPOサポートセンターは平成15年に商店街活動の一環として新しい形のまちづくりを目指し、コミュニティビジネス支援事業を実施したところから始まった。私たちが講座の最中に被災し、避難。震災直後は避難所の運営を手伝ったり、被災地域への物資移送などを行っていた。4月頭に地域の人の協力で物資倉庫にもなる拠点を確保。社会福祉協議会には組織的なつながりはなかったが、個人的に知っている人がいたので、情報共有をしながら別々に動いた。そのうち、近隣の市時間で情報共有がされていないために、支援物資に偏りが出ていることに気づき、いわて連携復興センターを立ち上げた。

いわて連携復興センターは沿岸被災地域の情報を発信し、外からの支援をつなぐ、中間支援の団体のネットワーク。被災した人の支援はそれぞれの団体が独立して行い、中と外をつなぐ活動をいわて連携復興センターが担っている。

○杜の伝言板ゆるる 大久保さん

杜の伝言板ゆるるは情報誌の発行、NPO活動拠点の運営、IT化支援、高校生やシニア向けにNPOと出会う場づくりを行っている。震災直後からしばらくは毎日災害ボランティアセンターに職員を送り出した。杜の伝言板ゆるるが運営しているみやぎNPOプラザは、ガラスは割れたが電気も水も大

丈夫だったので、すぐに活動を再開し、NPOの拠点として活用いただいた。

まずはNPOの状況を把握。地元のNPOは活動をしていることが見えてきたが、そういうことはマスコミが発信してくれない。情報を発信していかないと「地元のNPOは動いてくれなかった」となる。そう思い、4月1日発行の情報誌は1週間遅れたが発行した。他にもパソコンの提供など、被災地でNPOが活動できるよう後方支援をしてきた。

その後、被災状況調査を行った。回答は51団体からあった。福祉施設はガソリンがないことで送迎ができず、利用者が減り、収入が減るといった二次的な被害があるのではないかと考えたが、やはりそういう状況が見えてきた。51団体中32団体が建物被害、39団体が経済的な間接被害を受けていた。施設が被害を受けているところはローンがあるところも多く、建て直すとしても二重ローンになってしまう。現地訪問も繰り返して寄り添い、資金的なところを支えようと「復興みやぎ」を立ち上げた。

○茨城NPOセンターコムズ 横田さん

社会福祉協議会は民間組織ではあるが制度に支えられている。行政や福祉の専門家、住民組織ともつながりが強い。一方でNPOは多分野。NPO同士の横のネットワークがあり、専門家とのつながりが強いところも多い。課題に合わせて柔軟に自らサービスを作り出す。

最も違うのは資金的な基盤。社会福祉協議会は一定の組織規模で長く続けられる。事業内容もほとんど変わらず安定している。一方でNPOは自由度があるが財源は安定していない。その分プロジェクトを柔軟に始められる。新たなプロジェクトをするたびにネットワークが広がって行く。地域の中でも外からの支援を受けるにあたって、NPOの方が柔軟で意思決定が早い。そこで役割が発揮できているのだろうと思う。

## 3 分科会担当者コメント

NPO関係者、社会福祉協議会のボランティアセンター担当者、地域のボランティア団体など、幅広い方が参加され、支援したい人をいかに被災地支援活動につなげるか、いかにNPOを支援するか、NPOと社会福祉協議会の連携はどうあるべきか、など多彩な意見交換が行われた。特に参加者からの発言で「最近、寄付先の相談をいただくことが増えたが、以前よりも寄付者の要望が具体的になっている」という発言が印象的だった。NPOの活動がより見えるようになり、寄付する側が「こんな活動を応援したい」ということを明確にして、選択するようになってきている。NPOもより積極的に情報を発信し、支援者も適切につなぐことで、寄付者も充実感を得ることができ、NPOへの支援の流れをさらに加速させることができるように感じる。

※なお、この分科会では「NPO」という言葉を単に「NPO法人」ではなく「民間非営利団体」という本来の広い意味で使用した。



(左から) 鹿野さん、大久保さん



グループワークを行う参加者の方々

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 69人

会場 共和フォーラム 2階 AB

## 出演者

桑原 英文さん(一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 代表理事)



## 1 概要

東日本大震災発生から8ヶ月。災害時、住民らが相互に助け合う「共助」はどうあるべきか。グループディスカッションを中心に、3つのテーマについて考えた。

## 2 主な内容

## ○導入部

宮城県山元町での支援活動を記録したDVDを上映。

グループディスカッションに先立ち、自己紹介も兼ねて、「その時、あの時、あなたは」というテーマで、「3月11日」「9月11日」について、各グループで話し合った。9月11日に、防災訓練、義援金を募ったりと活動をした人がいる一方、記憶が遠のいている人もいるのではない。情報が届かず、全体像が見えにくくなったということもある。現在は仮設住宅の生活を見守る生活相談員などが活動をしている。9月11日を機に、死亡届を出す家族が多くなり、行方不明者が少なくなった。「11月11日」(震災から8ヶ月)について、今できることをみんなで考えたい。

## ○グループディスカッション

グループディスカッションへの問題提起と主たるテーマは以下の3つ。各テーマについて、各々が用紙に意見を書き出した後、10分間でディスカッションが行われた。各グループでは、時間が足りなくなるほど様々な意見が交わされ、活気のある有意義な時間となった。ディスカッション後、数グループから意見を発表。最後のテーマについては、時間が迫っていたため、ディスカッションは行われなかった。

## 〔テーマ①〕

災害時に、要援護者をはじめ一人ひとりの命を救うために、日頃から、どのようなことに取り組みばよいでしょうか？

## &lt;問題提起&gt;

地震発生、沿岸部に迫る津波。その中で、日頃の取組みを生かした安否確認、避難誘導、防災・減災対策はどうだったのか？ 民生児童委員の災害時要援護者支援、自主防災組織などによる地域防災力は活かされたのだろうか？ 使命感を持って行動した民生委員、消防団など支援者の犠牲者は食い止めることはできなかったのか？

## &lt;発表&gt;

・誰かの命を助けるということは分かるが、まずは自らの命を優先する。他の人を救うという前に、自分の命を考えないといけぬ。今回のような事案があったらいけない。今回の震災を風化させず、いろんな人

に伝える。記憶を記録していくということが必要。  
・輪島市社協より。地元の顔の見える関係づくりが、いざという時に助けになる。その後、災害ボランティアの会を立ち上げてつながっている。風化させない取組み。「伝えよう能登半島地震」という冊子、DVDなどを作成。被災者の声を集めている。伝え続けることの大切さ。つながる、続ける、伝承することが大事だと思う。  
・教育が必要。子どもに、自分の命は自分で守るということ。それで親、祖父母と一緒に学ぶ。学校、家族、地域で教える。

## &lt;まとめ&gt;

「津波でんでんこ」という言葉がある。津波がきたらでんでんばらばらに逃げろという意味で、これも伝承。被災者責任、被災地責任として、経験した者は伝える責任がある。また、防災福祉という視点も大事。

## 〔テーマ②〕

災害時のボランティア活動、支援活動をより良いものにしていくために、どのようなことに取り組みばよいのでしょうか？

## &lt;問題提起&gt;

生活の再開、復旧活動の中で、駆けつけたボランティア、全国・世界からの支援は、被災した方々を勇気づけただろうか？ 私たちは平常心を忘れ闇雲に支援してしまったのではないのだろうか？ 被災した人々の支援依存を高める支援ではなかったのだろうか？

## &lt;発表&gt;

実際に被災地に行ったが、基本的なことがわかっていない。自己完結をするための、基本的な訓練が必要。

## &lt;まとめ&gt;

そもそも、支援するということはどういうことなのか。くみとり上手、助けられ上手になるにはどうすればいいかを考えなければいけない。

## 〔テーマ③〕

被災した地域の復興に向けて、地元の住民や支援機関と、どのようなつながりを持ち、支援していくことが望まれるでしょうか？

## &lt;問題提起&gt;

生活支援・復興期を迎えて、被災地の住民は、安心・安全・安住の暮らしを得たいが、自分や家族のことが精一杯な中で、どうやって地元の自立的復興をなしていくのか。災害ボランティア、支援活動の継続を自分の住む地域づくりに活かそうとしているのか？

## &lt;発表&gt;

(桑原氏の指名により)宮城生協ボランティアセンターより。一概に被災地、被災者といってくれるという声も聞かれている。自分たちの暮らしを自分たちで立て直したいという声もある。物資をもらうのではなく、自分で好きな物を買えるということを実感できたという声がある。一方で、まだ支援が必要な人がい

る。仕事がなく困っており、何かすることを一緒につくっていきたく思っている。そのための支援をこれからもお願いしたい。

## ○全体のまとめ

『被災者』にしないために私たちに何ができるのか。一人ひとりの状態が違うということと、その支援をどうするか。与え続けるのではなく、創り上げるということを考えなければいけないのではないか。本日の話を、今後の皆様の活動に活かしていただきたい。

## 3 分科会担当者コメント

講師、桑原さんのポイントを押さえた展開と参加されたみなさんの意欲がうまくかみ合い、テンポよく話し合いが進められ、たくさんの学びと気づきがある時間となった。

3月11日、9月11日、11月11日と区切りながら、私たちの活動を考え、支援とは何かをもう一度考えてみることで、被災者ではなく、一人ひとり違う人がいること、助けられ上手になるなど、日頃からの取組みを振り返りながら、今後に向けて考える機会を作り出せた。

伝えて続けることは、これから大切な活動になる。分科会を担当した私は、1995年阪神淡路大震災をきっかけに、都立高校PTAの方と市民防災研究所が創った天ぶら油を燃やすコンロから災害を考えるサークル活動を続けているが、巨大地震からの大津波と原発事故を伝え、意識して行動していく思いを新たにできた。



全体のまとめを行う桑原さん

## 分科会 9

被災者主体のボランティアコーディネーションを考える  
～多様な市民の参加による力強い復興を目指して～

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 96人

会場 共和フォーラム 3階 AB

## 出演者

## ◆コーディネーター

後藤 麻理子さん (NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会 理事・事務局長)

## ◆パネリスト

長谷部 治さん

(神戸市社会福祉協議会/災害ボランティア活動支援プロジェクト会議/NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会 理事)

志賀 美樹さん (浪江町社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター)

大塚 真光子さん (柏崎市社会福祉協議会地域福祉課生活支援係)



## 1 概要

東日本大震災発災後、時間の経過に伴い、被災者の暮らしやニーズは大きく変化する時期に入った。

救済期のみならず生活復興期においても、被災された方々に寄り添って、その生活課題に取り組み復興につなげていくために、市民によるボランティア活動は重要である。

そして、ボランティアの共感力と自主性を高め、その力が発揮されるよう状況の変化に即したボランティアプログラムづくりや、被災地内外でボランティア希望者の相談にのり、活動先へ送り出すボランティアコーディネーターの役割もますます重要となる。

この分科会では、「被災者主体」の視点を理解し、生活復興期における支援に焦点をあて、ボランティアコーディネーションに必要な視点や進め方について、震災後のボランティア活動を現場でコーディネートしてきた方々のパネルトークより考えた。

## 2 主な内容

- コーディネーターより、この分科会の趣旨・視点についての説明があった。
- ・3名のパネリストの活動拠点が福島のため、事例は福島中心。
- ・発災直後の時期ではなく、生活復興期におけるボランティアコーディネーションに視点をおき、「これから」の話が中心。
- ・どのような視点をもっていれば支援者と被災された方双方の想いがつながるのか。

## ○3人のパネリストから実践報告(各10分程度)

- ・長谷部さん  
絆をつくらう、大切にしようと言われているが「絆(きづな)」づくりをしていくためには、被災地での小さな絆一つひとつ大切に、それを更につないでいく事をしないと本当の絆づくりは出来ない。また支援のニーズがあっても「助けてもらいたい」という具体的なウォンツが伴っているわけではない。そのウォンツをどう引き出せるかがボランティアコーディネーターの力。

## ・志賀さん

浪江町の現状報告。ボランティアの何かしたい、どうにかしたいという気持ちと現地のニーズは一致しない事もある。ボランティアをしたいという電話はかかってくるが、こういうボランティアが欲しいという相談はあまりない。生活支援相談員が困りごとを拾ってきてくれている状態だ。未だに何も調べずにニーズ確認もなく来るボランティアもいる。被災モードから

通常モードに戻すシフト転換の視点が必要だ。そのためにはコーディネーター自身が日常のリズムにならないと難しい。そのために支援を断る事もあったが、時には「やらない勇気」も必要だと考えている。地域の人ひとりで虚しくなる事もあるのが現状。もとのコミュニティを維持することが出来ない現状がある。新たなコミュニティ・絆を再構築していく事が課題だ。前向きな人、依存してしまう人、住民の意識の差が出てきている。

## ・大塚さん

中越沖地震の際に感じたが、活き活きと生きる事を支援するという視点を忘れてはいけない。生活支援相談員としての姿勢は「寄り添うが何でもやるのではない」ということ。やってあげる事が本当にその人の為になるのか、話し合う事に重点をおき、人々の自立を考えて対応してきた。生活支援相談員は解決者ではなく、つなぎ役である。地域には必ず力がある。

## ○ニーズの捉え方、ボランティアコーディネーターのスタンスについて。

## ・長谷部さん

平常時では、ボランティアしたい人と求めている人に会わずにコーディネートすることはない。災害時に省かれてしまいがちな丁寧なコーディネート。生活復興期においては、平常時のコーディネートに近づける対応をしていく必要がある。ボランティアは「派遣」されるものではない。「紹介とリスクの説明」を行い、「(ボランティアが)自分で選択する」という過程が大切である。

## ○会場とのディスカッション(質疑応答)

## ○最後にコーディネーターより

「ボランティア=外部の人」という意識になりつつあるのではないか。仮設住宅では自治会が立ち上がり、キーパーソンが出てきた。今後は被災された住民自身が被災地復興の主体・担い手となるように配慮することが必要である。被災地全体で「参加の力」を高める取組みを展開していくことが大切だ。

[これから]を考える上での [キーワード]をそれぞれパネリストに提示してもらった。

大塚 さん:『空気・リズム・ペース』

長谷部さん:『用語に騙されない』

志賀 さん:『(浪江町民が)もともと持っている力を引き出せる支援を』

## 3 分科会担当者コメント

今回は、被災者の暮らしやニーズが多様化し大きく変化する「生活復興期」のボランティアコーディネーションに焦点をあてて、「これから」を考えることを試みた。90分という短時間の中でまとめることは難しく、課題も残った。また、発災直後のボランティアコーディネーションや災害ボランティアセンターの設置方法などへの関心をお持ちの方も多く、「これから」を考える際に「これまで」の共有をすることの難しさを感じた。

しかし、現場の最前線でコーディネーションを行ってられる出演者の具体的な声から、被災者が置かれている状況や心理、ボランティアコーディネーターや生活支援相談員の役割やスタンス、その存在の重要性などを学び合うことができた。加えて、支える人を支える仕組みの必要性も今後の課題である。今回は主に福島を中心とした話であり、また、まだ客観的に振り返ることができる時期ではないが、悩みながらも進んでいる現場の声から、想いをつなぐことができたのではないかなと思う。

今後、地域により、ますます復興のフェーズやニーズも多様化していくであろう。しかし、今回の分科会で見た普遍的な視点を大切に、被災された住民自身が被災地復興の主体・担い手となるように配慮しながら、被災地内外の「参加の力」を高める取組みを続けていきたいと思う。



## 分科会 10

## 自然学校の社会的意義～災害対策の拠点として～



日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 32人

会場 共和フォーラム 3階 C

## 出演者

## ◆コーディネーター

中垣 真紀子さん (RQ東京本部/NPO法人日本エコツーリズムセンター理事・事務局長)  
今井 麻希子さん (RQ広報チーム/株式会社 yukikazet 代表)

## ◆パネリスト

広瀬 敏通さん  
(RQ市民災害救援センター 総本部長/NPO法人日本エコツーリズムセンター 代表理事/ホールアース自然学校創設者 会長)

学  
ぶ

## 1 概要

未曾有の大震災。公的機関の支援の手の届かぬ地域への支援にいち早く入り込んだのが、RQ市民災害救援センター (RQ)だ。分科会では先ず、東北という地域の抱える過疎高齢化などの課題を示し、それらの地域において自然学校がどのように機能しているかを説明した。そして、今回の震災を通じて自然学校や環境教育のネットワークを基盤としたRQがどのように活動したのかを検証することを通じて、自然学校の社会的意義について考察を深めた。

## 2 主な内容

当日は、前半が広瀬さんによるプレゼンテーション、後半が参加者との質疑応答に使われた。

## ○プレゼンテーション

「自然学校の社会的意義～復興と災害教育の拠点として」というタイトルにて

## はじめに:地域(地方)の課題

- ・地方の抱える、そして東北において顕著な「過疎化」の問題。減反政策の影響で耕作放棄された農地は復元するのが難しい状況になる。しかし農業を担うのは高齢者。跡継がない
- ・食料自給率の低下が問題となっている

## 自然学校の実態:

- ・自然学校は日本全国で認定されているもので3700校。認定されていないものも含めると1万近くあると言われている
- ・自然学校のプログラムを通じて若者が地域を訪れるようになった
- ・地域交流/農作業実習など、過疎集落での新しい交流が生まれつつある
- ・人と人、人と自然、社会をつなぐ組織的な活動への期待が高まっている
- ・自然学校への期待として「地域再生」がトップにあげられるほどに
- ・地域の担い手として・情報発信媒体として・誰ともどもつながれる(体験学習・交流・CSRプログラムなど)
- ・地域密着型の自然学校への期待

## RQ市民災害救援センターとは:

- ・宮城北部を中心に5ヶ所の拠点をもち、流されていない民家を避難所として暮らしている支援の届かぬ先の人への救援活動を中心に活動を展開
- ・短期的には:アウトドア技術・野外生活のスキルを活かすことができた

## 災害現場にある学び:

- ・生きる力、コミュニケーション能力を育む・自主性・現場の持つ力

## ポイント:

- ・情報共有を徹底し、ピラミッド型でない、指揮命令系統のないアメーバ型組織にしたことにより各自の自律性が育まれ、機敏な動きができた

## 災害ボラセンを自然学校にする:

- ・雇用(ビジネスを呼び込む、コーディネートができるなど)
- ・学びの場
- ・災害拠点
- ・エコツーリズム(都会の人が訪れる・地域経済の活性化)
- ・地域の未来を考える上での地元の人々の拠り所

## ○少人数での共有

講演の後、席の近いメンバー2～3名ずつで感想や自然学校の災害現場での活動について感じたこと、疑問に思ったことを自由に共有する時間を設けた。自然学校のこのような活動を知らなかったという人も多く、緊急支援ばかりではなく、今後の地域の再生に向けて自然学校に可能性を感じたとの声も聞こえた。

## ○全体フィードバック

共有タイムの後、自由に挙手を行なう形で質疑応答の時間が持たれた。

参加者からは「地域の再生に関わるためのコーディネートのできる人材が日本には少ない。これを育て、そういう人が地域で暮らせるようなくみをつくるのが期待されていると思った」「自然学校はレクリエーション施設と思われている。社会的な意義が理解されていないのではないか」などの意見があった。

また、広瀬さんからは「大学が保守化している。学生が怪我することなどを恐れボランティア活動に消極的なところも多い。大学の教育力が落ちていることが問題である」「自然学校の市場での信頼度がまだ低い。広報や経営面などの課題を抱えているところも少なくない」という指摘があった。今後は地域の復興において自然学校を活用した復興支援:地域資源の活用や雇用の創出などが期待されている。また、東北以外の土地においても自然学校を防災教育の拠点としての認知を高め、社会に活かせる場にしたいとの報告があった。

(備考) RQ市民活動センターは2011年11月30日を持って活動を終了。同年12月7日に一般社団法人RQ災害教育センターが設立され、広瀬敏通さんはその代表に就任した。

## 3 分科会担当者コメント

変わりゆく被災地の様子や支援活動からの学びを、関心を寄せ支援くださる人たちに伝えていくために、RQは各拠点からの活動報告をタイムリーに報告し多言語での配信も行なうなど、広報活動にも力を入れてきた。そして2011年12月27日にはRQを発展させた「一般社団法人RQ災害教育センター」が誕生した。さまざまな災害現場で救援活動にあたる仲間の支援や「災害教育」の調査・研究、普及推進に向けた活動など、これからも新たな活動が展開される予定だ。「災害教育」が日本にどのように根ざしていくか。これからの活動にも是非ご注目いただければと思う。この報告が新たな気づきや出会いのきっかけとなれば幸いである。



広瀬さんによるプレゼンテーション



参加者からも積極的に質問があった

## 分科会 11

一人で悩まないで！ 自殺に追い込まない  
～こころのケア活動に求められるボランティアの姿勢・役割～

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 37人

会場 共和フォーラム 2階 C

## 出演者

## ◆講師

西原 由記子さん（認定NPO法人国際ビフレンダース東京自殺防止センター）

## ◆講師助手

中山 町子さん（認定NPO法人国際ビフレンダース東京自殺防止センター）

村 明子さん（認定NPO法人国際ビフレンダース東京自殺防止センター）

東内 祐宏さん（認定NPO法人国際ビフレンダース東京自殺防止センター）

高根 裕子さん（認定NPO法人国際ビフレンダース東京自殺防止センター）

話し合う

## 1 概要

こころのケア活動に求められるボランティアの姿勢・役割について、講師の講義とグループワークとを織り交ぜながら、具体的事例を基にして参加者相互に学び合った。

## 2 主な内容

## ○東京自殺防止センターの活動紹介

- ・電話相談、緊急訪問、面接相談、エバグリーンの集い、コーヒーハウス開催、今後の課題
- ・自殺は生き物の中で人間だけがする行為、人間的行動である。

## ○グループワーク1 テーマ「人はどんな時に死にたくなるのか」

8グループごとにポストイットを活用して意見交換。グループごとに発表。

## 【発表内容抜粋】

孤独である、生きがい・目的が見いだせない、信頼する者に裏切られる、回復困難な病気、大切な人との別れがあった（死別など）、借金を負う、尊厳・存在意義が否定される、寝たきり状態になる、人生に行き詰る、これ以上なく幸せな時、他

## ○講義 「あなたにもできる自殺防止」パワーポイント資料に沿って説明

- ・「聞く」と「聴く」の違いについて
- ・死にたい＝助けてくれのサイン
- ・自殺したい気持ちについて尋ねる。

## ○グループワーク2 テーマ「死にたいと考えている人と接した体験等について」

8グループごとに各自の体験談を報告し合う。グループごとに発表。

## (発表内容抜粋)

- ・子どもの友達が自殺。接する機会があったのだが、話を聞いてあげられなかった。
  - ・死にたい、今包丁を持っているという方からの電話相談対応時の報告
- ツイッターでくり返し死にたいとつぶやく人に対し、受け止めるからどんどんつぶやきなよと回答したフォローアに感銘を受ける。 他

## ○ロールプレイ 「悩みを持つ人の相談の受け方(良い例、悪い例)」

- 悪い例) どんな人？いくつ？など事柄ばかり聞き、気持ちを聴いていない。
- 良い例) 感情に寄り添って聴く、話を引き出す。

## ○まとめ

- ・沈黙に寄り添うことが大切
- ・相談者からたくさんのことを教えてもらった

## 3 分科会講師コメント

参加者の発言を多くしたかったので、参加者がよくしゃべり、お互いの体験等が出て「自殺」を身近に感じてくださったのはよかったと思う。理屈でなく、身近に起こる問題として真剣に考え意見を交換されたのも良かったと感じている。

このようなお互いの刺激を通して、それぞれが、自分が活動するボランティアでよい刺激になり、視野を広げた活動になるのではないかと感じた。



グループワークの様子



上映後、出演者2名のお話を伺う  
(右奥から古屋さん、高橋さん、秋山さん)

日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 28人

会場 青山学院大学 2号館 221

### 出演者

#### ◆話題提供者

高橋 優子さん (NPO法人生活工房つばさ・游 理事長)  
古屋 将太さん (NPO法人環境エネルギー政策研究所 研究員)

#### ◆聞き手

秋山 映美さん (NPO・NGO草莽の集い)



## 1 概要

東日本大震災による原子力発電所の事故は、私たちにこれからのエネルギー政策について見直しを迫っている。この震災をきっかけに、これまで原子力発電所の建設反対運動という住民運動から、原子力発電の見直しという市民を広く巻き込んだ運動として関心が高まっている。この分科会では、エネルギーがテーマとなっているドキュメンタリー映画『ミツバチの羽音と地球の回転』を上映した後、NPO法人生活工房つばさ・游の高橋優子さんとNPO法人環境エネルギー政策研究所の古屋将太さんからお話を伺った。市民の立場でエネルギー問題に取り組むお二人とともに、これからのエネルギーや私たちにできることを考えた。

## 2 主な内容

### ○自分の足元を見つめることから(高橋さん)

ドキュメンタリー映画『ミツバチの羽音と地球の回転』を見たあと、お二人からお話を伺った。NPO法人生活工房つばさ・游の高橋優子さんからは、「普通の主婦」でありながら、地元の埼玉県小川町で、どこにどのような方が住んでいて、どのようなことをしているのかを知るために、ミニコミ紙の発行をしてきた、という自己紹介があった。その中で、子育てをしながら、子どもたちに安全な空気や豊かな自然を残していくためには、どうしたらよいか考えはじめ、有機農業と出会った。安心して暮らしていける仕組みづくりのために、まずは自分の足元を見つめ、どうやったら土地を持っていない自分が永続的に食を手に入れていくことができるか、取り組んできた。

### ○エネルギーには、自分たちで考えて、自ら作っていくプロセスが大事(古屋さん)

古屋将太さんが所属するNPO法人環境エネルギー政策研究所は、産業界などエネルギーにかかわるアクターから独立し、持続可能なエネルギー政策のために、提言活動などに取り組んでいる。具体的には、行政が実施している再生可能エネルギー事業のサポートや国会でのロビイングなどを行っている。古屋さん自身は、デンマークの大学で、地域の人たちがイニシアティブをとって、どのように自分たちで持続可能なエネルギーを作っていけるのかということを研究してきた。エネルギーというと、国の政策や技術に焦点が集まりがちだが、地域の人たちが自分たちで考えて、自分たちで作っていくプロセスが大事だという話があった。

### ○知恵を出し合い、地域の内発的な発展を目指して(古屋さん)

古屋さんから海外の事例を紹介してもらった。デンマークのサムソ島は、10年かけて自然エネルギー100%を目指している島だ。電気では、陸上に3基、洋上に10基の風車を立てることで、島内のエネルギーを賄うことができる。熱に関しても、小麦を栽培しているため、その麦わらを燃やして熱を作っている。太陽熱温水機なども設置している。設備だけでなく、市民や地元の金融機関が出資し、それを自治体が信用保証するなど知恵を出し合い、地域の内発的な発展を目指している。

### ○点から面へ、さらに立体的な活動に(高橋さん)

次に、足元から取り組んでいる小川町の事例を高橋さんに紹介してもらった。高橋さんの活動は、安全な空気、安全な水、安全な食料といった基本的なものを欲したいということが原点になっている。持続的に安全な食料を作るために、有機農業にたどり着いた。家畜の糞などを発酵させメタンガスにしてエネルギーや肥料にしている。ビニールハウスに代わるものとして、手作りガラス温室を間伐材で作っている。自分たちが作った農産物は、地元の食品加工業者で加工し、地域自給を行っている。地元の環境を守るために、地元の住民・企業が有機農業を支える、コミュニティ・サポーター・アグリカルチャーを推進している。さらに、里山保全やコミュニティレストラン、ホーム・ファーマー(ホーム・ドクターのようなかかりつけの農家)などにも取り組み、点から面へ、さらに立体的に活動が広がっている。

### ○私たちの食べ物もエネルギー(秋山さん)

エネルギー自給というと発電所をつくることを思い浮かべるが、私たちが食べる食べ物もエネルギーのひとつだ。こうした意味では、映画で登場した祝島は、すでにエネルギーを自給しているといえる。海や山から、食べ物のほかに薪などのエネルギーを得て生活している。そうした意味では、原子力発電に頼らず、個人でできることもあると思う。

### ○日本で持続可能な生活へ向けたプロジェクトが始まっている(古屋さん)

祝島では100%自然エネルギーを目指したプロジェクトが始まっている。「1% for 祝島」というのは、売上やこづかいなどのいろいろな1%を祝島へ寄付を呼びかけるプロジェクトだ。エネルギーだけに完結する話ではなく、祝島の持続可能な生活へ向けたプロジェクトになっている。例えば、オーガニックの食事や、アートや観光など、持続可能な生活を目指したプロジェクトである。

### ○3.11後の活動や生活への変化

自立のためには技術が必要(高橋さん)  
市民を巻き込んだ議論ができるようになった(古屋さん)

高橋さんは、自分のバイクを太陽光発電で充電できるバイクに変えた。また、福島県二本松で活動を始めたそうだ。原発で被害を受けた福島こそ自立したエネルギーが必要である。また、内発的な自立のためには技術が必要だ。技術がないと、どうしても外部に頼らなければならなくなる。自分たちが技術を持つことで、自分たちで課題を発見し、解決していくことができるようになる。

一方、古屋さんには、脱原発を考えるようになり、自分の地域で何ができるか考える人が増えたと感じている。ほぼ毎日のように新しい講演の依頼が来るようになっていく。エネルギーについて、自分たちで何とかしようとする土壌ができつつある。また、これまでは団体の中だけでしか通用しなかった言葉が一般に通用するようになった。例えば、「発送電の分離」という考え方が通用するようになった。その結果、市民を巻き込んだ議論ができるようになったと思う。

### ○最後に

自分たちで何とかしようとした時、お金の壁や制度の壁がある。その時に、みんなで情報と知恵を出し合うことが大切になってくる。そうすれば、解決策が見えてくると思う。現場から動き始めて、現場に何があるのか知ることから始めてはどうだろうか。(古屋さん)

自分で課題を解決して、自立していくために、みんなで集まって知恵を出し合うことがやはり大切だと思う。市民が持っている武器は「消費」である。消費性向を、例えば、自然エネルギーを使った商品や有機農業をかうように変えていくことで、世の中が変わっていくと思う。(高橋さん)

## 3 分科会担当者コメント

話題提供者のお二人は市民の立場で活動し、エネルギー問題のみならず、どの分野の活動においても参考になるお話を聞けたと思う。また、聞き手の秋山映美さんには、映画の舞台のひとつとなった祝島、高橋さんの現場である小川町、どちらも訪問し、参加者にとって説得力のあるファシリテーションをしていただいたと思う。一方、東日本大震災との関連に触れる時間と参加者との議論の時間が限られていたことは、反省点となった。

## 分科会 12

## 災害復興の課題を考える～東日本大震災被災地の復興に向けて～



登壇いただいたパネリストの方々

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 81人

会場 青山学院大学 2号館 238

## 出演者

## ◆コーディネーター

桑原 英文さん (一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 代表理事)

## ◆パネリスト

小菅 寿美さん (岩沼市社会福祉協議会 主事)

須藤 敏子さん (みやぎ生活協同組合/みやぎ生協ボランティアセンター)

八重樫 綾子さん (岩手県立大学学生ボランティアセンター)

学  
ぶ

## 1 概要

- 被災地の状況は、地震発生当初から現在までのように推移しているのか。
- これから先の復興を見据えた場合、被災地の方々も含めボランティアや社協、NPO等に何が求められるのか。
- この災害を経験して私たちは平時から何を準備しておかなければならないのか。

## 2 主な内容

## ○事例報告

## ①岩沼社協 小菅 寿美さん

- 岩沼市は、平野に位置するため浸水率(市町村面積)に対しての浸水面積)は被災地の中でもっとも高い。沿岸から5km浸水(市内49%)。
- ボランティアセンター設置から支援経過の説明
- 震災翌日にボラセン設置。市内の学生を中心にボランティアが集まり、運営スタッフとして働く大学生も。
- 3月下旬、地域の町内会長を通じたニーズの掘り起こし→寄せられたニーズに対応
- 4月下旬、仮設住宅への入居開始。ゴールデンウィークも岩沼のみ県外からのボランティアを受け入れた。
- 6月下旬、「声を聞き隊」による仮設ニーズ調査→関係各機関の情報を載せた「スマイルカレンダー」配布

## ②みやぎ生協 須藤 敏子さん

- みやぎ生協の組合員数は、県内世帯の67%を占め組合員の声は、宮城県民の声とみなせる。
- 災害協定に基づく緊急支援物資の配布、店舗を開け商品供給。
- 職員の内発的な取組みにより、安否確認や生活支援を行う。
- みやぎ生協ボランティアセンターを県内四カ所に設置し、地域のニーズ把握に取り組む。
- 他団体と連携し多くの人々が参加する活動へ
- 日頃の活動で実践していることでボランティアを→ふれあい喫茶(サロン活動)へ。

## ③岩手県立大学 八重樫 綾子さん

- 学生災害ボランティアセンター開所、地域の見守り。
- 陸前高田市、釜石市の災害ボランティアセンター運営支援。大学の休業中が主。
- 4月下旬、いわてGINGA-NETプロジェクト、学生ボランティアの滞在拠点作りを行う。
- 主な活動内容は、仮設住宅での「お茶っこサロン」、中学生対象の学習支援、地域ニーズに応じる。

## ○共通課題

- 仮設住宅の中だけでは、活動が限定条件になってしまう。
- 内陸地域と沿岸地域での格差が生まれてしまっている。
- 支援・ボランティアする側の論理になってはいないか。

## ○まとめ

継続してつながっていくために必要なこと～

- 地域支援には、地元のボランティアを育成し携わるようにしていく。
- 外部からの支援は、必要なタイミング・関わりをもつように心がける。
- 支援する側(ボランティア)もしっかりと情報収集をしていくこと。
- 支援者をおぼえておく。
- 大学生の力をうまく活かしていく。

## ○平常時に何をしておくべきか

- 自分たちの普段の役割を知ってもらおう。例)社協とは何をしているのか等、情報発信していく。
- つながりを持って生活していったほしい。
- 選択と自己決定を促し自立を進めることによって、通常の生活につながる。
- ボランティアは与える存在のはずが、ありがとうと言わせているのではないか。
- 支援者の在り方をもう一度見つめる。
- 支援者を支えていく。(ボランティアに対するボランティア)

## 3 分科会担当者コメント

報告を聞き、初めてづくしの支援活動に対して模索しながら懸命に活動し続けた各パネリストの姿を目の当たりに見たような気がした。最初何をしていたかわからなかった。そんな時、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議メンバー等からの「地元に住んでいる人ができることは被災者に寄り添うことです。そして日常生活に戻るようお手伝いをしてあげて下さい」という言葉が活動の方向付けをしてくれたというパネリストの言葉が印象的であった。

日頃の地域福祉活動(サロン活動、ホームレス支援等)が災害時、大いに役に立つこと、また、被災者にとって自立を促す支援が重要であることを再認識した。



桑原さんによるまとめ

## 分科会 13

災害時要援護者とつながりづくり  
～都会における災害時要援護者を支えるために～

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 34人

会場 青山学院大学 2号館 227

## 出演者

## ◆コーディネーター

鍵屋 一さん(板橋区福祉部長 兼 危機管理担当部長(計画担当))

## ◆事例報告者

あんどう りすさん(アウトドア流防災ファシリテーター)

大森 真由美さん(横浜栄・防災ボランティアネットワーク 副代表)

木下 寛さん(東京都知的障害者育成会 新宿区立新宿生活実習所 所長)

染谷 一美さん(東京都社会福祉協議会 大規模災害対策検討委員長/特別養護老人ホーム「文京白山の郷」 施設長)



## 1 概要

東日本大震災で経験した事例を振り返り、災害時要援護者が現在どのような心配を抱えているのか、どのような支援を必要としていたのかを支援者や福祉施設の活動事例を通して考え、都会における災害に備えて、私たち市民が何をすべきかについて議論した。

## 2 主な内容

## ○現状把握

東日本大震災の被害状況等の振り返り。東京で大震災が起こった場合に災害時要援護者に必要な支援をし、被害を最小限に留める事が今後の課題となる。

## ○事例発表

①子育てに優しい街が災害にも強い(あんどうりすさん)  
・「子どもは親が守るから」という意識があり、要援護者であるという認識が低い。

・平時からの防災事例 例:子育て世代に優しい世田谷の児童館、防災マップづくり  
・マニュアルをつくるのが大事ではなく、内容・中身を理解することが重要。

②横浜栄・防災ボランティアネットワーク紹介(大森真由美さん)

・平成16年の水害がきっかけでボランティア連絡会を中心に災害時のボランティア・ネットワークを作る活動を始めたのがきっかけで平成18年に設立した。  
・要援護者が受援力を向上し、それを支援していくのがボランティアである。  
・若い世代の人材をどのように確保するかが課題。

③東日本大震災時に新宿生活実習所で起きた事例、今後の課題(木下寛さん)

・3月11日(金)の震災時は利用者の送迎中であった。自宅のエレベーターが止まり、職員が抱えて上がり、送っても保護者が待ち合わせ場所に間に合わないケースなどがあった。  
・震災を受けて施設でいくつかの取り組みを行った。(例:ルールづくり、訓練の見直し等)  
・これからの課題として、障害の種類をこえた施設同士の連携や保護者にとっての避難所になる備えが必要。

④大規模災害時の高齢者施設と地域との連携のあり方について(染谷一美さん)

・特養は、建物は強固だが災害時には職員が出動できず体力・精神力ともに厳しい状況になる。  
・被災地では、地域の方々と協力しながら利用者と同

人数の地域の高齢者の人数を受け入れていた施設もあった。平時の関係によるものだと感じた。

・特養のパブリックスペースなどを開放するなどして、行政・社協・町会ともにルールをつくりながら地域のネットワークをつくっていく必要がある。

## ○質疑応答

・「中学生は守るべき存在か?否か」

→自分の命を守るという意識が低い。最初はレクチャーする必要がある。大人が本気になれば子どもも本気になる。

・「従来通りでは足りないと思いき早急に対応したことは何か?」

→事業継続をいかにするかということを考えて。消防計画の見直しを行った。外出時のルールづくりをした。

・「被災地と支援地域のつながりについて」

→近隣は同時に被災してしまう。離れた地域とのつながりを平時からつくっていくことが必要。遠野は支援基地になると考え、訓練などをしてきた。その成果が今回の震災ではあった。東京で震災があった場合は、大宮あたりが拠点になり得ると思われる。

## ○コーディネーターより

大事なポイントが3つ。

1つは備え。食料・水・トイレ・ガソリン・医療情報の見直しをしなければならない。

2つめは人の面。意欲・意識という問題。

3つめは垣根、ネットワーク。阻むものが垣根であるとすればつなぐものはネットワーク。社会システムとして自然にそうなるように構築していく必要がある。

## ○まとめ

課題が浮き彫りになり、対策を早急に進めてはいるが、対策が万全とは言えない状況である。事例報告で災害時要援護者が必要としている事、また自分たちができる事を学ぶ有意義な時間となった。

## 3 分科会担当者コメント

都心で大災害が起きた時に、要援護者がどうなるのか、地域は、施設はどうなるのかということについて各事例を参考に具体的にイメージすることができた。行政が身動きできない状態で、災害時に住民一人ひとりがどのような動きをするべきかを個々人が事前にイメージし、訓練などを通し連携していくことがいざという時に自分の身を守り、要援護者を守る地域社会のつながりづくりにつながっていくということを確認した機会になった。今後、行政・社協・施設・ボランティア団体がいかに実質的に連携し、地域の中で要援護者を守っていけるかが大きな課題であると感じた。



## 分科会 14

ボランティア・市民活動は“包摂型”のコミュニティをつくれるのか  
～東日本大震災の支援活動を通して問う～

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 42人

会場 青山学院大学 2号館 228

## 出演者

## ◆コーディネーター

上野谷 加代子さん(同志社大学大学院 教授)

## ◆パネリスト

強口 暢子さん(いわき市社会福祉協議会 常務理事)

鹿野 涉さん(大崎市社会福祉協議会本所地域事業課 主事)

阿部 陽一郎さん(「ボランティア国際年+10」推進委員会提言プロジェクトチーム リーダー)

田尻 佳史さん(認定NPO法人日本NPOセンター 常務理事・事務局長)



## 1 概要

ボランティア国際年から10周年にあたる今年、わが国ではおりしも発生した東日本大震災の被災地支援のため多くのボランティアが活動してきた。

被災地ではそうした外部の支援を得ながら、孤立する人を生まないよう、コミュニティを再びつくりなおす取り組みが行われている。こうしたコミュニティ再生と社会的孤立の解消は、被災地以外の多くの地域でも今求められていることといえる。

本分科会では、東日本大震災での支援活動を踏まえ、誰もが孤立せずに暮らせる、「包摂型」のコミュニティづくりに向けたボランティア活動や市民活動の役割やあり方、推進の仕組み等について考えた。

## 2 主な内容

## ○パネルディスカッション

## ■強口 暢子さん

いわき市の応急仮設住宅の入居の多くは、津波で住宅を失った避難者である。仮設住宅には地域を分断されたような形で入居。また、いわき市には原発事故により、他町村の避難者が2万人移り住んでいる。

これまで、NPOに自分たちの領域を荒らされるとの不安があったのではないかと。しかし今回の震災を通して、包摂型コミュニティづくりにむけてNPO等と連携をすることで、日常的なつながりをつくっておくことの大切さがわかった。今回は機会にNPOの存在を大切にしていきたい。

これからは、本当に長い道のりになる。日常のコミュニティをつくることの大切さを真剣に考えていくことも必要である。

## ■鹿野 涉さん

被災地では、内陸部と沿岸部などの住民の震災に関する意識の温度差を感じた。また、被災地に近い地域ほどボランティアを行うことへの戸惑いがあるのではないかと。

被災者に寄り添う姿勢を外部のボランティアに求めたかったが、一方で助けてもらわないといけない立場であるというやりにくい状況があった。

被災者に寄り添う関わり方について、仮設住宅だけではなく地域全体をみながら、社会福祉協議会(以下「社協」)、NPO、ボランティア等が、仮設住宅から日常の生活に戻ったときのことを考えて、連携して支援をすることが大切である。

## ■阿部 陽一郎さん

ボランティア国際年+10推進委員会、「広がれボランティアの輪」連絡会議で現在作成中の提言の骨子案

に対する意見をいただきたい。

この提言の中では、「包摂型のコミュニティづくり」をどのように進めていくのが、一番のポイントになるのではないかと。地域住民を主体とする居場所を核にしながら、よりよい地域にしていくことを考えていきたい。支援する側、支援される側の一方通行ではなく、双方向の関係をつくるのが大切である。

また、各地の地域の中でのコミュニティの大切さ、ネットワークの大切さ、ボランティアの大切さを伝えていきたい。

## ■田尻 佳史さん

災害支援とともに、NPOも成長してきたといえる。今回の東日本大震災の特徴のひとつは、国際協力を行っている団体が巨大な資金力を背景にして、被災地に入って活動したことである。

いろいろな団体が入ることで、多角的な視点でみる地域ができたのではないかと。また、日頃の活動に刺激を与えることができたのではないだろうか。

今後は、継続した連携が課題である。地域の見守りを行うために、地域に新たなセーフネットが生まれてくるだろう。災害が起きて大変だが、今回生まれてきたものを今後活かしていくことができればと思う。

■一人ひとりのいのち、尊厳の大切さが包摂型コミュニティにとって必要だが、そのための市民活動・ボランティア活動のキーワードは何か?

・「認め合い、許しあう」こと。お互いのやりたいことだけを言うのではなく、譲り合いがキーワードではないかと。

・社協として、地元の情報をつかむ力量をつける。見えないものを見る、見たくないものを見る勇氣。イメージーションが必要。

・関心をもって、気にかけること。

・岩手の陸前高田の中学生は、希望の「望」を、活動を紡ぐ、紡がれるという意味で「希紡」と書いていた。教えられた。

## ○グループワーク

4グループに分かれ、パネルディスカッションを踏まえて「寄り添うため、包摂型コミュニティに必要なことや心構え」を各グループで討議した。最後に、各グループでだされた意見は、グループの代表者が全員の前で発表をし、全体で共有することができた。

グループワークでの意見は、情報の把握と共有、気持ちに寄り添うこと、顔の見える関係づくり、地域への愛着をもつことなどがだされた。

## ○グループワークに対するパネリストのコメント

・個人への寄り添いだけではなく、組織・団体への寄り添いは協働や連携につながる。その際には団体のニーズが誰のニーズなのかに留意し、被災者のニ

ズに寄り添うべきである。

・地域の中には、居場所と出番の関係という視点もある。居場所はあるが、出番のない人が地域住民にいる。出番のなさが孤立につながる。一方、出番があるが、居場所がないボランティア活動がある。支援する側、される側で分けるのではなく、この循環が大切ではないかと。

## ■まとめ

寄り添いには関係づくりが大切であり、関係性は4パターン(わたしとあなた、わたしとあなたたち、わたしたちとあなた、わたしたちとあなたたち)考えられる。この関係にしっかりと向き合っていくことが必要。

ボランティア活動をする際には、「なんとなく」ボランティアをするのではなく、地域にある課題から目をそらさずに向き合う、自分自身への決意、自覚、勇氣をもつこと。そして、自分の周りや国内、国外、他団体などの社会の変化を敏感に受け止めることが、ボランティア・市民活動に必要である。

## 3 分科会担当者コメント

人を排除しないコミュニティをつくるための、ボランティア・市民活動のキーワードは何か。これが、この分科会の大きなテーマであった。

全体を通してのキーワードは「寄り添い」。寄り添うために、その対象にしっかりと向き合い、ボランティア・市民活動として各々が行うべきことを参加者全員で確認をした。

グループワークを30分程度行い、参加者同士で交流をする機会ともなった。今後は、参加者が各自の地域で人を排除しない、そして誰もが尊重される「包摂型」コミュニティに向けて活動が展開することを期待している。





水野さんによる報告

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 52人

会場 青山学院大学 1号館 127

## 出演者

## ◆コーディネーター

宇田川 規夫さん(国際救急法研究所)

## ◆事例報告者

伊藤 雅人さん(陸前高田市社会福祉協議会)

柴田 哲史さん(調布市被災者支援ボランティアセンター)

水野 清香さん(都民ボランティア2期参加者)

話し  
合う

## 1 概要

3月11日に発生した東日本大震災は我が国に未曾有の被害をもたらした。被災地の復興の鍵は、地元での助け合いや地元のボランティアによる支援。本分科会では、ボランティアとして外部から支援に関わった人、広域避難者への対応を地域のネットワークを活かして行なった方、被災地の地元で支援に取り組んでいる方、様々な立場から支援に関わった人から、今度は我々が被災する立場となったとき、市民として事前に何をしておかなければならないか、ワークショップを通じて、一人ひとりが気づき、学び合い、そして、動き出すためのきっかけづくりの場とした。

## 2 主な内容

## ○パネリストからの報告

・水野清香さん(都民ボランティア2期参加者)

都民ボランティアとして石巻や東松島、気仙沼、陸前高田で活動を行った。

ボランティアとして被災地支援を行う中で、足湯活動で大きな気づきがあった。それは、ボランティアによる被災地支援は、ボランティア側からの一方通行ではできない、双方向でなければならないということだった。被災者に受入れてもらえたからこそ活動ができた。そうした関係性があって初めて被災者のニーズに合致した活動ができる。被災者にとって外部から来た、見知らぬ人に心を開くことは難しい。人と人とのコミュニケーションを通じてお互いに心を開くことこそがボランティア活動だと感じた。

・柴田哲史さん(調布市被災者支援ボランティアセンター)

3月19日から2ヶ月間、調布市の味の素スタジアムに福島県から避難された480名の被災者に対し、2千人のボランティアのコーディネーターを行い、支援した(NHK(朝イチ)放映内容を紹介)。

活動のポイントとしては、①ネットを活用したこと。②リラクゼーションルームを設置し、本音(ニーズ)を引き出したこと、学習室の設置、避難所周辺の手作りマップ作成、街頭募金、風評被害の野菜の購入、被災者向け住宅の掃除、引越の手伝いなど細かなニーズに対応していったこと。現在は、岩手県遠野市へボランティアを100名以上派遣している(11月現在)。

都内で災害が発生した時、いつでもメンバーが集まれるよう、ボランティア交流会、連絡ツールを活用し(twitter、facebook)、ネットワーク作りを行っている。

・伊藤雅人さん(陸前高田市社会福祉協議会)

発災時から災害VCスタッフとして継続的な支援を行うまでの経過を話していただいた。

発災時は、自宅にいた。海から真っ黒い液体が迫って

きた。最初は土煙、その後見えたのは全てが海。怖いとか悲しいという感情はなく、信じられないそれだけ。

がれきの撤去では首がない遺体やバラバラになった体を数多く直視。作業を継続する中で精神的に病んできていることを自覚。そんな時に、物資の配給で出されたおにぎりに、小学五年生から「自分たちにできることで支援したい」との手紙が添えられていた。他県や他市の人の応援を感じたら、落ち込んでいた気持ちがふっさきれ、陸高VCで活動を始めた。

VCで意識していたことは、地元主体、住民主体。ボランティア活動の意味は、現地の方々が感じている不安を解消するため。時間が経過すると被災者である依頼者の心境が変化する。それに対して、ボランティアやコーディネーターも対応を変化させなければならない。現在では、地域のボランティアに対する受入れの姿勢もかたまり、ボランティアの数増加、延べ8万人のボランティアが活動している。

8ヶ月後の今、観光気分であるボランティアもいる。リピーターとして参加するボランティアは少ない。地元の人の信頼を背負って活動して欲しいとボランティアに伝えている。

## ○グループに分かれてのワークショップ

3名の発表を踏まえ、8グループ(1グループ5人程度)に別れ、ワークショップを行った。①地域の中で行われている防災への備え・困難点、②自分たちの活動が地域づくりとどうつながっているか、③自分たちの活動が防災活動とどうつながっているか、の3点について議論が行われた。ワークの成果としては「平時でできないことは有事もできない。平時のあり方だ!」「人を知る、場所を知る、人を育てる」などの意見が出た。現在行っている地域での活動等が実は防災にもつながっており、今後も地域活動を継続しながら、地域の活動の中に防災の視点を入れていくこと、そして、災害時に動くことのできる人材育成に取り組んでいくことが重要との共通認識がもてた。

## 3 分科会担当者コメント

3人の報告では、被災地支援に最前線に関わる方々から取組みを伺う中で、実は、外部からの支援は、地元の人たちのありようによって、活かされる部分が大きいことが分かった。それが伝えられただけで本分科会では成功だったと感じている。後のワークショップでは、良い議論が出来たが、もう少し3人の報告を活かせる形で企画すれば、さらなる気づきと学びが出来たのではないかと感じている。

また、首都直下地震の発生が危惧されている中、東京からの参加者がそれほど多く参加しなかったのは、分科会企画者としてのPR不足だと感じている。



ワークショップの様子



## 分科会 16

新しい公共熟議  
～ 3.11をきっかけにこれから求められる新しい公共とは～

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 58人

会場 こどもの城 902～905

## 出演者

寺脇 研さん(京都造形芸術大学芸術学部 教授/新しい公共推進会議 委員)  
 稲垣 久和さん(東京基督教大学 教授/公共福祉研究センター長)  
 吉田 博彦さん(NPO教育支援協会 代表理事/福島の子どもを守ろう夏期林間学校実行委員会 副委員長)  
 長尾 彰さん  
 (プロジェクト結コンソーシアム 理事長/NPO法人 Educational Future Center 代表理事/している株式会社 代表取締役)  
 箱崎 亮三さん(NPO法人実践まちづくり 理事長)

話し合う

## 1 概要

3月11日に東日本大震災が起き、現在進行中および今後の復旧・復興において、市民がつくる「新しい公共」は一体どのような役割を担うのか。このテーマについて、全国から当事者たちが集い、講演者も参加する形で車座になって(ファシリテーターを含め各グループ5～8名)年齢や性別、職業などを異にする多様な立場の人々が当事者意識をもって課題について学習・熟慮し、討議をする。

## 2 主な内容

9:30～10:20

出演者による講演

10:20～10:25

熟議のルール・テーマ説明 5分

休憩

10:35 熟議 前半 35分

11:10 休憩 5分

11:15 熟議 後半 40分

11:55 発表・共有 20分

12:15 出演者による講評 12分

12:30 閉会

## 3 分科会担当者コメント

学生団体STUNITYが運営の中心となるワークショップとすることで、参加者のみならず学生運営者にとっても精神的に鼓舞される点が多く、多様な団体間の交流の機会ともなった。また、3時間にわたり大阪朝日放送(テレビ)の取材が入り、本分科会の取組や企図についてより広く広報できる機会を得られた。

ただし、来場者数が想定よりも少なかったことが心残りである。分科会担当者サイドでも積極的に分科会開催の広報に力を注ぐべきであった。



出演者による講演



熟議をする参加者の方々



熟議で出た意見を全体で共有



日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 188人

会場 両国国技館 大広間

### 出演者

板垣 淑子さん(NHK首都圏放送センター チーフ・プロデューサー/NHK「無縁社会プロジェクト」取材班)  
工藤 啓さん(NPO法人「育て上げ」ネット 理事長)



## 1 概要

今日の日本は、ワーキングプア、ニート、ひきこもり、孤独死といった言葉に象徴されるように安心して生きることも安心して死ぬこともできない社会になっている。この分科会では、このテーマに関わりの深いゲストを迎え、「無縁社会」の実態を浮き彫りにするとともに、この無縁社会を乗り越える新たな人と人とのつながりについて参加者とともに考えることとした。

## 2 主な内容

### ○板垣淑子さん

2006年にNHKスペシャル「ワーキングプア」を制作し、若者の非正規労働の実態や不安定な収入による非婚化といった様々な弊害を番組で紹介し、ワーキングプアの解決に向け情報を発信してきたが、状況は良くなり、仕事もなくなり収入の糧が生活保護しかない、路上生活しかないというように命にかかわる問題に発展していった。

2008年の年末に取材で出会った50歳の男性は、派遣の仕事を手を失った。その男性は、特殊な人でもなんでもない、大学を出てごく普通に正社員として就職し家庭も持ったが、バブル崩壊とグローバル競争の中で、リストラに合い、離婚し、最後に見つけた派遣の仕事も雇い止めとなった。その姿を見て、仕事という一つの縁を失うことが、一気に家族や地域とのつながりも失っていく引き金となることを知った。

身体が動くうちは仕事をしたい、生活保護に頼りたくないと言って新宿区の公園に戻り仕事を探していたその男性と、しばらくするうちに会えなくなる。炊き出しを行っているNPOのスタッフに聞いてみると、「もう探しても無駄。彼は行旅死亡人(引き取り手のない遺体)になっているかもしれない」と言われた。インターネット官報というものがあり、そこに日々の行旅死亡人が公告されている。毎日、記事を読んでいるうちに、何か言い知れぬ、痛みに似たものを感じた。アパートの一室であぐらをかいたまま死んでいたとか、救急搬送された病院でそのまま亡くなって身元がわからないとか、毎日毎日、公告されている。一体この国はどうなってしまったのだらうという思いだった。

映像: NHKスペシャル

「無縁社会～無縁死」3万2千人の衝撃～

- ・ここ数年、警察が捜索しても名前さえわからない身元不明の遺体が増え続けている。
- ・亡くなった人の遺品や遺骨を専門で整理する特殊清掃業者という新たなビジネスが都市部で急成長している。
- ・引き取り手のない遺骨は自治体に持ち込まれ、無縁墓地に葬られる。持ち込まれる遺骨の数が増え自治体はその対応に追われている。
- ・無縁死ともいえる新たな死の出現。何か異常なことが起きているのではないか。
- ・無縁死の数を調べるため1,783の自治体を調査した結果、1年間に3万2千人もの無縁死が起きていること

が初めて判明。

- ・無縁死は、単身者(一人で暮らす人)に多い。気づかない内に水面下で広がっていた無縁死。
- ・一人で生きる人たちの間で不安が高まっている。家族や会社とのつながりを失い、孤立して生きる人たち。今、無縁社会とも言える時代に突入している。

番組の後半で、一人暮らしをしている80歳になる女性が出てくる。彼女は健康に不安を覚え、NPO法人「きずなの会」の会員になった。「きずなの会」は入院手続き書類へのサイン、亡くなったら、葬儀から不動産、財産の整理まで死後の後始末を代行している。「申し込んですぐ安心した」と、手続きを終えて満面の笑顔で出てくる。自分の死後の後始末してくれる人がいる。それだけで安心して生きていけるという人がたくさんいることも事実である。

孤立は、東日本大震災でも起こっている。取材で被災地の山間部に入った時、そこは、救援の手が中々届かない地域で、暮らしている人は被災後2ヶ月も3ヶ月も外と隔絶されていた。人は長いこと一人でいると話し声も出ないことを初めて知った。

去年の夏、消えた高齢者が問題になったが、そのときにも無縁社会プロジェクトとして番組を組み取材した。そこでわかったことは「他人に迷惑をかけたくない。自分の子どもにはなおさら迷惑をかけたくない」と言って、助けも呼ばず、弱っている自分を隠し、引きこもって、閉じこもって孤立していく姿だった。孤立が深まり、最後には社会から完全に隔絶された状態になる。

20年後の2030年には女性は4人に1人、男性は3人に1人が一夫一妻結婚しない時代を迎え、非婚の時代が来ると言われている。一人暮らしは人に気を使わず楽なので、非婚を選ぶ人が増えている。それを否定はしない。時代の変化だと感じている。ただ、一人で生きていくことは、若い間や働ける間は問題ないが、例えば定年退職で仕事を失ったり、体を壊して外に出られなくなったりすると「社会的弱者」となり、生きていく上で非常に困難な状態に陥る。

### ○工藤啓さん

無縁は「社会的孤立」と言い換えることができるが、自分の団体は、様々な事柄から孤立している若者を支援している。従来、セーフティーネットの役割を担っていた家庭の機能が失われ始めているのではないか？

児童相談所では、児童虐待の相談が増加しており、子どもの数は減少しているのに、相談数が増加しているという問題に直面している。

家庭以外に学校も重要な社会的な場所。小学生にも不登校が2万人、中学生になると10万人に跳ね上がる。34人に一人は中学校に所属はしていても行くことはできない。

高校への進学率は、ほぼ100%であるが、年間約5万人が中退。大学、短大、専門学校への進学は高校卒業の約70%。日本は、多くが高等教育を受けられる「いい国」であるにも関わらず、年間約11万人が中退している。経済的理由または学業不振等でロックアウトしてしまう。象徴的な例として「便所飯」という現象がある。友達

がいないので、昼食時に学食等に行かず、唯一、一人になれる場所としてトイレで食事をして、何事もなかったように午後の授業に出る。こういうところで苦しんで最終的に辞めてしまう。このようにして、小学校から大学まで年間約35万人が毎年、毎年離れていく。

一方では、労働市場、働くという場からつながりを無くしている。15歳から39歳までおよそ86万人が現状、仕事もせず学校にも行かず、職業訓練を受けている。労働市場に参加することができずに無縁、孤立している。

労働市場のみならず、自宅、自分の部屋以外と全くつながりの無い引きこもりが東京都の推計で約70万人。社会的孤立、労働市場からの孤立がある。

若年層の無縁は2種類に分類することができる。「非社会的無縁(自宅から出られない)」と「反社会的無縁」である。前者は、社会に適合できない、例えば「ひきこもり」。後者は、縁はあってもその関係は希薄である。

自分の団体には、これから仕事をしたいと望んでいる若者が50人程いるが、彼らをかかわりそうだから支援が必要だと考えるのではなく、地域に平日の昼間から50人の若者を動かさず、何かあれば連絡くださいと地域に広告したところ、昨年の実績で要請が200件。大半が年配の方々。若干の経費はいただくが、価格帯としてはシルバー人材センターと同等レベルに抑えている。ある依頼者になぜ自分たちを使ってくれるのか尋ねたところがある。一般の業者もお金を払えば来てくれる。シルバー人材センターもやってくれる。その方は「自分たちの庭や家を若者が掃除したり、片付けたり、その縁を買いたい。若者にチャンスを与えたい」という意味でもお仕事を依頼した」という回答が返ってきた。元々、若者へ働く場を提供することを目的とした活動が、一人暮らしの高齢者とのつながりによって地域の再生化へとつながっている。多様な人たちが仕事を通じて絆をもう一度作る。その先にあるのは、縁というものがある地域内で構築されるような次の時代の仕組みになるのではないかと考えている。

## 3 分科会担当者コメント

出演者の報告を聞き、人が孤立する、ひとりぼっちになってしまうという状況は、誰にでも起こりえるものだとことを実感した。

「現在の社会保障制度は、困っている側からSOSを発しないか助けてもらえない仕組みになっている。では、SOSを発することができない人はどうすればいいのか。誰かSOSに気付いた人がおせっかいを焼いてあげるしか方法がないと思う。どうすればおせっかいを焼けるのか、その仕組みや場を考えていかなければならない。」また、「座右の銘は、「金持ちよりも、人持ち」。困ったときお金がなくても得られるもの、つまり人とのつながりがさえあれば私たちは生きていけるのではないかと(生存権を保障される可能性があるのではないかと)思っている。無縁の事実気づいてしまった我々が、気づいた以上、アクションを起こしていかなくてはならない。自助だけでは解決しない。」という出演者の言葉に強い感銘を受けた。

## 分科会 18

当事者の声を聴いて考える  
～「子育て」を、地域で支えあう仕組みづくり～

お話をじっくり、うかがいました

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 41人

会場 国際ファッションセンター 10階 101・102

## 出演者

## ◆話し手

- ①以前は子ども虐待の加害者だったが、現在は相談員として活躍している方
- ②上記の方を、当時、地域で支えていた方  
＝山浦 成子さん（ねりま子育てネットワーク代表）

## ◆聞き手

上岡 陽江さん（ダルク女性ハウス 代表）



## 1 概要

子どもの虐待の報道が後を絶たない。虐待を受ける子どもたちへのサポートももちろん大切だが、加害者となってしまう親へのケアも必要なのではないだろうか。この分科会では、子どもへの虐待を経験し、周囲の援助を受けながら或いは自身の心を開ける人との出会いによって立ち直り、現在は自らが相談員となって活躍している方に、自身の当時の体験や苦しかった思い、またどのようにして立ち直ることができたのかを赤裸々に語っていただいた。また、彼女に関わり寄り添ってきた方からも、どのように支えていたのかをうかがった。さらに、子育てに悩む親たちにどう向き合っていけばいいのか、一緒に地域に暮らす人として私たちに何ができるのかを参加者とともに考えた。

## 2 主な内容

○初めに、聞き手：上岡陽江さん、話し手：子どもの虐待経験のある方と山浦成子さんをご紹介します。

○子どもの虐待経験のある方からのお話

当事者であることを忘れたことはない。15年ほど前のことだが、当時のことを本当は思い出したくない。自身も虐待をされて育った。大人になり子どもができてからは、教科書通りにならない子どもをどう育てて良いのかわからず、夫との不和もあり、子育ては地獄のようだった。経済的な不安もあり、世界中の人が敵のように思え、相談などできないと思った。

友人の紹介で出会ったクリニックで、同じ様な境遇の仲間と出会う。→人は敵ではないと学ぶ。

自身でなんとかしなくてはと考え、駆け込んだ地域のボランティアセンターで、山浦さんのグループと出会った。日常の子育てを援助してくれる人を求める。→心に余裕ができてくる。山浦さんのグループとの出会いは、「ここにいていいんだ。」という安心感があった。

子どもが大きくなっても悩みは尽きない。何か問題があると子どもと一緒に死にたくなる。が、死なない。それは周りに自分を支えてくれる人たちがいるから。

○山浦さんのお話

13年前に彼女と出会った当時は、虐待は今ほど表面化していなかった。彼女は「このままでは子どもを殺してしまう。子どもを預かって欲しい」と助けを求めて来たが、皆、足がすくんだ。でも、何とかしたい。自分たちも勉強会をし、医師の助言も得ながら何とかやろうと模索する中、加害者をなぜ支援するのかと考える仲間との決裂もあった。しかし、医師や保健師などのプロではなく、地域に暮らす同じ住民として関わら

いと考え、勉強会を重ねた後、まずは彼女の子どもを預かることから始めた。自分たちは医師や専門家ではないが、ママをしなくてもいい時間を作ってあげること、ママを楽にしてあげることが大切と考えた。生育歴や環境、社会状況が絡んでも、寄り添う人がいれば、救われるのではないか。ママたちにとって安心できる場所であり続けたいから、今すぐには解決できなくても、信頼感の持てる関わりを持ち続ける。

○上岡さんからのまとめとして

信頼関係を築くことが大切。日常の生活の中で、声を掛け合うことも大切。声の掛け合える関係、挨拶の交わせる関係はすばらしい。サポートしたり、されたりと、人生の中で役割は変わりながらもお互いに支え合っている。地域で声を掛け合えば、専門家は必要なくなる。

また、子どもは地域が育てるもので、誰かが見てくれる安心感の中で子育てをすれば虐待は起こらないのではないだろうか。

今すぐの解決は望まないで、目の前にある、困っていることから付き合っていくことも大事。

○最後に、質問のある方には質問用紙を提出いただき、3名の方たちに答えていただいた。

## 3 分科会担当者コメント

この分科会では、虐待を止められずに葛藤する母親の気持ちに、向き合おうと思った。その上で、私たちにできることは何か、当事者はどうすればこの葛藤を乗り越え得るのか、そのヒントを得たいと考えた。当時、ボランティアで支えた山浦さんも、初めは「虐待してしまうから子どもを預かって欲しい」という母親の訴えに、どうすべきか答を出せなかったと話していた。そして8名のボランティア仲間と共に、専門家を招いた勉強会を重ねる。結果、ボランティアでも、子どもを預かり、母親に息抜きの時間を提供することはできると決意し、活動を始めた。これは今後も続き、地域で欠かせないものとなっている。この過程と、身構えずにできることを続けている姿に、学ぶことが多くあると思った。



日時 11月12日(土) 16:00 ~ 18:30 参加者 46人

会場 国際ファッションセンター 10階 103

### 出演者

布施 英雄さん(共愛館 理事長/東京都東地区地域福祉施設協議会 会長)

## 1 概要

スカイツリーや伝統工芸で注目を浴びる墨田区の地域福祉の実践者であり、研究者であり、生活者でもある布施英雄さんから、墨田区の福祉的な歴史についてお話を伺った。今回は墨田区の地域特性や墨田区でセトルメントがどのように立ち上がったか等をご紹介します。

## 2 主な内容

○ボランティアは人生の祝祭

~「ワクワク」「ドキドキ」が新しい人生を開く~

フェスティバルとは「祭り」。知らぬ者同士が笑顔で交わる、流動的でエネルギー溢れる世界。ワクワク・ドキドキしたひと時を味わうことができる。新しい可能性を秘めたもう一つの人生の姿である。「ボランティア」とは、この人生のフェスティバルを体験することだと考えているとのことであった。

しかし、現状は日常的でワクワクする感動と無関係な作業が多く、本当は、未体験でドキドキするが「してみたい」心の奥の声に動かされ、「しなくてはならない」確信に支えられて行動に乗り出す、それがVoluntarismである。そして、その典型がセトルメント事業であり、墨田区は最も盛んにセトルメント活動が展開された地域であった。

○墨田区の地域特性

~武家屋敷と町屋の形成~

墨田区の基礎ができたのは、徳川家康が江戸に幕府を開いたことが大きな要因のひとつであった。また、明暦三年の江戸の大火をきっかけに本所地区が開発され、市街地が作られた。これが現在の南部地区の基礎となったきっかけである。

~工場群の展開と地方労働者~

明治時代に武家制度が解体され、士族商法の失敗により賃金労働者となり、零細農民が出稼ぎ労働者として都市部に流入した。また、産業の発展に伴い、工場が川沿いに進出し、労働者住区が急増した。

~細民地区の形成~

経済・産業の急激な変動や、戦争による好況・不況の波で、日銭稼ぎが多く集まる地区となり、多くの細民が居住しており、その環境は決してよいものではなかった。

○セトルメントに見るボランティアリズム

~愛清館セトルメントとミス・アレン~

大正初期、紡績工場働く女工の就労状況の改善が問題となっており、紡績会社から出講の要望があり、

カナダの教育宣教師ミス・アレンが女工に向けて外国の生活や聖書に関する話を行った。これは非常に好評で、他の工場からも依頼が増加したこともあり、工場近くに家を借りることにしたが、この頃の工場地帯は不衛生で治安も悪く、宣教師団は反対していた。それでもミス・アレンはこの寄宿舎から愛清館セトルメントを立ち上げ、寄宿女工や街の協力者たちもボランティアとして働き、女工から看護婦となって興望館セトルメントで働く女性もいたという。

~興望館セトルメントと婦人矯風会~

興望館セトルメントが生まれたのは婦人矯風会の運動がきっかけである。大正8年に棟割長屋が密集する松倉町に興望館を立ち上げ、保育・医療・相談・宿舍など総合的な隣保館が完成したが、関東大震災により焼失し、借金のみが残った。都市計画も進み、地域の再開発により寺島の一画にセトルメントを建てた。そこで、保育園や診療所、手芸・料理教室などを展開した。この地域は震災や戦災でも焼失せず、昔から住んでいる人が多く、非常に協力的な人が多かった。人々は我が家のように出入りし、一体になって活動した。いわば地域ぐるみでサポートし、潜在的なボランティア状態であった。

~賛育会と大学YMCA~

賛育会は、YMCAの有志によって大正8年に貧しい地域の人たちの産院として始まった。当初は東大学生寮内に軽費診療所を開設したが、苦情により継続が困難になったことから、細民地区であった太平町に育児の相談や助産を目的とした「賛育会妊婦乳児相談所」を立ち上げることとなった。しばらくすると、託児の要望も多く聞かれ、託児事業も開始した。

その後、梅森町に移転し、「賛育会本所病院」を開設し、乳児院や産婆学校などはじめ、社会事業施設として機能していた。

~本所産業基督教青年会と賀川豊彦~

関東大震災ですぐに救援に動いたのは、牧師であり社会事業家でもあった賀川豊彦であった。神戸の細民地区で貧しい人々の救済にあっていた賀川豊彦は、関東大震災をきっかけに東京へ向かった。その後、各地を駆け回り、義援金を集めると全額寄付するなど、その決断と行動力は神業であった。

松倉町の興望館跡地に診療所や求職活動、託児活動、訪問看護を展開し、その後、江東消費組合や中ノ郷信用組合なども展開され、賀川豊彦は「セトルメント運動は社会事業としているが、本質的には社会教育・社会運動の場である。勤労大衆の啓発と近隣地区の改善を図る運動であり、従来の社会事業施設をもっても運営と指導精神で異なる」と語っている。

~厚生館と西條億重~

昭和12年に保育園を開設した。西條億重は「おはくろどぶ」という著書より、当時の社会事業家は最初から事業家を志した訳ではなく、ボランティアからスタートしていたことが伺える。ボランティアから抜け出せなくなり、それが本職となっていった。そういう人たちによって日本の福祉が支えられていた。

○「新しい公共」に向けて

~地域福祉計画の推進とセトルメント集団~

墨田区のセトルメントは、「市民運動」によって生まれたものではなく、そもそも当時は福祉の分野に市民運動は無かった。しかし、それは同じ「根っこ」のVoluntarismから生まれた。その未経験で「ドキドキ」するが、心の奥の声に動かされ、「なんとかしなくてはならない」確信に支えられて、事業に乗り出したのである。

私たちは墨田区行政と連携しながら、地域福祉の実現に向けて動き出している。社会福祉協議会を先頭に、さまざまな市民の動きを組織して、地域住民の生活の末端にまで届くVoluntary Actionを展開している。かつて、セトルメントとして立ち上がった諸施設がVoluntarismの精神に押し出されて先陣を担おうとしている。

## 3 分科会担当者コメント

墨田区は日本の福祉の歴史において非常に重要な地区であり、多くのセトルメントがこの地で活動していた。墨田区の地域的な歴史や各セトルメントの成り立ちについて、お話を伺う機会は少なく、担当者としても大変貴重な学習の場であったし、現代の地域福祉を進めるうえで、セトルメントの理念や歴史は非常に重要なヒントになったと思う。

講師、分科会運営に携わったボランティアの皆さん、参加者の皆さん、本当にありがとうございました。



布施 英雄さん

## 分科会 20

## ボランティア活動と学び ～地域社会を担う人材の養成を考えよう～



大変多くの方にご参加いただき、会場は満員

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 116人

会場 国際ファッションセンター ホール2nd

## 出演者

## ◆コーディネーター

村田 幸子さん(福祉ジャーナリスト)

## ◆パネリスト

興梠 寛さん(日本ボランティア学習協会 代表理事)

坂井 敬一さん(前狭山市学校支援ボランティアセンター長)

高橋 芳子さん(NHK学園CSネットワーク長野代表)



## 1 概要

ボランティア活動に学びは必要か。必要とすればどのような学びなのか。ボランティア活動と学びの関係を整理しながら、ボランティアやNPOなどの人材の養成について、社会的な仕組みをどう構築するのか、各地の取組みを紹介しながら議論を行った。また、ボランティア活動で重要な役割を担うボランティアコーディネーターの養成の仕組みについても話し合った。

## 2 主な内容

- パネリストの紹介を兼ねて、パネリストのボランティア活動暦など一言。
- ボランティア活動と学びの世界 特にボランティア学習(サービスマーケティング)の解説
- 事例発表

## ①地域を学びの場に(NHK学園CSネットワーク長野の取組み)

NHK学園福祉専攻科の修生によるグループ活動、卒業後にグループを作り学習活動や地域イベント等の参加によって自己実現を図っている事例

## ②地域の生涯学習カレッジの卒業生による学校支援活動(狭山市学校支援ボランティアセンターの取組み)

生涯学習カレッジの卒業生が同窓会を結成、社会貢献のために地域の小・中学校の授業支援を行う。現在は市から業務委託を受け地域の学校に定着し、幅広い市民がボランティアとして学校支援活動に取り組む。活動を行ってよかったことは、仲間がたくさん出来たことで、市民の中には能力のある人が多く埋もれている。そうした人に社会貢献の場を提供している。仲間が仲間を呼び、あわせて地域の活性化に繋がっている。

## ③社会貢献型の生涯学習の取組み(江戸川総合人生大学の取組み)

ビデオを上映

行政が作った官主導の生涯学習の場、年代は高校生から80代まで。特色は2年間の学びの後まで道筋をつけていること。卒業後、グループを作り地域活動を行なっている。学科ごとに4グループの活動を紹介。

## ○ディスカッション

会場からの質問・意見

- ・この分科会の狙いには共感した。自分の地域でも、ボランティアやNPOの担い手・後継者不足に悩んでいる。その意味で狭山市の事例、江戸川区の事例は参考になった。もう少し、詳しく聞きたい。
- ・国際関係にNGO活動を行なっている。必要なコーディネート力とは。
- ・大学でボランティア活動を教えている。大学でもボランティア活動を紹介してくれないかと他人まかせの「くれない族」がいる。受身の人が多い人で、どのように学生にボランティア活動を教えるべきか。

## ○議論のまとめ

日本ではボランティアを難しく、身構えて考えているのではないかと。人は誰でも、人のためになりたいと思っている。もっと暮らしの中で出来るボランティアを考えて良い。例えば窓際に花を飾ることもボランティア。志は高く、しかしハードルは低く、間口を広げて誰もが気軽にボランティア活動に参加できる社会。人々のそうした志を受け止め、ボランティア活動に結びつけるには、縁結びの神が必要。その役割を果たすのはボランティアコーディネーターであり、その養成が急務である。

今後、ボランティア活動や地域活動に従事する人々が増えていくことを願って分科会は終了した。

## 3 分科会担当者コメント

ボランティア活動と学びという大きくかつ抽象的なテーマの分科会であった。論点を、前半はボランティア学習について、後半はボランティアの人材養成の二つに絞ったが、ボランティア学習と人材養成との関係については、もっと明確にすべきであった。しかし、後半の人材育成については、先進的な取組みを行なっている二つの事例発表やその後のディスカッションで、自治体を取り組む生涯学習について、「自己充足型の生涯学習から社会貢献型」へ転換を図るべきという問題提起を行うことができたし、ボランティア活動におけるコーディネーターの重要性にも議論を進展させることができた。1時間30分という短い時間であったが、充実した内容のパネルディスカッションであった。

担当:沖 清司(NHK学園CSネットワーク) 記録:草野 由香(中野区社会福祉協議会中野ボランティアセンター)



会場から熱心なご意見や質問をいただいた

## 分科会 21

### ケアするための学び ～ボランティア活動・市民活動と教育のつながりを学ぶ～



**日時** 11月12日(土) 16:00～17:30 **参加者** 33人

**会場** 国際ファッションセンター 10階 106

#### 出演者

パトリシア ナブティさん (AVS ボランティアサービス協会 会長・創始者 / I A V E アラブ地域代表)  
村上 徹也さん (日本福祉大学 教授 / 市民社会コンサルタント)



## 1 概要

教育者として長年、幼児から青年まで幅広い世代のサービスラーニング（社会貢献活動と学習を組み合わせた教育）に関わり、現在はレバノンでAVS ボランティアサービス協会の会長を務めるパトリシア・ナブティ博士によるワークショップで、ボランティア市民活動と教育を結び付け、貢献と学びの相乗効果を生む手法について学んだ。

## 2 主な内容

「学校での効果的な貢献活動の展開～ Developing an Effective School Service Program～」というタイトルのスライドを元に進行した。

- ① AVS ボランティアサービス協会  
レバノン内外におけるボランティア活動とコミュニティサービス(地域貢献活動)の発展・促進・向上を目的に設立
- ② ボランティア活動とは: 社会にとって役立つ、無償の、自由意志による行為
- ③ コミュニティサービス(地域貢献)とボランティア活動
- ④ 文化に即したボランティア活動
- ⑤ 学校における貢献活動  
学校主催の貢献活動 / 参加型・競争型による推奨プログラム / 課外クラブ活動とチーム活動 / 必修としての貢献活動 / サービスラーニング / 学校のためのボランティア活動



地域貢献活動について話すナブティさん

## 3 分科会担当者コメント

宗教、社会的・経済的ステイタス、国籍、障害への偏見や、頭を使う人(教育を受けた専門職)と手を使う人(熟練・非熟練労働者)の間に横たわる文化的違いを乗り越えるためには、学校教育とボランティア活動を組み合わせた地域貢献活動の取組みが大切であるということ学んだ。



日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 49人

会場 国際ファッションセンター 10階 109

### 出演者

#### ◆コーディネーター

鶴山 芳子さん (公益財団法人さわやか福祉財団 ふれあいの居場所推進プロジェクトリーダー)

#### ◆パネリスト

國生 美南子さん (NPO法人たすけあいの会ふきのとう 代表/さわやかインストラクター)  
安藤 頌子さん (大野田地域福祉活動推進協議会 [大野田福祉の会 居場所プロジェクトリーダー])  
松村 英二さん (公益財団法人さわやか福祉財団 東京都内避難者支援担当)  
斉藤 義隆さん (江戸川区小松川三丁目団地 自治会長)

話し  
合う

## 1 概要

高齢化、少子化、無縁社会化が進むなか、誰でも自由に集える地域の居場所をつくる試みが各地に広がっている。関東の活動事例3例を取り上げ、それぞれの運営方法や利用者の特徴、成果、今後の課題などを見ていきつつ、地域における居場所づくりの必要性について考える。

## 2 主な内容

### ①イントロダクション(鶴山さん)

・居場所づくりの必要性が高まっている社会的背景(高齢化、少子化、無縁社会化)と、分科会の趣旨・進捗についての説明。  
・参加者の属性確認。関東の人が多く、また、ボランティア活動をやっている人、社会福祉協議会の人などが多い。

### ②喫茶「櫻」(國生さん)

四街道市の小学校の空き教室を利用した喫茶店。毎月曜と第4土曜に開店。2教室を開放し、1室は畳敷きにし、1室にはキッチンを入れている。  
【コンセプト】地域住民として「お話を受けるだけの身はつらい」という言葉から始まった。高齢者や障害者をお話を受けの人々として困ってしまわず、同じ地域住民同士として交流できる場を目指す。誰もが主役。ボランティアも、来てくれる人も、ともに役割を担っている。自由で楽しく、共生を味わう空間。  
【利用者】高齢者、障害者(ダウン症、脳性まひ、重複障害、筋ジストロフィー等)、子どものほか、どこにも行かない人の居場所ともなっている。  
【居場所の効果】「地域には自分より大変な人がいるんだ」という体験をすることから、思いやりが生まれてくる。地域の情報交換が自然にできる。顔がほころぶ。  
【学校の中にあることの利点】昼休みに子どもたちも遊びに来て、将棋などを通じて、高齢者とのふれあいも生まれる。中学生のボランティアも来る。夏休みは子どもたちが体験学習やインタビューに来たりする。若者自立塾の研修生も来る。

### ③ひびのさんち(安藤さん)

【経緯】武蔵野市大野田地区では高齢化率20%以上。高齢者の独居が増え、空き家も増えている。大野田福祉の会という地域社協の居場所プロジェクトで、居場所がほしいかという調査をしたところ、「おしゃべりがしたい」という回答がダントツで1位であった。プロジェクトの趣旨に賛同した地域住民(日比野さん)が自宅の提供を申し出てくれ、「ひびのさんち」としてスタート。  
【運営】利用料無料。場所の管理、光熱水費の支払いは

日比野さんがすべてやっている。お茶代、食事代も無料だが、食材は地域で寄付してくれている。年間3万円の予算は、調味料の購入ですべて使い切ってしまう。

来所者は名簿に名前・住所などを書く。特別なプログラムなどはなく、茶飲み話など社交の場。日比野さんを含めた数人が運営担当で、月1回相談会を開き、翌月の当番(お茶出しと、客への声かけ)を決めている。

【広がり】来所者は、赤ちゃんから高齢者まで。妻の介護をしていたり、自身が病気を抱えていたりする男性高齢者の割合が多い。孤独な人のニーズに応えるために、正月も休まず開ける。自然発生的におじいちゃんたちが自転車の修理を始めたり、被災地の支援に取り組んだりといった展開もあった。「町全体が特養みたいになればいいね」と言っている。

### ④都内の被災者支援(松村さん)

【現状】8000人が都内に避難してきており、その数は微増傾向。福島県からの人が多い。  
【課題】都内の被災者支援においては、守秘義務の関係で被災者がどこにいるかわからないという問題が大きい。都内でも地域により行政・社協・NPOの対応がそれぞれ違い、支援に格差が生じている。団地に集住しているのではなく、ばらばらに住んでいる場合は支援が届きにくい。被災者の半分近くが高齢者で、インターネットで情報を得られないため、情報の格差も生じている。  
【被災者同行会】都内の被災者の孤立防止、被災者のネットワークづくり、避難者と地域住民の助け合いの仕組みづくりを目的に、被災者同行会が発足。都内被災者全員に案内を配り、300人以上が会員に。他方、会員になっていない人のほうが、より支援を必要としているのではと懸念される。

### ⑤江戸川区小松川三丁目団地自治会(斉藤さん)

【団地の概要】2009年に江戸川区小松川3丁目団地が完成し、160世帯が他の団地から移り住む。2010年9月に自治会活動開始。入居者の80%以上が60～80代。高齢者ばかりなので、何かやりたくても前に進まない。自治会費も不十分。  
【避難者への支援】今回の震災で小松川3丁目団地に移り住んだ避難者は100世帯。出入りもあるが、微増傾向。9月には、団地集会所にて避難者交流会を開催。  
【課題】避難者は来年の7月までの期限付きの滞在、地域住民は永住という状況の違いから、避難者の意識と地域住民の意識との間に溝がある。避難者側には、ゴミ出しなどのルールの違いに対する戸惑いや、都営住宅への偏見がある。さわやか福祉財団で取り持ってもらい、住民として助けあえる状況をつくりたい。

### ⑥今後の展望

【國生さん】自治会、町内会が活発でなく、地域住民の支えになっていない。2～3年のうちに自治会に働き

かけをして、一緒に居場所づくりをやりたい。また、被災地支援においては、仮設住宅の集会所の使い勝手の悪さ(目的外使用の禁止)を住民が指摘していた。仮設住宅同士で連携して、行政に働きかけができるよう支援したい。

【安藤さん】町全体をよくしなければ、できることには限りがある。もっと継続的に力をためられるような、町の発展に寄与できるような活動にしていきたい。

【斉藤さん】小松川団地は高齢化社会の典型。120人が75歳以上。被災者も高齢者が多い。親睦を深めて交流していきたい。

【鶴山さん】高知県では、椅子を並べただけの居場所の活動もある。ベンチや椅子だけでも始められる。人と人とがつながることによって、地域づくりまちづくり主体的な住民をつくっていくことができる。

## 3 分科会担当者コメント

少子高齢化が進む中、全国どの地域でも、人と人とのつながりが希薄になり、誰もが集い自由に過ごせる居場所が必要とされていることを再確認できた。今、東日本大震災により、絆・つながりの必要性が求められているが、平時のふれあい(つながり)は、非常時の助け合いにつながる。また、被災地や被災地外に住む被災者との新しいふれあい(つながり)は、誰もが安心して暮らせる新しい地域づくりにつながる。安藤さんの発言の「町の特養化」は、最後まで自宅で安心して暮らせることをいう。たとえ一人暮らしでも施設のように必要な時にサービスが届き、隣近所のつながりもある。居場所からはじまる新しいつながりは、住民主体の地域づくりにつながるということを改めて確認できた。



## 分科会 23

地域の絆を結び直す  
～「消えた高齢者問題」・孤独死を超えて～

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 147人

会場 青山学院大学 9号館 921

## 出演者

◆コーディネーター  
鈴木 光尚さん (NPO法人足利の風 理事長)◆パネリスト  
安藤 順子さん (「消えた高齢者」問題のきっかけをつくった足立区の元民生委員)  
中沢 卓実さん (「孤独死ゼロ作戦」にとりくむ松戸市常盤平団地自治会 会長)

## 1 概要

血縁が「縁」としての役割を果たさなくなり、改めて「結び直す」「つくる」ものと捉えられている。その実践事例として、2つの実践報告を聞いた。1つ目は「消えた高齢者問題」のきっかけをつくった足立区の元民生委員の取組み。思いもよらない結末に至るまで、長く地道な取組みや葛藤についての報告があった。2つ目は常盤平団地内で起きた3年間もの間発見されなかった孤独死をきっかけに「孤独死ゼロ作戦」に取り組むことになった松戸市常盤平団地自治会会長の発表。2つの報告を通して、地域が抱える問題を参加者と共有した。その後、参加者からの実践報告や意見交換を行い、地域とは何か、地域の絆を結び直すことはどういったことなのかを考えた。

## 2 主な内容

## ○事例発表

## ①「辛い 苦しい 体験」(安藤順子さん)

後に、「消えた高齢者問題」を生んだ事例の発表。民生委員を引き受けて3年目頃からずっと気になるケース(Kさん)だった。近隣からも「見たことがない」「本当にいるのか」という声を多数聞いていた。18年間の民生委員としての任期終了が迫った頃、このままこの問題を残したまま後任の方に引き継ぐのは申し訳ないという気持ちから行政へ働きかけをし、Kさんの調査を始めた。最終的にはKさんは自宅から遺体で発見され、Kさんの娘・孫が逮捕される事態となった。思いもよらない結末に、自分がやったことは良かったのだろうかと思案した。誰かがやらなければならなかったことと自分を慰めたものの、家族まで巻き込んでしまい、辛い気持ちだった。

## ②「孤独死ゼロ作戦」から学ぶ「地域福祉のあり方」を考える(中沢卓実さん)

10年前、団地内で起きた孤独死をきっかけにはじまった「孤独死ゼロ作戦」の取組みについての報告。孤独死には様々な社会的な背景があるが、孤独死をする人には共通の生活習慣がある。それは「挨拶をしない」「友人が少ない」「身内と連絡を取っていない」「料理・ゴミ出しができない」「アルコールをやめない」「近所と仲良くしない」という「ないないづくし」の生活。このような生活をしていると最後は孤独死になる。孤独死予備軍にならないよう「あるあるづくし」の生活習慣を身につけることを呼びかけている。その一環として、あいさつ運動を実施。住民からあいさつ推進標語を募集し、住民から学んだものを住民に返し、地域に広げる取組みを行っている。

## ○意見交換・質疑応答

・行政の立場で安藤さんとともに行動した。民生委員の地域に寄り添うという視点が公平性を仕事にしている公の立場と異なり、新鮮に映った。これこそが地域との協働であると思った。不正を摘発したいという気持ちではなく行動されているところに、どう応えたら良いだろうかといつも考えていた。(足立区行政職員)

・孤独死予備軍の問題はあるが、個人情報や家宅侵入等、法律的なところが気になる。(新潟県胎内市・民生委員)

→安否確認をするのに法律のことは考えていない、関係なくて良いと思っている。法律と言っていると何もできなくなってしまう。また、逆に個人情報を楯にとり、何もやらない人もいる。死は個人の問題とされてきたが、そうではない。孤独死に至った経緯を知り、それを今後に生かす。人の死を無駄にしない。(中沢さん)

・民生委員として地域との関わりで参考になることをアドバイスしてほしい。(大阪・民生委員)  
→民生委員だからと「こうしなきゃ、あししなきゃ」としゃかりきになっていると息詰まる。問題があった時にゆっくり対応していくと良い。(安藤さん)

・充実した自治会新聞や冊子等を発行しているが、経費はどのようにしているか。(甲府市・ボランティア)  
→原稿書きやレイアウトは無償でやっている。新聞には広告を掲載し、その広告費と自治会費で印刷代を賄っている。冊子は国の助成金を活用している。国や行政では様々なお金を出しているの、そういったものを活用するようにしている。(中沢さん)

## ○まとめ(鈴木さん)

災害時には地域力・市民力が出る。東日本大震災の被災地のまちづくり支援に関わっているが、合併問題のしこりでまもらないところがある。今日の話は地域とは何かを考えさせられ、ヒントが得られた。今日のこの体験は「点」、一人ひとりが周りに伝えていくことで「線」になる。そして、世代をつなぐことで「縁」から「面」になる。そのような取組みが大切である。

## 3 分科会担当者コメント

先日、テレビの報道番組(12月10日「報道特集」TBSテレビ)で、年間の孤独死が3万人に達し若年化する状況をまじ上げた特集があり、同居家族の死亡などを契機に、中沢さんの語る「ないないづくし」の生活に陥る様子が描かれていた。「消えた高齢者問題」は、何とかしなければという一人の想いから始まったことを示してくれた安藤さん、その行動を受け止めた自治体。個の気づきや想いを土台にした行動が自治組織や自治体を動かした。分科会討議を踏まえ、鈴木さんの語るその地域の「地域力・市民力」を結集し、個々の課題を結び付け、地域課題をトータルに解決するデザインを政策として形成していく営みが、今、求められているのだと思う。



## 分科会 24

地域における市民のつながり  
～「こころのケア」ボランティア活動への誘い～

日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 297人

会場 青山学院大学 9号館 910

## 出演者

ルース キャンベルさん(元ミシガン大学医療センター附属ターナークリニック ソーシャルワーク部長)  
 フォーク 阿部 まり子さん(ミシガン大学ヘルスシステム・臨床ソーシャルワーカー)  
 黒川 由紀子さん(上智大学総合人間科学部 教授)

## ◆事例発表

仙台傾聴の会、NPO法人傾聴ネットキーステーション、NPO法人KeiChoネット、その他



## 1 概要

地域で孤立しがちな高齢者の話に耳を傾け、自立を見守る傾聴ボランティアに期待が向けられている。また災害時にも、被災者に寄り添ってこころの奥からこぼれてくる思いを受け止めるボランティアは重要なサポート役となる。アメリカと日本の専門家により、ボランティアが行うこころのケアの意義とポイントを解説し、また全国で活動を進めるボランティアによる事例を通して傾聴の大切さを訴える。また、こころのケアに取り組むボランティア団体によるポスターセッションを通して自由で活発な交流を行う。

## 2 主な内容

分科会企画者であるユニバーサル財団の開催挨拶の後、導入として、「ユニバーサルボランティア」により、こころのケア・ボランティアの実際を紹介した。

次に、アメリカのミシガン大学附属のクリニックでソーシャルワーカーとして従事し、こころのケア・ボランティアを立ち上げ、教育してきたルース・キャンベルさんによる講演が行われた。テーマは「アメリカにおけるこころのケア・ボランティア」。日本とアメリカの両方の事情に通じた内容は、ボランティアの重要性と意義を分かりやすく伝える基調講演となった。

続いて、臨床心理士で特に高齢者や介護者のカウンセリング、世代間交流活動、被災地におけるボランティア養成、高齢者支援等に造詣の深い黒川由紀子さんにより、「高齢者の話をよく聴くために」をテーマに講演が行われた。傾聴する時の心得の話は、どれも具体的かつ実践的な内容で、来場者に貴重な学びの機会を与えることができた。

その後、ミシガン大学で臨床ソーシャルワーカーとして勤務するフォーク阿部まり子さんをコーディネーターに迎え、こころのケア・ボランティアに取り組む三団体の事例発表を含む、パネルディスカッションが行われた。まず、フォークさんにより「ストレスと私たちの心と体」をテーマに講演が行われた。ストレスが体に及ぼす生理学的影響に触れ、特に喪失体験を嘆き悲しむ際に、それがどのような形で身体面、情緒面、認知面、行動面に現れてくるかを説明。次いで、三つのボランティア団体により、活動で遭遇している具体的な事例発表が行われた。(事例の内容はプライバシーを含むため割愛)

講演の後には、会場の外でポスターセッションが行われた。こころのケアに取り組む全国のボランティア団体が、活動内容を一枚のポスターにまとめ、来場者が思い思いにポスターの前に行き、自由で活発な交流を行った。

ポスターを出展した団体は、下記の通り。

- ① 桑名傾聴ボランティア・みみずく
- ② NPO法人KeiChoネット
- ③ 傾聴ネットキーステーション三重
- ④ 傾聴ボランティアせと
- ⑤ 傾聴ボランティア益城
- ⑥ 市民介護相談員なは
- ⑦ 仙台傾聴の会
- ⑧ 富山傾聴ボランティア・ピアの会
- ⑨ 北海道メンタル評議会
- ⑩ ユニバーサルボランティア

300人からの来場者が交流する様子は、大変活気に満ちていた。

## 3 分科会担当者コメント

三人の専門家による講演と三つのボランティア団体による事例発表により、こころのケア・ボランティアの意義と重要性はもとより、専門知識を持ち、かつ、ボランティアとして自分にできる範囲を知った上で活動に当たることの大切さなど、当該活動の素晴らしさ、奥深さを伝えることができたと思う。

また、ポスターセッションでは、自由で活発な交流が行われ、この分野のボランティアのネットワークが築かれ、その輪を広げることができたと考えている。専門家である講師も、個別の質問にも丁寧に対応くださり、来場者には満足頂いたものと考えている。

大勢の皆様にご足を運んで頂いたことに、心から感謝申し上げます。

## 分科会 25 まちとむらを結ぶ森林づくり



澁澤さんによる活動紹介

## 1 概要

2011年は国連が定めた国際森林年である。現在、森林ボランティア活動を行う団体は、全国に2700団体ありあると言われ、各地で森林づくりを通じて、「森林づくり」や「木づかい」を進めることで、地域の活性化につながることも考えられる。この分科会では、都市と農山村を結ぶ森林づくり活動を紹介すると共に、その意義について考えた。

また、東日本大震災の復興支援活動における東北地域と都市との結びつきについても考えることとなった。

## 2 主な内容

○活動紹介：樹木・環境ネットワーク協会／共存の森ネットワーク

樹木・環境ネットワーク協会は95年の設立。最初は、荒れた里山を、地域の方やボランティアの参加で、どう回復していくかが活動の中心であった。そして、徐々に生態系の仕組みや地域の暮らしを学んできた。また、子ども対象のプログラムやグリーンセイバーという資格検定制度を通じた環境教育も行っている。

今回紹介したいのは、「聞き書き甲子園」。07年に共存の森ネットワークを設立し、この事業の事務局を担っている。高度経済成長以前の機械化されていなかった時代には、自分たちで暮らしをつくらせていた。その世代の知恵や自然とのつき合い方を、100人の高校生が100人の名人に話を聞く。OB・OGが6ヶ所で活動している。森づくりから始まり、棚田等暮らしを学ぶ活動になった。田んぼから若者の声が久しぶりに聞こえ、地元は感激している。若者は自然の中で生きていくとはどういうことかを学ぶ。昔は、森が生活を支えていた。その地域に移り住んだり、農作物を買ったり、必要なときに手伝いに来たりという関係ができていた。

OB・OGが岩手の吉里吉里に入っている。心のケアもあるが、震災前の暮らしを記録に残したい。昭和8年にも岩手で津波があったが、その際の復興計画書には、結束した家族をつくらうということが最初に書いてある。つまり、暮らしが優先。今は家と道路をどこに建てるかが優先する。

今、豊かな暮らしはできたが、人と自然、人と人との関係を切ってきた。絆がテーマとなっているが、結び直す作業が森づくりの作業。自然だけを見るのではなく、この関係を結びつけることも同時に考えることが大切である。

○活動紹介：地球緑化センター

緑、人を育むことを目的に93年に設立。緑の活動に参加することで、自分たちが育てられるという、自然

日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 21人

会場 青山学院大学 1号館 128

## 出演者

## ◆コーディネーター

鹿住 貴之さん (認定NPO法人 JUON(樹恩) NETWORK 事務局長)

## ◆事例報告者

澁澤 寿一さん

(NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会 理事長/NPO法人 共存の森ネットワーク 副理事長)

新田 均さん (NPO法人 地球緑化センター 専務理事)

に対する謙虚さが大切。それをベースに、プログラムを展開している。

中国の3地域で、行政府と連携した緑化活動を展開している。砂漠地帯に行くことで、日本人は自分たちの豊かな暮らしを振り返る。また、日本の環境活動に目を向けるようになる。

1年間の長期山村ボランティア活動も行っている。学生の参加が多いが、現在の第18期は54名の若者が45市町村で活動中。農業、林業だけでなく、集落の生活のすべてを住民と同じようにお手伝いする。無報酬だが、月5万円の生活費で市町村が提供した家に住む。おじいちゃんやおばあちゃんとの濃密な関係ができる。終了後は、半数がその地域に残るが、残りたいと言うと、みんながお世話してくれる。地域の方が何事も自分の知恵と力でやることに若者は驚く。

都市の方を中心に、全国15～16ヶ所で森づくりを行っている。1ヶ所では年に数回の実施だが、経験者がリーダーに育ち、地域に根づいた活動を行っている。参加者は仲間が欲しいこともあり、1泊で実施する。

海岸林の活動も3年程行っている。日帰りで若者が中心。各地の活動者と交流しており、3年後ぐらいに東北の海岸で活動と一緒にやるための準備をしている。

愛知万博に出展したが、環境のことを子どもに伝えるために、河童と天狗をモデルにした。また、紙芝居や歌等の作品を募集して関心を持ってもらうことも行っている。作品を使った出前授業では、一般の人が語り部になっている。

○活動紹介：JUON(樹恩) NETWORK

農山漁村、いわゆる過疎地域と都市を結ぶ活動を行っている。農家のお手伝いやエコサーパーという資格検定制度も実施。大学生協が廃校活用や、阪神淡路大震災の際の仮設学生寮建設において農山村の方と出会ったことがきっかけで98年に設立された。設立の経緯もあり、東日本大震災の復興支援活動も行っている。

全国13ヶ所での森づくり活動や、東京や関西での青年リーダー養成講座に加え、特徴的な取組みとして国産間伐材製「樹恩割り箸」を行っている。学生に間伐材、国産材を使ってもらおうということで始まった。なお、障害者の仕事づくりとして、全国7ヶ所で製造を行っている。農山村地域への経済的効果も生み出している。

## 3 分科会担当者コメント

早くは70年代から、主に都市住民が森林ボランティアとして農山村地域に行き、荒れた森を守る活動を行ってきた。80～90年代には全国各地に団体が生まれ、市民による手入れが盛んに行われるようになったが、最近では、木の利用が整備に結びつくこ

とから、「木づかい」が多くの団体の関心事となっている。

森林をはじめとした日本の自然を守るためには、手入れが必要であり、農山村に人が行くことだけでなく、人が住み続けることも重要である。そのためには、収入がなくてはならない。食糧や木材の自給率が低迷する今、農山村の活性化につながる活動について学んだが、逆に、都市の変化の必要性についても考える機会となった。



事例報告者の新田さん(右)と澁澤さん(左)



事例報告を受けてグループディスカッションを行った



人数が少ない分、会場との密なやりとりができた

## 分科会 26 島民の願いとつながりづくり



日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 16人

会場 青山学院大学 1号館 137

## 出演者

## ◆コーディネーター

川村 岳人さん (健康科学大学福祉心理学科 講師)

## ◆事例報告者

桑村 健司さん (三宅島社会福祉協議会 事務局長)

伊藤 宏さん (八丈島島民大学講座実行委員会 代表)



## 1 概要

川村さんのコーディネートのもと、伊藤さんと桑村さんのお二人から八丈島と三宅島の事例報告をしていただいた。また、各々の報告に対する質疑応答とともに、事例報告者以外の離島からの参加者による話題等についても全体で共有した。川村さんは、沖縄県庁で離島や過疎地域の振興に関っていた経験から、あらゆる島民の思いをどのように島の維持・発展に反映させていけるかについて、参加・連帯・ネットワークづくりというキーワードを提示された。事例報告として伊藤さんは島民大学について、桑村さんは災害時に発揮された人のつながりの力についてお話しされた。

## 2 主な内容

## ○はじめに

## 川村さんの話

前職が沖縄県庁で離島や過疎地域の振興を担当していたことから、「島民の願いとつながりづくり」に関心を持っている。また、この場が、昔ながらの地域共同体において、リーダー的存在の声だけでなく、軽視されがちである様々な個人の思いも吸い上げながら、その思いをどのように人と人のつながりづくりに反映させていけるか、考えていく場とした。

## ○伊藤さんによる事例報告

八丈島とのかかわりは、高校教員として八丈島に赴任したことがきっかけ。一度東京に戻ったものの八丈島での生活を選んだ。高度経済成長を経て公害等が深刻な時代において、混迷する時代の状況を自分で見極めて歩いていけるように、地域に開かれた生涯学習の場を自分たちの手で築こうと島民大学を開始。知り合いの大学教授をはじめ、著名人に直接談判するなどして講師をお願いした。1980年に開始してから30年あまり経過した。時代、社会の変化と共に各人の興味も多様化して、皆で同じ話題を共有することの難しさを感じる。また最近では、メンバーの高齢化もあり、いつ幕を閉じるか考える。

## 質疑応答

Q 島での定住への思いに人それぞれ温度差があるのではないかと。

A 島の生活が楽しくて好きだという人と、他の選択肢が現実的でないからという人がいるであろうことから、統計的なアンケートでは人々の思いが出てこない。

Q 島で保健市になりたいが実情はどうか。(大学生)

A 島外の人が住みついてという例が多く見受けられる。

## ○参加者(八丈島から)の声

自分が若い頃は、就職試験など言葉で大変苦労したが、テレビの普及で方言が急激に姿を消した。

## ○桑村さんによる事例報告

自分は神奈川から三宅島に移り住んだよそ者。2000年の噴火災害時に地域の人のつながりがどのように力を発揮したかについて話したい。島内の避難所へ避難する際には近隣の住民同士で声をかけあい、また避難所でも、自主的に後に避難して来る人の支援を行う人の姿が見受けられるなど、地縁・血縁の強さを感じた。島外避難となった際に、小学生の子どもと親を引き離したことは、子どもの心を傷つけ家族の崩壊も引き起こす要因となったと考える。島外避難は、住民が都内の何箇所かの都営団地へ避難するなど、広域分散避難となったので島民の電話帳を苦労しながら作成した。その根底には、被災の当事者同士で助け合えなければならぬという、住民の昔ながらのコミュニティがあった。また、避難先では、島民は避難先の地域住民としてもコミュニティ活動に積極的に関与するなど、地域の担い手となっていった。これは、仮設住宅ではなく、日常の生活が営まれている場所で暮らすことになったからだと考える。避難生活が4年半にわたり、最終的に三宅島に帰島したのは、6割だった。若い人達の家族で崩壊した例が多い。

## 質疑応答

Q 支援者を支援する仕組みはあったか。どのように支援者は癒されてきたのか。

A 被災者でありながら支援者に回る立場の人は、心身ともに大変消耗する。行政のみならず、社協、民間高齢者施設の職員などへの医療面、メンタル面のバックアップは必要。マスコミでは報道されていないが、重いうつ病にかかり自死した人もあり、行政職員もかなりの数の人が辞めた。

Q 支援として何をしてほしかったか。(社会福祉士を目指す学生)

A 災害支援策としてはレベルが高かったと思う。被災者を何もかももらう存在にしてはならないという、都の上層者の考えがよかった。

## ○最後に

## 川村さんの話

離島の特徴である地縁・血縁に基づく人間関係の濃密さは、窮屈さと一体のもので、帰島にあたっては、夫婦間でお母さん方は帰りたくない、お父さんたちは親の面倒や仕事の関係で帰るといった話があった。そのあたりを丁寧に紐解いていかないと、離島における本当の人と人とのあり方は評価できないと考える。

## 3 分科会担当者コメント

日本には、島民が暮らす島は、400ぐらいあるという。ほとんど過疎化、高齢化、財政難の傾向にあるようだ。しかし、島民は、住み慣れた島で暮らしを充実させたいと願い、活動している。

東京都には、伊豆七島、小笠原諸島に島民が住み、園芸、漁業、観光など特徴ある島づくりを続けている。

噴火で離島を余儀なくされた三宅島でも、三宅島社会福祉協議会が都内にちらばった島民のつながりを強める活動を続け、帰島後も困難な状況のなかで活動している。八丈島では、人間に本来備わっている学びの欲求を満たす場を八丈島民大学講座実行委員会が30年間提供してきた。

どの事例も、人間が人間らしく生きたいと願う島民の気持ちとつながっている。この気持ちは、約400の島に住む島民とつながり、そして、私たちが住む街の人々ともつながっているのではないだろうか。

残念なことは、今治市社会福祉協議会関前支部長島崎義弘さんの報告がやむを得ない事情でできなかったことだ。人口約200人の今治市岡村島では、社協が活発に活動をしている。そのつながりから、島民自らが、だれもが集える居場所「きないや」を開設している。見学のとき、高齢者が立ち寄るなかで、小学生二人がカードゲームを楽しんでいた。

分科会に大学生2名が、島嶼の生活に関心を持ち、積極的に参加してくれた。若い世代への橋渡しが少してきたかなと思え、うれしかった。



左から川村さん、桑村さん



伊藤さん



日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 25人

会場 青山学院大学 2号館 129

## 出演者

## ◆モデレーター

鈴木 江理子さん(国士館大学文学部 准教授/認定NPO法人多文化共生センター東京 理事)

## ◆パネリスト

小林 普子さん(NPO法人みんなのおうち 理事)

藤巻 秀樹さん(日本経済新聞 編集委員)

吉山 昌さん(認定NPO法人難民支援協会 事務局次長)

アベベ セワジさん(NPO法人アディアベバ・エチオピア協会 代表)

マリッブ センプさん(カチン料理店「アジア料理実の里」店主)



## 1 概要

外国につながる人たちの生活を考えるとき、どうしても就労問題などの視点からの支援を考えがちである。しかし、共に地域に暮らす者として、就労だけでは解決できない暮らしの中での問題も多々あるのではないだろうか。ここでは、長年東京・新宿で暮らしている或いはともに暮らしを支え合う活動をしている方々の実践を伺いながら、生活者としての視点を切り口に、外国につながる人たちと地域の人たちがどのようにつながりを作っていったらよいかを、参加者と共に考えた。

## 2 主な内容

## ○主旨説明

## ○モデレーター、パネリスト自己紹介

## ○モデレーター 鈴木江理子さんから導入として

本分科会では、地域社会に増えつつある外国につながる人たちの存在に注目し、「共に生きる」ためにはどうすればよいかについて、新宿における実践を中心に紹介する。さらに、居住している住民、生活環境や産業構造などの地域特性が異なる他地域の状況を参照することで、それぞれの地域社会における「共生」の今後について、参加者とともに考え、各地域での今後の実践にいかしてほしい。

「共に生きる」ためには、文化的な「ちがいを認めることと同時に、相互の関係において「おなじ」であることが求められる。そして、「おなじ」になるために3つの壁(言葉の壁、制度の壁、心の壁)を越え、社会経済的な平等を確立する必要があるが、そのためにどのような取組みが行われているのであろうか。

## ○パネリストの方々にそれぞれ直面している問題とそれについての取組みをお話していただく。

## 【難民支援協会 吉山さんからのお話】

「難民とは」というお話から、難民の方の現状、難民認定までの厳しい道のりなど、また、在留資格などの社会保障、制度の面、また就労、生活の場面では差別などを受ける場合もあり、精神的にも厳しい状況にあるなど、様々な課題についてお伝えくださった。お金もなく、保険制度も受けられないため、医療を受けることもままならない人も、ホームレス状態になってしまう人もいる。

最近では就労などの生活の場でのサポートも増えて来た。今後も支援というよりは共に暮らしを考えていきたいとおっしゃる。

## 【NPO法人みんなのおうち 小林さんからのお話】

外国にルーツのある子どもたちとその家族の支援をしている。新宿で永年子どもたちの支援をしている立場から、その現状や、教育現場での問題点をお伝えくださった。

日本人子どもとまったく変わりはないが、両親或いはいずれかの母国語が日本語ではなく、文化も日本ではないことがハンディになっている。また親の在日理由がはっきりしない場合もあり、親に翻弄されながらの生活を強いられ、先行きも定まらず学習意欲も沸かないまま成長していく子どももいる。学年や年齢があがるほど落ちこぼれていってしまう子どもが多いが、教育現場でのサポートはされづらく理解されない状況であり、かつ環境も整わない。また地域からも孤立してしまいがちで、地域は子どもを住民として認識していない。現在、このような困難を抱えた外国にルーツのある子どもの居場所と学習の場を運営しているが、もっと行政も地域も地域の子どもの置かれている立場を理解すべきである。

## 【マリッブ センプさんからのお話】

ミャンマー(ビルマ)のカチン族出身。日本に来た経緯や結婚、出産、夫のオーバーステイの体験、難民支援協会との出会いから難民申請、日常生活での困りごと、などをお話くださった。日本語ができなかったことで、子どもの予防接種なども受けづらかったお話、不動産の契約、銀行振込、道を聞くととき、子どもの学校でのいじめ、ご近所との挨拶など、一見日常での小さな出来事のように思えるが、実はご本人たちにとっては日常のことだからこそ困るのだ、ということが実感できるお話だった。

就労も含めてすこしずつ手探りしながらも、地域の中で暮らしている様子が窺える。

## 【アベベ セワジさんからのお話】

20年以上前に来日し、日本女性と結婚して、大学生の子どもがいる。エチオピアの内戦の状況、日本にいるエチオピア難民の状況などをご紹介くださる。

エチオピア人による全国初のNPO法人を立ち上げ、日本人にエチオピアの文化や歴史を知ってもらう活動や、エチオピアと日本が友好的な関係を作れるような活動を行っている。エチオピア人が多く住んでいる葛飾区を中心に活動している。難民申請や生活保護など制度の問題でも、様々な団体とも連携しながら考えていけるように努力をしている。社会との接点を作るのは言葉であるので、日本語学習にも力をいれている。時間はかかるが、ご自分たちの小さな活動が周りを動かしていくことになるとういとおっしゃる。

## 【藤巻さんからのお話】

愛知県豊田市の保見団地は団地の約半分が日系ブラジル人など外国人である。トヨタ自動車の下請け企業で働いている。団地の中は、ブラジル人と日本人の

交流がほとんどない。ブラジル人は日本の情報が入らない。医療や制度の利用のしにくさに非常に困っていた。ブラジル人同士が助け合って暮らしているが、日本人の主婦を中心としたNPOが外国人児童の学習支援などもしている。最近ようやく、ブラジル人と日本人の交流の動きも出てきた。

新宿区大久保では、韓国、中国をはじめ、様々な国の人が住んでいる。韓流ブームで観光に来る人で賑わっているが、ちょっと路地に入ると、イスラムのモスクや韓国の小さな教会もたくさんあり、外国人の生活空間であることが分かる。街が汚くなったという日本人住民の批判もあり、韓国人の人たちが街の掃除などを始めている。留学生も多い。

新潟南魚沼市では、国際結婚が多い。農村に中国、韓国、フィリピンなどから花嫁が来るが、文化や生活習慣の違いに戸惑い、封建的な農村の風習に馴染めないケースが多い。舅や姑との関係に悩む人も少なくないが、英語教室や外国料理の店を始めたり、ヘルパーや整体師などの資格をとるなど、ビジネスで自己実現を図る人もいる。しかし、家族の協力を得られない人もおり、外国人同士のつながりも薄く、孤独に悩む人が多い。最近では、花嫁の連れ子の日本語教育支援が問題になってきている。

3つの地域は日本語の問題が共通していることのほかは、それぞれまったく違い、多様である。

## ○質疑応答

## ○まとめ

労働を目的に来日している人も多いが、生活の場である地域として、こちら側が受け入れる態度を表現しなければ、お互いが歩み寄ることはできない。そのため仕掛け作りが必要であるが、実現されれば、より一層活力のある地域になるだろう。そうは言ってもなかなか難しい部分もあり、行政と地域、さらにNPOなどが前向きに協力し合っている仕掛け作りは重要であり、また一人ひとりの思いや意識をどう変えていくのかも今後の課題ではある。

## 3 分科会担当者コメント

登壇者5名の方々に、それぞれの立場から現状や想いをご報告いただいたが、特に外国につながる人のお二人の表情は真剣そのもので、実際に地域に暮らしている生活者であるからこそ戸惑いや悩み、生活のしにくさなどがあるにも関わらず、なお地域の人たちにとけ込みたいと望んでいるのだと、それが、「暮らす」ということなのだ和我们に訴えてくるものがあつた。外国人であるかどうかではなく、地域で共に暮らす隣人としてお互いに理解し合おうとする努力が私たちにも必要であることを感じた。

## 分科会 28

人が人をつながりあうために～世界各地の実践から学ぶ～  
(公益財団法人 三菱財団助成事業)

**日時** 11月13日(日) 9:30～12:30 **参加者** 137人

**会場** 国連大学 ウ・タントホール

**出演者**

山崎 美貴子 (東京ボランティア・市民活動センター 所長)  
山本 祐司さん (外務省国際協力局地球規模課題総括課 企画官)  
マルコ バン ダ リーさん (国連ボランティア計画本部パートナーシップセクションチーフ)

◆**コーディネーター**  
フィリダ パービスさん [イギリス]

◆**プレゼンター**  
パトリア ナブティさん [レバノン]  
ヴァレンティン モリショー ヨンボ ジェマさん [コンゴ出身、イギリス在住]  
フェルナンダ ボーンハウゼン サーさん [ブラジル]

**1 概要**

人と人の結びつきは近年益々弱くなってきている。社会的孤立状態にある人々、社会的に排除されやすいマイノリティ、貧困状態にある人々に対して、世界のボランティア・市民活動はどのような独創的な考えを提起し、どのような支援活動を展開しているのだろうか。「ボランティア国際年10周年」にあたる本年、ブラジル、レバノン、コンゴから3名のプレゼンターを迎え、各国での経験を踏まえて、示唆に富んだ報告をうかがった。

**2 主な内容**

「ボランティア国際年+10」推進委員会を代表して、東京ボランティア・市民活動センター所長の山崎美貴子による挨拶で会をスタートした。山本祐司さん (外務省国際協力局地球規模課題総括課 企画官)による挨拶、マルコ バン ダ リーさん (国連ボランティア計画 [UNV]本部パートナーシップセクションチーフ)による基調講演が続き、その後、コーディネーターとパネリスト3名でプレゼンテーションとパネルディスカッションを行った。

## ○フェルナンダ ボーンハウゼン サーさん(ブラジル)

ITを活用したボランティアの動員と活動の推進について語った。インターネット上にボランティア情報を公開することで、ボランティア未経験者や若者を引き込むことができるようになり、必ずしも現場へ足を運ばなくても、自宅やネットカフェから募金活動、ボランティア広報活動、通訳、教育などの活動に参加することが可能になった。個人ボランティアやNPO/NGOに対して、オンラインでトレーニングを行えるようになったというお話があった。

## ○パトリア ナブティさん(レバノン)

アラブ地域では、コミュニティでの相互支援のあり方が次第に変化し、廃れてきている。ステータスや宗教を超えてお互いに助け合う習慣を子どものうちから身に付けられるよう、開発を行っている学校教育を見直すプログラムについて語った。

## ○ヴァレンティン モリショー ヨンボ ジェマさん(コンゴ出身、イギリス在住)

イギリスで自らが移民であるという立場から、移民、ストリートチルドレン、障がいを持つ女性たちの困難な状況に対応しようと「アフリカストーン財団」を設立した。不利な状況に置かれている人たちが収入を得られるようになるための研修や教育を提供している。移民はマイナス面ばかりではなく、コミュニティを再活性化するという意味で役に立つ、人というリソースを活用して各国の連環づくりを目指しているというお話だった。

## ○閉会のあいさつ:マルコ バン ダ リーさん

ボランティアには、短期のものもあれば、長期のものもある。オンラインのボランティア、現場に出向いてのボランティア、頭を使って行うもの、身体を使うもの、地域での活動、海外での活動など、様々なボランティア活動があり、それぞれが自分に合った活動をすれば良い。ボランティア活動がグローバルで、普遍的であって、世の中を明るくするというを示していきたいというコメントがあった。

**3 分科会担当者コメント**

日曜日の朝早い時間にもかかわらず、とても多くの方にお集まりいただき、プレゼンターたちも今回のシンポジウムへの関心の高さに驚いている様子だった。英語を学ぶ学生の参加者が多く、パネルディスカッションに向け、英語で記入した質問用紙も数多く回収された。質問は「ボランティアを始めたきっかけは？」というものから、各国の宗教事情やボランティアセンターの運営について、オンラインボランティアの問題点など、プレゼンテーションの内容を踏まえて様々なものが寄せられた。各国の文化的背景やボランティアの現状を知ることができ刺激になったという感想もあった。時差があるなか、春からメールのやり取りで準備をしてきたが、コーディネーターのパービスさんの進行も見事で、参加者の満足度が高い会になったと思う。



## 分科会 29

「患者が先生」 みんなで作るこれからの医療とは？  
～市民参加で生まれる新たな視点～

出演者の方々

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 32人

会場 青山学院大学 1号館 130

## 出演者

酒巻 哲夫さん (群馬大学医学部付属病院 医療情報部長 患者支援センター長)  
 加納 貞彦さん (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 患者講師)  
 大木 里美さん (中枢性尿崩症 (CDI) の会 副代表 患者講師)  
 林田 素美さん (株式会社林田プロジェクト 代表取締役社長 患者講師)  
 野村 美恵子さん (ビデオ出演 患者講師)  
 竹沢 弘子さん (高野山真言宗佛母寺)  
 野村 俊男さん (患者講師家族)

話し  
合う

## 1 概要

いざ病気になった時、診察・手術・入院・告知などの非日常の場面で、医療者とのコミュニケーションのギャップに悩み、不安に陥りながらも思ったことがいえない患者、一方で患者からの意見をクレームと受け取る医療者もいるという。群馬大学医学部で、2006年から医学生を対象に5年間続けられてきた患者講師による授業『患者さんの声を聞く』は、未来の医療者と患者が長時間話しあい、理解し合う画期的な授業である。この授業に関わってきた患者講師が自らの患者経験や思い、医療や医学生に対する期待を語り、医療者と、病の当事者である患者相互の視点をつき合わせて共に育つ「共育」こそが、未来の医療のカギを握っていることを問題提起する。

## 2 主な内容

①群馬大学医学部授業『患者さんの声を聞く』について～酒巻教授より、ビデオを交えて紹介

この講義は、患者が教壇に立って講義をするという形で体験を話し、その後学生と患者講師との間でグループディスカッションを行うという、これまでにない、ある意味冒険ともいえる授業である。

②授業の背景となった市民アンケートの紹介～林田さん

180人の市民アンケートから、医療者の心無い言葉などで傷ついたこと、無力感を持ったことなど、患者のせきらな言葉が紹介された。

③患者講師から学生に伝えたかったこと

- ～林田さん、大木さん、加納さん、野村さん(ビデオ)
- ・患者と医療者の認識のギャップが少しでも縮まれば。
  - ・患者会を上手く利用することなど伝えたい。
  - ・あなたたちの知らない後ろ側には、患者の日常があるのだということを伝えたい。
  - ・病院や診察が日常の医者と、どきどきしながら病院に行く患者という、日常と非日常の違い、言葉の持つ力について伝えたい。
  - ・専門分化で医学が進歩する中、チーム医療について語り合いたい。自分の手に負えないとなったら、よその先生を紹介してほしい。
  - ・過度の情報があふれる中で、患者も知識を得ている。わからないことがあったら、率直に、「わからない」と言ってほしい。
  - ・医者と一緒に治すという気持ちになることが一番病気が良くなっていく早道ではないか。「患者という勉強台」がある。「患者の声を聞く」ことで、共に病気を治すという道に向かえることを伝えたい。
  - ・ひとこと患者にかける言葉が、とても患者の力にな

る。若い先生方にも患者の話を聞いてあげることはでき、患者にとって病気を治す力になる。

④授業を受けた学生の反応について

授業をサポートした竹沢さんと酒巻教授より紹介。教科書を中心に医学を学んできた学生が、5年生になって初めて生の患者さんを前にし、会話をすることで、自分の心で考え、改めて開眼する様子などが紹介された。学生は、病気の知識は持っているが、患者のことは知らない。この授業を通じて患者と本音をぶつけ合うことで、「なるほど、こういうふうに言われれば確かに誤診は起こるのかもかもしれないな。では何が問題なのだろうか」と考えるようになる。

⑤患者講師が授業を通してどのように変化したか

- ・真の患者中心の医療を実現するためには、患者と医療者がお互いの声をよく聞くことが大事であるということを学んだ。
- ・医療者と患者が共に育つ、共育。共に育つということが非常に大事で、患者の側も不満を言っているだけではよろしくないと思うようになった。
- ・専門分野を活かし、アイパッド (iPad) のシステムを開発し、コンピュータの力でサポートすることで医者と患者のコミュニケーションを高める研究を始めた。
- ・地域の大学・市民・行政協働で勉強会を始めた。
- ・患者会や他の大学での活動を広げた。 など

⑥フリーディスカッション・質疑応答

参加者が小グループに分かれ、フリーディスカッションを行った。医療者の立場から、ケアワーカー・ソーシャルワーカー・医療相談員、社会福祉士などが連携し、地域医療・チーム医療に取り組む事例。告知について、患者会について、かかりつけの医師と大学をつなぐまちづくり、コミュニティづくり、ネットワークについてなど、多様な立場で意見交換を行い、それぞれ発表を行った。群馬大学で取り組んだことが全国に広がり、地域医療が充実することへの期待があった。

⑦まとめ

～今年亡くなった患者講師野村さんのビデオメッセージの紹介の後、酒巻教授より

社会的には、患者を「人間」として見ていないという批評が非常に大きい。では患者を人間と見るということはどういうことか。そのために、どういうことをやったらいいのか？患者の本当の言葉はどうやって出てくるのかと考えてこの講義を作った。患者さんに話してもらうことで、自分でそれを学び取る。実習はあるが、それは人として理解するよりも、教科書内容を理解する課題設定になっており、決して人を見てはいない。単に患者さんの献身的な犠牲の上で成り立つ医学教育というのはもう終わりにした方がいい。医師と患者が共に支え合って、教え合うという、

そういう環境が出来ることを目指している。社会を変えていく上で、若い人から変えていく。それを見て年配の先生方に波及する。道は長いかもしれないが、お互いに話をしながら、だんだんに培っていくものではないか。

## 3 分科会担当者コメント

ボランティアは、市民参加で自発的・自主的に課題解決に参加することである。この分科会では、患者が病気を治すために「医療に参加する」ことを一緒に考える時間を持つことができた。「真の患者中心の医療」「共に育つ共育」というキーワードが出た。この授業を通して、患者と学生が本音で語り、互いに育っていく。それが授業を超えて様々な活動に広がっていることに、新しい医療への希望を感じた。



フリーディスカッションの様子

## 分科会 30

あなたの活動に+ESD！  
～ボランティアパワーを地域の未来づくりにつなげよう～体感  
する

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 35人

会場 青山学院大学 1号館 138

## 出演者

## ◆ファシリテーター

森 良さん (NPO法人エコ・コミュニケーションセンター 代表)

## ◆事例ゲスト

関 宣昭さん (NPO法人里山を考える会 代表)

三隅 佳子さん (北九州ESD協議会 副代表)

吉澤 卓さん (認定NPO法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議〔ESD-J〕 理事)

## 1 概要

持続可能な開発のための教育 (ESD) を地域でつながりを広げるキーワードとして活用している北九州の里山を考える会の関宣昭さんの事例発表と、それを面的にサポートする北九州ESD協議会の三隅佳子さんの事例発表を手がかりに、「みんながつながって地域社会を変えるには」というテーマで、ワールドカフェ形式の対話を行った。

里山を考える会の関さんは、緑地公園を認知症の方といっしょに楽しむイベント「もりフォーラム」の事例が、里山保全の取組みと、認知症への取組みが、テーマの壁を越え、まちぐるみで実施されていることが紹介された。

北九州ESD協議会の三隅さんは、環境首都である北九州の原動力が、高度成長期の公害問題を克服した一人ひとりの生活者の力にあり、様々なテーマの活動がより有機的につながって、持続可能な社会実現に向かっていく重要性を話された。

休憩後、ワールドカフェ形式で参加者が中心になって対話を行い、その対話の内容から重要と思われるキーワードを抽出して、参加者それぞれの地域での取組み案をワークシート形式でまとめ、最後に、総括と+ESDプロジェクトの紹介をESD-Jの吉澤さんから行って終了した。

※ワールドカフェとは、席替えをしながら、その場にいる多様な参加者との意見交換、対話を行う話し合いの手法

## 2 主な内容

開会・オリエンテーション 9:30～9:50 (20分)

9:30 スタート ファシリテーター森さんによる進行

趣旨説明(5分) 森さんより

今日の流れ説明(5分) 森さんより

ゲスト紹介(10分)

三隅さん、関さん、吉澤さんを紹介(それぞれひとことずつ)

情報提供 9:50～10:30 (40分)

9:50 北九州市の事例紹介(15分) 関さん活動紹介

10:05 三隅さんの話(15分)

10:20 QAもしくは解説(10分)

ファシリテーター森さんによる解説

「都市と農村がつながる」「テーマの違う活動同士がつながる」

10:30 休憩

ワークショップ 10:40～12:00 (80分)

20分×4ラウンド

ワールドカフェ形式「みんながつながって地域社会を変えるには？」

まとめとクロージング 12:00～12:30 (20分)

12:00 ふりかえりシート(15分)

記入と数名発表「きょうの体験から学んだことを自分の地域でどう活かしたいですか」

12:15 まとめと+ESDプロジェクトの紹介(15分)

吉澤さん

12:30 終了

## 3 分科会担当者コメント

参加者の方は、ベテランの方5割、中堅の方3割、若手2割とバランスのよい構成で、どの世代の方も、ワールドカフェ形式の対話の時間は積極的に意見を交わされていた。テーマとして掲げた「みんながつながって地域社会を変えるには」に対しては以下のキーワードが参加者から提示された。

「情報共有」「教育やつながりあうために集う場」「好奇心」「若い人にリレー」「コーディネータ(つなぐ人)が重要」「つながる仕組み」「助けて！お願い！といえる関係づくり」「(皆でつながるテーマとして)生と死について」「リタイヤした人と地域をどうつなげるか」

これらのキーワードから、今回のテーマであるESDについて、下記のようなまとめを行って分科会は終了した。

地球のうえの生きとし生けるものすべてと  
かぎりある資源を念頭に  
将来を見据えて(子・孫の代まで)  
お互いをとめあう社会をつくるために  
立場や価値観(枠)を超え、  
創造的な関わりあいを通じて  
学び合い、人づくりをしましょう！



三隅さんによる事例紹介



日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 35人

会場 青山学院大学 1号館 131

## 出演者

## ◆パネリスト

船山 泰範さん(日本大学法学部 教授)  
 稲葉 剛さん(NPO法人自立生活サポートセンター・もやい 理事長)  
 小山内 清孝さん(更生保護法人東京美華道場 理事長)

## ◆進行役

田鎖 麻衣子さん(NPO法人監獄人権センター 事務局長)



## 1 概要

近年、日本では、社会の周縁に追いやられた人々を排除する流れが強まり、罪を犯した人々への厳罰化も進行している。こうした厳罰化が持つ問題点を指摘するとともに、社会の周縁に追いやられた人々の状況を見つめ、誰もが生きやすい「寛容な社会」について考えた。

## 2 主な内容

最初に、刑法の専門家であり弁護士として刑事弁護の現場で活動されている船山泰範さんより、現在の厳罰化について報告がなされた。船山さんはまず、処罰の範囲を全体として広げていくという意味の「厳罰化」と、同じ犯罪に対してより重い刑罰が科されるようになる「重罰化」の両方を含めた、広い意味の「厳罰化」が進んでいる点を指摘した。

そして、「希望が全くない今の刑罰のあり方で良いのか」と問題を提起した。その一例として、いま日本には1700人を超える無期懲役囚があり、仮釈放の可能性が極めて低い事実上の「終身刑」となっている点を指摘した。その上で、船山さんは、「犯罪という問題は社会の問題であり、社会の経済状態や福祉政策などと深く関連しているのであり、犯罪について短絡的な考え方をしてはならない」と述べた。また、船山さんは「厳罰化が犯罪を増やす」と指摘し、厳罰化の結果として、刑事取調べでの人権侵害、受刑者への社会的偏見の高まり、実刑判決の増加、刑務所の過剰収容と受刑者の処遇悪化などの弊害が起こっていると指摘した。

そして、厳罰化の最も重要な弊害として、仮釈放の減少により受刑者の更正支援が妨げられている点を指摘し、受刑者が出所する際に必ず更生保護や就労支援が受けられる制度を作っていくべきと提言した。また、教育の中で裁判や刑罰、更正の意味を考える「法教育」(法教育)が必要と提言した。

続いて、進行役の田鎖さんから、フィンランドとノルウェーの受刑者処遇や更生支援の現状について報告があった。両国では、死刑は廃止され、受刑者が社会に復帰することを前提とした刑罰制度が採られています。受刑しながら刑務所の外に出動したり学校に通ったり、外泊もできるようになっている。ノルウェーでは、市街地の集合住宅の中に「開放型刑務所」が設けられ、刑務所職員と受刑者が対等の関係で刑務所が運営されている。また両国では、各自治体において、刑事事件に関する民事的な紛争解決の仕組みとして「調停制度」があり、市民が調停員として参加している。

後半のパネルディスカッションでは、まず小山内さんから、出所者の社会復帰を支援する更生保護法人の取り組みについて報告があった。小山内さんは、長年、

様々な罪を犯した出所者を受け入れてきたが、彼らは何も特別な人間というわけではなく同じ人間であり、「罪を憎んで人を憎まず」という精神が社会的に薄れてきている点に懸念がある、と指摘した。

次に、稲葉さんから、困窮者支援の相談や住居支援を行っている「もやい」の活動を踏まえて報告があった。仮釈放の減少により、何のサポートも受けられない満期出所の方が増え、出所後すぐに生活が困窮して、もやいに相談が来る現状があること。また、厳罰化で見られる短絡的な思考が他の政策分野にも広がっており、生活保護を受けている人を見下し、貧困そのものを犯罪化して管理していくという刑罰的な考え方が福祉の分野に持ち込まれようとしている、との懸念を示した。

また、小山内さんからは、受刑者には高齢者や障がい者が多く、出所後は社会福祉の分野の支援が必要だが、更生保護法人の現場では手を差しのべきれていないし、一部の刑務所は老人ホーム化している、という指摘が出された。稲葉さんからは、仕事と住まいという人の生活を支える二本柱について、公的な政策があまりに貧弱なため、貧困の拡大を引き起こしている、との指摘があった。

そして、各パネリストからは、貧困や不寛容な社会の拡がりによって、人々が社会的な孤立・孤独に陥っている状況がある、との認識が示された。最後に、社会から罪を犯した人や社会的弱者を排除するのではなく、皆、病や障がいや困り事を抱えた同じ人間なのだという視点から様々な社会的取組みを進めていく必要がある、との指摘が出された。

## 3 分科会担当者コメント

当日は、会場からも、罪を犯した人々への差別をいかに無くしていくのかという質問が出されるなど、個々の団体の活動や特定の政策についての議論というより、どのような社会を私たちは望むのかという大きな視点の議論がなされた。



## 分科会 32

水谷修さん講演会  
夜回り先生が熱く語る ～今、子どもたちを救えるか！？～

会場は満員。親子でいらした参加者も。

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 243人

会場 江戸東京博物館 ホール

## 出演者

水谷 修さん (花園大学/関西大学/大阪経済大学 客員教授/水谷青少年問題研究所)



## 1 概要

定時制高校の教師をしていた頃から始めた夜回りをきっかけに、子どもをいじめやリストカットなどの問題から救う為、日夜、奔走している水谷修さんに、子どもを取り巻く環境や、大人が子どもに果たすべき役割について、講演して頂いた。

## 2 主な内容

元々、「昼の世界」の住人として高校教師をしていたが、21年前、定時制高校の教師をしていた親友が、子どもたちに希望を持ってなくなったことについての喧嘩を発端に、定時制高校の教師となった。当時の定時制高校は荒れていて、授業を通して関係を作ろうという試みは不可能だった。そこで、その荒れた行動を取る子どもたちにいる繁華街、「夜の世界」で夜回りを始め、今も続けている。

「夜の世界」はキラキラと輝き、子どもたちには魅力的に見えるかもしれない。だが、やくざなどの「夜の世界」の大人たちにとって子どもは餌食でしかなく、声を掛けられドラッグや体を売るなどの犯罪に巻き込まれる。大人は本来、子どもたちに美しいもの・醜いものを教える役目があり、美しいものを見つけることは生きる力になる。

「夜の世界」で出会った子どもたちの中には、成長し、グループで自主的に夜回りをするようになった者や、暴走族のトップから足を洗い、農家を継ぎ、農業的な自立を目指す自助グループで働くようになった者もいる。水谷青少年問題研究所の事務所を手伝いしている者もいるが、事務所では新しい問題に直面している。「夜の世界」で眠らず、大人たちによって犯罪に巻き込まれる子の他、自分の部屋で夜、眠れない子どもたち、リストカットをする子どもが増えている。

今、昼の世界に夜の世界が入り込んできている。パブル崩壊をきっかけに、真面目に努力しても報われない世の中になってしまった。仕事でイライラした父親が家庭にそのストレスをぶつけ、そのストレスを受けた母親が子どもに当たり。両親の喧嘩や不仲、冷たい言葉が子どもを追い詰めている。人を信用出来なくなった子は常にビクビクと怯え、誉められず正当に評価されない子は自分に自信が持てなくなる。いじめ・不登校・引きこもり・リストカット・薬物など、これらも問題は子どもが大人に問題を突きつけているのだ。

夜、眠れなくなる、というのが最初の症状。ストレスで脳が疲れていても体が疲れていない子には、夕飯後、10Km走らせれば良い。肉体をおろそかにせず、健全な体に健全な精神を宿させる。心が病んだら、心の治療ではなく、体から治療していくのだ。

今の子どもたちは相手の直接見えないメールや携帯電話、インターネットに救いを求め、問題が長期化

する。人間は本来、昼行性の生き物で、夜は不安になったり、感情的になったりするもの。そんな夜にメールやインターネットに救いを求めても、人を傷つけたり、傷ついたりする。

更に深く苦しむようになり、リストカットになる。年々増えているが、素人には止められない。薬でもなかなか止められない。医師に処方された薬によるOD(薬物過剰摂取)にも繋がっていく。何故切るとかと言えば、親の過剰な期待や学校の問題、PTSDなど、爆発しそうな心を少しでも抑えようとするから。原因を取り除き、環境を変えていかなくては止められない。リストカットを投薬無しで止めるには、宗教の力も効果がある。畏敬の念やおそれを感じるとやらなくなる。宗教施設を開放して、子どもの受け入れをしているところもある。

先日、沖縄戦で多くの民間人が殺された洞窟を訪れた。米軍の攻撃から大人は子どもを、子どもは自分より小さな子を命がけで守ろうとした。命はそういった連続と続く長い歴史がある。生き抜き、繋いできた大切さを子どもたちに忘れないで欲しい。

大人には全ての子どもを幸せにする義務がある。子どもが泣くこと、死ぬことは大人の恥であり、罪なのだ。受けた愛や優しさが多い程、子どもは人を信じ、悪い道に行かない。愛や優しさは振り返って、そこに積み重ねるものなのだ。



熱く語る水谷先生



講演終了後は、参加者と直接触れ合った。

## 3 分科会担当者コメント

水谷さんのお話は単なる解説や理屈ではなく、多くの経験と挑戦から語られる内容であり、子どもたちに対する深い愛情が伝わってくるものだった。いかに現代社会が子どもたちにとって厳しい環境であるかということが訴えられ、社会全体として子どもたちを守っていく必要があるのかということを理解することができた。参加者の多くは水谷さんの活動のすごさに感動していた。

## 分科会 33

若者よ、ボランティアへ行こう！  
～若者と一緒に考える未来のこと～

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 42人

会場 江戸東京博物館 会議室

## 出演者

ハセベケンさん (NPO法人「green bird」 理事長/渋谷区議会 議員)



## 1 概要

多くの若者をゴミ拾いボランティアに巻き込んできたハセベケンさんが、「これまで携わってきたこと」、「これからの未来のこと」、そして「若者をボランティア活動につなげるヒント」など、現場で汗をかいてきた人ならではのお話を通じて、「若者」「ボランティア」「参加」というキーワードについてみんなで一緒に考えた。

## 2 主な内容

## ○greenbird立ち上げストーリー

前職の博報堂を退職してから、greenbirdの立ち上げ、渋谷区議員当選に至るまでのお話。

日々、広告に携わる中、独立して公共的な広告を作り、世の中に強いメッセージを作りたいという想いが、当時強かった。仲間から推されて、地元である表参道でまちのプロデューサーを目指すため渋谷区議会議員へ立候補する。

表参道での活動は朝のゴミ拾いから始まった。子どもの頃は嫌いだったゴミ拾いだが、自発的にやるゴミ拾いは全く違った。毎朝ゴミ拾いをするうちに、拾う捨てるのイタチごっこになっていることに気づく。そして、この課題に取り組むためにgreenbirdを立ち上げる。

## ○greenbirdの目的・活動内容

体感マーケティングをする中で、ゴミを捨てることを「いいか・悪いか」で判断するより、「かっこいいか・かっこ悪いか」で判断するのが表参道というまちでは響くだろうと、方向性が決まった。まずは、ポイ捨てがかっこ悪いぜという空気を作る。そして、宣言文を作り、文の最後に「絶対に…できる限り」という一文を付けた。ボランティアは無理をしない範囲で行っているのがいい、そして世の中のみんなが一度ボランティアを体感して、みんながいちボランティアになったら優しい世の中なのではないか。そのために入りやすい空気を作っていく。1つのわかりやすい例をあげると、ゴミ拾いにきたボランティアに「ゴミを拾って愛を拾おう」「朝の合コンです」と声かけをすることで入りやすい空気を作っている。

そして、面白いことに、一度ゴミ拾いをした人は、二度とポイ捨てしなくなる。

ボランティアのイメージにある、堅苦しくて、無償で高潔なもの、ではなくて、もっと簡単に参加できるものというメッセージを伝えていきたい。一度参加してくれば、全て分かる。大事なことは、まず参加してもらう事。

## ○greenbirdの今後

来年5月で10年経つgreenbirdだが、これまで1人でクリエイティブなことをしてきたわけではなく、仲間と作ってきた。無償で高潔なものというボランティアのイメージをぶっ壊したいという想いでこれまで続けてきた。これからも続けていくが、自分がおっさんになった時に、ポイ捨てがかっこ悪いぜというのはかっこ良くないので、徐々に若い人たちへ引き継いでいきたい。

## ○その他の活動

今年3.11があり、greenbirdの仙台チームの仲間も被災した。人手が足りないところへ、バスツアーを組んで送っている。続けて行ってほしいものもあるが、それより、より多くの人たちにボランティアへいってもらいたい。シブヤ大学でも若者が参加しやすいような授業を作っている。ちょっと発想を変えてみるだけで、いろいろなものが変わる。今のことで正しいのか逆をしたほうが正しいのか常に思考すること。例えば、いいと悪いを、かっこいいとかっこ悪いと発想を変えてみる。

## ○最後に

自分自身がそんなにボランティアをするタイプじゃないのに、ここまでのめり込んでいる。ボランティアに行くチャンスはたくさんある。チャンスがあるのに、気が引けていけなかったり、いろいろな要因で躊躇してしまっている人たちに、気が引けないようなつかみやすいチャンスを提供したい。

## 3 分科会担当者コメント

企画の想いとして、ボランティアという言葉が近年少しずつ広がっている一方、敷居の高いイメージは拭いされていない。ただ、ボランティアが社会・地域を変えることに関心を持っている人も増えてきており、私自身も若者と関わるNPOで働いており、どうすれば敷居を低くできると日々想いを馳せている。今回の講演で巻き込み側と若者側の両方に向けて、ヒントとなり一歩となるようなメッセージを発信してもらいたいと思いを企画した。

ハセベケンさんのお話では、ボランティアへ行きたい若者には、無理せずやろう！と、敷居を下げる気持ちにさせ、コーディネーターの方々にとっては、プログラムの魅力をどう伝え巻き込んでいくか刺激になることが多かったよう。30分の質疑応答では時間が足りず、終了後も質問者が絶えなかった。「若者よ！ボランティアへ行こう」というタイトルの通り、これから少しずつボランティアの輪が広がっていくことを願う。



## 分科会 34 ニート・ひきこもりの再チャレンジを支援する



**日時** 11月13日(日) 9:30～12:30 **参加者** 33人

**会場** 青山学院大学 1号館 133

### 出演者

#### ◆コーディネーター

石川 隆博さん (NPO法人アンガージュマンよこすか)

#### ◆活動報告

岩間 文孝さん<<地域との連携>> (NPO法人ピアサポートネットしづや)

小塚 康一さん<<NPOと行政との協働>> (足立区産業経済部参事就労支援課長)

渡邊 幸義さん<<企業の取り組み>> (株式会社アイエスエフネット 代表取締役)

話し  
合う

## 1 概要

高校を中退した若者、就職活動がうまくいかなかった若者、人間関係が苦手な若者など様々な困難を有する若者が増えている。若者の再チャレンジを支えるためには、行政機関、企業、NPOなどが連携・協働し、きめ細やかな支援を行うことが必要である。

この分科会では、行政、企業、NPOによる取り組みの事例を基に、これらの機関が協働・連携することで生まれる可能性や、若者の再チャレンジ支援における課題などについて話し合った。

## 2 主な内容

まず、コーディネーター役の石川さん (NPO法人アンガージュマンよこすか) から、「ニート・ひきこもりの方と社会とを結びつけ、再チャレンジを支援する」という分科会のテーマについて確認があった後、渡邊幸義さん (株式会社アイエスエフネット)、小塚康一さん (足立区産業経済部参事就労支援課長)、岩間文孝さん (NPO法人ピアサポートネットしづや) の順に、それぞれの団体の概要と、取り組みについて話した。

まず渡邊さんから、ニートやフリーター、ひきこもり、障害者など様々な困難を有する人々の雇用を創造する「20大雇用」を目標にしていることや、業務内容を細かく分割し、これまで就労が困難だと見られた人々の強みを生かせる仕事を割り当てることで、就労を可能にしていく、という話があった。

次に、小塚さんから足立区が行っている若者の就労支援の取り組みについて話があった。小塚さんは、ニート・ひきこもり状態にある若者の就労支援には、相談の受け入れを広げるだけでなく、就学や就労などの「出口」を支援することが大切で、そのためには、行政やハローワーク、企業、NPOなど関係機関の連携が必要であるという話があった。

最後に岩間さんから、NPO法人ピアサポートネットしづやが行っているアウトリーチ活動や、地域のイベントに参加している若者たちの様子について紹介があり、実際に活動している若者たちから、活動の概要や活動に対する思いなどの話があった。ピアサポーターによるアウトリーチ型の支援や、グループワーク活動などを通して、若者が人々とのかかわりの中で学びあい、自己肯定感や社会性・主体性を育てていくことを目標にして活動をしている、という話をした。

その後、質疑応答の時間では、参加者から出た質問を石川さんが集約して、それにパネリストが事例やデータを基に答えながら、話を深めていった。

その質問の中に、体調を崩し、市の相談機関に相談に行ったら、たらい回しにされてしまったという若者の話があった。様々な形で、連携が進められているが、利用する側からすると、まだ連携ができていないと感じるという彼のコメントは、連携していくことの重要性和その難しさを会場中に感じさせるものであった。

最後のまとめとして、岩間さんは関係機関との連携だけでなく、地域の人々のネットワークづくりをしていくことが、NPOの大切な役割だと話した。渡邊さんは、『今の社会は「無関心」と「ルール」が多すぎる。他の人を「かまう」ことをしないから、周りにも無関心になってしまう。そういう社会を変えていかなければいけないと感じている。』という話をした。小塚さんは、これまで若者の就労支援を通して、NPOの頑張りを感じていることや、行政という立場でできることを頑張っていくしかない、とコメントした。

最後にコーディネーターの石川さんは、厳しい社会状況の中で一人ひとりができることを頑張り、そしてがんばっている人々が集まり、協働することが大切だ、とまとめた。

## 3 分科会担当者コメント

ひきこもりの若者と接していると、彼らの優しさや真面目さにいつも感心する。そして、安易に「支援」という言葉を使っている自分を反省する。

「再チャレンジ」というテーマには、ニートの時期があっても、今はひきこもっていても一時期だけで、いつか自分らしい社会とのつながりを見つけていくはずだという想いがあった。その「再チャレンジ」の応援団が、この分科会から生まれたら最高だなという密かな願いもあった。

今回の分科会では、渡邊さんの「強みを生かした就労」という話や小塚さんの「行政という立場でできることをやっていく」など力強い発言を聞くことができた。そして、石川さんの「一人ひとりができることを頑張る」という発言に、自分自身が背中を押してもらったように感じた。

## 分科会 35

## 多文化ユース・フェスタ2011～多様なことは楽しいこと！ 素敵なこと！～



**日時** 11月13日(日) 10:30～12:30 **参加者** 221人 **会場** 東京ウィメンズプラザ ホール

**出演者 ◆出演団体**

NPO法人 多文化共生センター東京  
世界の子どもと手をつなぐ学生の会(CCS)  
NPO法人 みんなのおうち  
NPO法人 聴覚障害教育支援大塚クラブ  
BBCユース・チーム・チャレンジとUBS社員ボランティア  
松坂国際交流協会  
子ども国際交歓会

**◆審査委員長**

早見 優さん

**◆特別出演**

Gene Z (ジンズ)

**◆主催団体**

東京ボランティア・市民活動センター、UBS、多文化共生センター東京

体感  
する

## 1 概要

『多文化ユース・フェスタ2011』は、国際都市 TOKYO に暮らす多様な文化をもつ青少年たちが中心となって、「多文化共生のコミュニティ」を創っていくことを目指し、自分たちの文化やメッセージを社会に発信することを目的として実施した。外国にルーツをもつ青少年や手話でコミュニケーションする青少年たちが歌やダンス、映像などを発表し、特別ゲストとUBSからなる審査員が優れたパフォーマンスを表彰した。

今回は手話もひとつの言語であり、文化であることと見え、いろいろな国から日本にきた子どもたちと交流することで、多様性(ダイバーシティ)がいっそう広がった。

また、午後からは希望者に対して、特別ゲストの Gene Z が音楽のワークショップを実施し、多文化共生をテーマにした「HARMONY (ハーモニー)」という歌ができあがった。

## 2 分科会担当者コメント

今年で4年目を迎える「多文化ユース・フェスタ」は、全国ボランティアフェスティバルの中で開催した。当日は200名を超える多様な文化・背景をもつ青少年が会場に集まり、映像、歌、踊りを一緒に楽しんだ。特別ゲストの参加もあり、会場は熱気に包まれた。青少年にとって何らかの形で外に向かって表現活動をするのは、本人たちの自信になったり、チームワークが生まれたり、外の世界(社会)とのつながりになっていくことがわかった。

今回は外国にルーツをもつ子どもたちだけでなく、手話でコミュニケーションする子どもたち、児童福祉施設で暮らす子どもたち等、同世代の多様な状況にある青少年たちが参加した。互いのおかれた状況に共感しつつ、「違い」を超えていくきっかけとなってもらえたら非常にうれしいが、より相互理解を深めるような仕掛けが必要であるように思う。

また、全国ボランティアフェスティバルの中での開催なので、都外の関係者にもご参加いただいた。今後、日本各地でおきているコミュニティの国際化や多文化共生といったテーマについて、社会福祉協議会やボランティア・NPO関係者のネットワークが広がっていくことを願っている。

## 3 主な内容

①主催者あいさつ・ゲストの紹介：東京ボランティア・市民活動センター 河村暁子

東京ボランティア・市民活動センターでは、グローバルな金融グループであるUBSと協働し、多様な文化や背景を持つ子どもたちが自分たちの個性に自信を持ち、自尊心を高めながら、積極的に社会に参加していくことを応援する「多様な子どもたちの架け橋プロジェクト (Building Bridges for Children Project: BBCプロジェクト)」を実施しており、『多文化ユース・フェスタ』もその一環として実施していることを伝え、ぜひ多様な文化を楽しんでほしいと話した。

次に、本日の特別ゲストとして、早見優さんと Gene Z のお二人をご紹介した。早見優さんをご自身も幼少期をハワイで過ごし、2つの文化で育ったという経験をお持ちであり、今回、審査委員長をお願いした。また、Gene Z は2人とも多文化の背景を持つ音楽ユニットである。女性のガウさんは、フィリピン人とイギリス人のご両親に生まれ、12歳から来日した。男性ヴォーカリストのマイケルさんはガーナ人と日本人のご両親をもち、10歳までガーナで育ち、ドイツに留学。その後、日本のJリーグでも活躍したことを紹介した。

②発表 ～映像の部～

映像を通して、親の国際結婚により日本で暮らすことになった子どもたちの日常生活や将来の夢を紹介したり、子どもたちが街角で日本人たちに国際意識や人権意識についてインタビューした様子が伝えられた。

- ・ぼくのわたしの虹の架け橋「フォトストリート」 松坂国際交流協会
- ・「たぶんかフェスタの子どもたち」 多文化共生センター東京
- ・「ヒューマン・ライツ」 CCS ムーヴィー・チーム

③発表 ～歌とダンスの部～

外国にルーツをもつ子どもたちの歌や踊り、バンド演奏、沖縄の三味線と歌、手話やハンドベルも含めた多言語での発表があった。

- ・バンド Descent
- ・さんしんと歌 アジアは友だち！子どもコンサート
- ・ダンス ADOBO CREW
- ・ダンス Beejam
- ・歌とダンス チーム・ライジング
- ・多言語で歌う「It's a Small World」 BBCユース・チーム・チャレンジ

④特別ゲスト演奏：Gene Z

インターナショナルな音楽ユニットである Gene Z が、日本語や英語、スペイン語、タガログ語などで歌い踊ると、会場全体も一緒に踊って盛り上がった。また、自分たちが多文化をもちながら成長してきた経験の中から、音楽は国や民族や文化を超えて楽しめるものであることや、自分の夢をもち、心をオープンにしていることの大切さを子どもたちに伝えた。

⑤多文化アワードの発表：審査委員長 早見優さん

早見さんがハワイから日本に戻ってきたときに、外見は日本人だけれど、中身(文化)は米国人であった体験などを紹介しながら、他の人と違うことは、その人の大切な「個性」であると話した。そして、優秀なパフォーマンスをしたチームにサイン入りの表彰状を渡していただいた。また、これらのチームが所属するNPO法人には、子どもたちの支援に活用してほしいとUBSから賞金が贈られた。

優勝：ADOBO CREW

準優勝：BBCユース・チーム・チャレンジ

審査員賞：CCS ムーヴィー・チーム

⑥閉会のあいさつ：UBS証券会社コミュニティフェアーズ&ダイバーシティ 堀久美子さん

UBSは、多様性(ダイバーシティ)がコミュニティを強くすると考え、多様な文化をもつ社員が協力しあって働いており、また、多様な文化や言語、個性をもつ人々のコミュニティでの活動を支援している。青少年たちに、ぜひ、自分たちの文化や個性を大切にしながら、社会で活躍してほしいと応援メッセージを送った。

## 分科会 36

大震災における中・高校生の支援の可能性  
～現地高校生の活動と栃木・東京の中・高校生の後方支援～

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 80人 日時 青山学院大学 1号館 134

## 出演者 ◆司会

河西 祐季くん(順天高校)

## ◆事例報告者

- ①千葉 貴弘さん(東松島市社会福祉協議会 東松島市災害ボランティアセンター)  
高橋 悠くん(石巻高校3年生)  
須田 郁海くん(石巻西高校2年生)  
②作新学院高等学校 生徒会・ボランティア部  
③順天中学校・高等学校 社会福祉部  
④東京女学館中学校・高等学校 ボランティア部

## ◆助言・まとめ

栗田 充治さん(亜細亜大学 教授)

話し合う

## 1 概要

大震災における中・高校生の取組みについて、震災に合った現地高校生、被災地でもあるが支援活動をしている栃木・高校生、被災地へ足を運ぶことが困難な東京の中・高校生の3者が、個人として、あるいは生徒会や部活動を通じて活動していることを報告した。三者の置かれた状況は異なっているが、中・高校生がそれぞれの状況で主体的に地域とつながって支援の一役を担うことができ、大人とかわらない重要な役割が果たせることが理解された。また、支援の方法もそれぞれの場所で多様な方法がとられており、それらが複合的につながって大きな支援になっていくことも理解されたのではないかと。また、中・高校生がボランティア活動を通して地域の一員であることを自覚していくプロセスが確かめられた。

## 2 主な内容

## ○事例報告

## ①東松島市災害ボランティアセンター

市の防災無線でボランティアを募集した所、多くの中高生(中には小学生も)が来所し運営スタッフとして活動。全国から駆けつけた運営ボランティア(大人)と同じテーブルで解決策を考えるなど、「自分たちで考えて行動する」高校生は大きな力となった。(千葉さん)

自宅等は津波被害に合わなかったが「自分の生まれたまちを何とかしたい」という気持ちでセンターへ行き、高校生でも人の役に立てること、自分も地域の一員であることを強く実感した。全国の人の応援を受けて、感謝の気持ちを直接伝える場がもっと多くあると思う。(須田くん・高橋くん)

## ②作新学院高等学校 生徒会・ボランティア部

県内に避難者がいることを知り何か手伝いたいという多くの生徒の思いにより、学校全体で取り組む「オール作新」が立ち上がった。支援活動は、春休み中に行った避難所の支援活動を中心とした第一期から、冬に向かう仮設住宅での窓拭き隊など第四期まで継続している。一人ひとりが取り組む中で、人とつながりを、身を持って感じている。

## ③順天中学校・高等学校 社会福祉部

学校行事の強歩大会をスポンサードウォークとし寄付を集めたり、食糧・衣料品の支援を全校生徒に呼びかけ、フードバンクのNPO団体の協力を得て送る活動などを行った。東京にいてできる支援を考えた時、日頃行っている活動の幅を広げることで誰でもできる活動があること、時間とともに関心が低下してしまうため支援を継続させる必要性を感じている。

## ④東京女学館中学校・高等学校 ボランティア部

顧問の助言や情報提供などにより、全校生徒に呼びかけて被災者の方が必要としている夏物衣類を集め直接届けた。文科省の「子どもの学びポータルサイト」のネットを通して、運動靴の支援を被災者に直接行った。その後も学校記念祭で来場者にメッセージを書いてもらい届ける企画を行い、「思いやりの気持ちを持ち続けること」「自分たちの周りから声をかけていくこと」で日頃から思いやりのある世の中を作っていきたいと感じている。

## ○質疑とまとめ

会場での質疑を通じて、高校生たちは、今回の支援活動を通じて得たことをそれぞれ明確に語っていた。(地域の中の自分を発見、日頃からの問題意識の高まり、進路や進学といった将来への動機づけや気づき、ボランティア活動への導入方法など)栗田先生は、それもボランティア活動の成果と捉え、「今後自分たちの地域で災害が起こった時、社会の中心となった現在の高校生が地域をどう守るのか問われることになる。地域で安心して暮らせるために、まちを知り理想のまちに近づけるために何ができるのか、まちづくりという発想が大切」と結ばれた。

## 3 分科会担当者コメント

三者の高校生がそれぞれの置かれた状況の中で、それなりに達成感のある活動を行っており、ボランティア活動を通して地域の一員であるという自覚を深めていく経緯が共通理解されたと考える。また、この研修会により三者の高校生間の相互理解と連帯感が醸成され、ボランティア活動の意義を自分の立場・環境を越えて理解できたと思う。

また、中・高校生がそれぞれの状況で主体的に地域とつながって支援の一役を担うことができ、大人とかわらない重要な役割が果たせることが理解されたと考える。

高校生自身が司会進行を行い、論点の整理が難しい場面もあったがよくまとめていった。こちらが発言を兼ねながらアドバイスを少し入れる工夫も必要だった。発表者以外の高校生自身の発言がもっと多くてもよかった。広報の方法を整備すればもっと高校生の参加が多くなっていただけたのではないかと。



## 分科会 38 江戸しぐさに学ぶ今しぐさ



日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 51人

会場 国際ファッションセンター 3階 ホール

## 出演者

桐山 勝さん (NPO法人江戸しぐさ 副理事長)



## 1 概要

資料にそって、桐山さんが話しをし、「照代勝覧」DVDを見て、江戸しぐさの「傘かしげ」を参加者が実践した。

## 2 主な内容

江戸しぐさが誕生した時代や、背景の説明とともに団体の目的等の紹介。

江戸しぐさである、雨の日にしぶきが相手にかからないように互いの傘を外側に傾げすれ違う「傘かしげ」、腰をこぶしひとつ分浮かせて席を詰める「こぶし腰浮かせ」、狭い道で人がすれ違う時、肩が触れたりしないように互いに肩を後ろの引き、体を斜めにすれ違う「肩引き」、足を踏んでしまったら素直に謝り踏まれたほうもこちらこそという「うかつあやまり」などを紹介し、参加者に傘かしげを実践してもらう。江戸しぐさが生まれたのは、日本各地から集まった人々が江戸は大都市になり、商人たちが相手の動作や言葉から心の中を読み取り、対応することでご鼻肩を獲得する実体験から生まれたといわれている。江戸しぐさは「思いやり」「おかげさま」「お互いさま」「言霊」「思う草と書き思草」など、心構えを具体的な行動に示し、みんなが見よう見まねでそのようなしぐさをするようになり、せずにはいられない江戸っ子のくせ(江戸しぐさ)となっていくという背景の説明。

江戸っ子の条件「目の前にいるの人は仏の化身と考えよ」など、その本質「指切りげんまん」「見てわかることは言わない」などの話し。江戸の人づくりとして、生命が宿ってから、誕生し、年齢に応じて、必要な素養を身につけていく「三つ心、六つ躰、九つ言葉、十二文、十五理で未決まる」江戸の養育法を説明。心したい江戸しぐさ「言葉づかい(あい澄みません・ありがたい・もったいないなど)」「お付き合い(あいさつ・会釈のまなざし・お愛想目つきなど)」「往来しぐさ(傘かしげ・こぶし腰浮かせ・肩引きなど)」の紹介。

最後にまとめとして、江戸に商人たちが永年の体験に基づいて築いてきた「人の上に立つもの的心得」であり、現在の私たちも身につけなければいけないしぐさである。

## 質疑応答

Q:江戸しぐさは、江戸の独特の文化から生まれたのか(上方にはないのか)

A:全国各地にいろいろなしぐさがあり、江戸しぐさが残ったのは、侍が、商人がいないと生活が成り立たないとわかり、商人の真似をしたからである。

## 3 分科会担当者コメント

一人ひとりが持つ「おもいやり」の気持ちを「かたち」に表すことを目的に本分科会を開催した。

江戸しぐさは、江戸の商人たちが体験に基づいて永年にわたって築いてきた「人の上に立つ者の心得」であり、結果的に「人間関係を円満にする心得」であることを確認できた。

また、江戸しぐさは実践哲学であり、知識として知っているだけでは何の価値もなく、日常生活の中でお互いに実践し合い、磨き合ってこそ意味があると思う。江戸しぐさを学び、実践することは、必ず、今日抱えている課題に応えるきっかけになると考えている。なぜなら、人間が変わらない限り社会も国家も変わりようがないからだ。

引き続き、東京青年会議所は「江戸しぐさ」をベースとした「東京しぐさ(いましぐさ)」の伝播を行っていく。よろしく願い致します。



桐山さんによるお話し



「傘かしげ」の実践

## 分科会 39

企業の社会貢献活動発表会  
～進化する「社員参加型」の社会貢献活動～

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 55人

会場 国際ファッションセンター 11階 113

## 出演者

龍治 玲奈さん(日本マイクロソフト株式会社 法務・政策企画統括本部)  
大洞 和彦さん(トヨタ自動車株式会社 社会貢献推進部)  
伴瀬 晴美さん(ジョンソン・エンド・ジョンソン 社会貢献委員会事務局)  
堀 久美子さん(UBS証券会社 コミュニティアフェアーズ&ダイバーシティ)

体感  
する

## 1 概要

経済の中心地である首都東京では、多くの企業が社会貢献活動やCSR活動に取り組んでおり、その活動分野も内容も非常に多彩になってきている。

特に、最近では、社員やその家族も積極的に参加したり、社員の専門性や企業の本業・リソースを活かした活動も展開されている。また、社員研修として取り組む企業も増えてきた。今年おきた東日本大震災においても企業や社員が積極的に支援活動を展開している。

こうした各社の取組みを全国の関係者に紹介し、発表の後は質疑・応答や名刺交換を通して、ネットワークづくりを行った。

## 2 主な内容

## ①開会のあいさつ

東京ボランティア・市民活動センター 企業担当  
河村暁子

過去20年間の企業の社会貢献活動・社員ボランティアの歴史について説明し、10年程前から外資系やグローバルな日本企業を中心として、社員が参加する社会貢献活動が進められてきたことを話す。

## ②各社からの報告:

(詳細については、各社のホームページ参照)

## ◆日本マイクロソフト株式会社

法務・政策企画統括本部 龍治玲奈さん

マイクロソフトの企業市民活動は、ITを活用した「就労支援」「社会参画」「教育」「地域活性」などをテーマとしている。今年から、東京ボランティア・市民活動センターと協働実施している『自立UPプロジェクト』は、児童福祉施設の青少年たちの就労支援を目的としており、多くの社員がボランティアとして参加し、ITスキルを教えたり、子どもたちに自分の仕事の経験を話したり、子どもたちのよいところや強みを表現することを手伝った。

また、社員が協力し、若者無業者にインターンシップを実施したり、東日本大震災では、IT関連企業と一緒に3,000台のPCを寄付し、社員ボランティアが現地で技術面をサポートしている。

## ◆トヨタ自動車株式会社

社会貢献推進部 大洞和彦さん

トヨタでは、「いかなる企業といえども、社会の理解・支援がなければ、発展はおろか、存在すら危うくなる」ことを肝に銘じながら、社会や地域の課題解決に取り組んでいる。

社員が参加する社会貢献活動には、担当部署が業務で取り組む「自主プログラム」と、社員が個人として参

加する「ボランティア活動」とがある。自主プログラムは一定の「公平性」が問われるが、社員のボランティア活動であれば、支援先をより自由に選択することができる。例えば、今回の東日本大震災では岩手県南部・気仙地区で約200名の社員がボランティアとして活動している。

ボランティア支援の重点分野としては、森づくりなどの環境保全、災害復興、福祉の3分野であるが、特に福祉分野については、ニーズの把握が難しいことが課題だと感じている。

## ◆ジョンソン・エンド・ジョンソン

社会貢献委員会事務局 伴瀬晴美さん

J&Jの『我が信条(Our Credo)』に、「地域社会への貢献」がうたわれており、60年以上前から世界各地で社会貢献活動を実施してきた。地域の問題を地域の人々と解決していきたいという考え方から、非営利団体と協働して社会貢献活動を行っている。

活動のテーマは「健康」であり、日本では「女性」「子ども」「高齢者」の4領域に注力して、子どもの事故予防、DV(ドメスティックバイオレンス)の被害を受けた女性の心のケア、自殺対策、高齢者と若い世代による世代間交流「寺子屋回想法」などの活動を支援している。

社員も様々な形で自主的に参加しており、自然災害時、被災地支援のための緊急災害支援募金や、全国主要都市(約30プログラム)で実施しているボランティア月間などがある。

## ◆UBS証券会社

コミュニティフェアーズ&ダイバーシティ  
堀久美子さん

UBSは「責任ある企業市民」として、地域社会の幸せに貢献し、地域社会との信頼関係を構築すること、また、社員の意識向上とよりよい地域社会づくりへの貢献を支援することを目的とし、「教育を通じたエンパワメント」と「より強い地域社会の構築」をテーマに多様な社会貢献活動に取り組んでいる。

2007年から日本オフィスでは、社員とその専門スキル、オフィスや会議室、研修、協賛事業、企業間ネットワークなどのありとあらゆる多彩なリソースを活用した活動が展開されており、すべての活動の企画から評価にいたるまで、社員・NPO・受益者が参画するようにしている。

## ③全体での質疑・応答

本分科会には、全国各地の社会福祉協議会やNPOセンターなどの中間支援組織のスタッフ、企業の社会貢献・CSR担当者や社員、社会福祉施設やNPO、大学生などが参加しており、積極的な質疑・応答があった。

まず、中間支援組織から、「企業はどのような団体と

協働し、どのようなプロジェクトであれば支援したいのか」という質問があり、各社からは、「企業としてはステークホルダーに説明義務があるので、プロジェクトの成果をあげ、それを定量的および定性的に示すことが重要である」「パートナー団体との対話が重要であり、課題認識と目標が共通していること」「地域的な広がりや、波及効果が期待できること」と、回答があった。

また、企業で働いている人から、「社員の自主的な活動が企業の社会貢献活動に発展するためにはどうしたらよいのか?」という質問に対しては、「各社の社会貢献の条件にあうことと、多くの社員が参加できること」と回答。

最後に、企業の社会貢献担当からの「社員参加を進める際のポイントは?」という質問に対しては、「社員が共感できること」「きっかけづくり」「参加しやすい活動」とのことだった。

分科会終了後には、多くの参加者が報告者の方々と名刺交換をしながら、追加の質問をしており、非常に関心が高いことがわかった。

## 3 分科会担当者コメント

申込み段階で定員60名を超えたので締め切らせていただいたが、全国各地から多様な立場の方が参加してくださったことを大変うれしく思っている。

参加者アンケートからは、分科会の内容に対して喜んでいただいていることがわかったが、今回報告していただいた4社は様々な先駆的な取り組みを行っているため、「もっと詳しく話を聞きたかった」、「質疑・応答の時間がもっとあればよかった」というリクエストも多かった。ぜひ、次回は2時間以上の時間をかけて実施したい。また、地方都市での展開についても話し合えたら素晴らしいと思う。

いずれにしても、参加者の積極性に驚かされた。東京以外の全国各地で社員参加型の社会貢献活動が展開されることを多いに期待したい。

## 分科会 40

## 喫茶の力

～働く・出会う・広がる、障がい者の喫茶コーナーの取り組みから～



活動報告の様子

日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 46人

会場 青山学院大学 2号館 230

## 出演者

## ◆進行役

杉野 聖子さん (江戸川大学総合福祉専門学校)

## ◆活動報告

小幡 勉さん (岩手宮古市 カリー亭)

伊藤 勲さん (NPO法人やまぼうし 理事長)

## ◆助言者

小林 繁さん (明治大学 教授)



## 1 概要

障がいのある人が働くカフェやカレー屋などの事例を通して、喫茶で働くことの意味を考え、魅力について知ることのできる分科会になった。様々な作業工程がある喫茶の仕事は、工夫次第で障がいのある人が働きやすい職場となる。また、職場の人だけでなく、地域のお客さんとの関わりの中から幅広いコミュニケーションが期待できるなど、喫茶の仕事は障がいのある人にとって多くの可能性がある。熱意ある数々の活動報告に、会場の参加者も興味深げに耳を傾け話に聞き入った。

## 2 主な内容

## ○活動報告

## ①「やまぼうしのカフェ・レストラン事業20年の軌跡」(NPO法人やまぼうし 理事長 伊藤勲さん)

カフェ事業を軸とした「共に生き・働くまちづくり」では、1970年代からの歩みを振り返り、数々の事業について話を伺った。地域に根ざした活動は次々と広がり、近年では大学内に喫茶をオープンし、障がいのある人が学生と協力してカフェを運営している。「街が元気にならないと障がい者も就労できない！」障がいがある人の就労問題を根底から考え実践し続ける取組みが伝わる報告だった。

## ②「カリー亭の活動報告」(有限会社とりもと 代表取締役 小幡勉さん)

障がいのある人を雇用し、カレー専門店「カリー亭」を営んでいる。工夫された作業工程は、障がいのある人にも働きやすい。確かな味のカレーはネット販売などで広がり、全国に多くのお客さんがいる。

そんな矢先に遭遇した東日本大震災。「カリー亭」のある宮古市も甚大な被害に見舞われた。被災した宮古の街や「カリー亭」の写真を映しながら復興の様子についての話も伺った。「私たちの店は被害が少なかったから」と障がいのあるスタッフとボランティア活動も行ったという。日頃のスタッフ同士の繋がりが、震災時でも前向きに復興に取り組む原動力になっていると感じさせる活動報告だった。

## ○まとめ(明治大学教授 小林繁さん)

事例報告を通してテーマの「働く・出会う・広がる」について考えることができた。地域のお客さんと接することでの社会参加、みんなで分担して行う多様な仕事など、喫茶はいろいろな要素もっている。また、受け身の立場になることが多い障がいのある人たちが、自分たちからお客さんに働きかけサービスをする側となる。今回の分科会を通して喫茶の持つ可能性を再認識することができた。

## 3 分科会担当者コメント

今回の分科会を通じ、全国に600近くある「障がい者が働く喫茶コーナー」について、理解が深められたと思う。また、そうした場所が、単なる障がい者の就労の場だけでなく、今回の震災の際にも役立っていたり、不登校生徒のためや、地域の「居場所」としても有効であること、大学にとっても意味があることが事例を通じてお知らせできたのでは、と思う。熱い事例発表者のおかげで、時間が足りなくなり、十分話し合えなかったのが心残りだ。



会場内に取組みを掲示

## 分科会 41 社会人ボランティアやプロボノを広げる仕組みを考える



日時 11月13日(日) 9:30 ~ 12:30 参加者 57人

会場 青山学院大学 2号館 232

### 出演者

谷本 大樹さん (NPO法人NPOコミュニケーション支援機構 [a-con] 運営委員)  
 原 文字さん (NPO法人NPOコミュニケーション支援機構 [a-con] 運営委員)  
 廣 優樹さん (NPO法人二枚目の名刺 共同代表)  
 宮内 俊樹さん (ヤフー株式会社 Yahoo! ボランティア プロデューサー)  
 加雅屋 拓さん (NPO法人NPOコミュニケーション支援機構 [a-con] 代表)  
 長山 悦子さん (民宿PRボランティアアドノマド 共同代表)  
 成川 友仁さん (富山プロボノカフェ 代表世話人)



## 1 概要

定量調査により社会人のボランティア意識を紐解き、ボランティア活動を広げるためのヒントを探る。最終的には新規ボランティア獲得に活かせる施策をフレームワーク化し、整理する。

- 事前準備として「社会人のボランティア意識」に関する定量調査を実施
- 調査結果を元に、新規ボランティアを獲得するためのフレームワーク「A S C E S」を作成。
- 当日は調査の概要と今回の調査結果から得られた発見を共有。5人のゲストスピーカーが、調査結果の中で特に関心を持った部分についてライトニングトーク形式で共有。後半はA S C E Sを使ったワークショップを実施。Twitterを活用し、発表内容やグループワークで得た気づきを参加者に発信してもらった。(ハッシュタグ: #vfpb)

## 2 分科会担当者コメント

- ありそうでなかったボランティアについての意識調査を実施し、A S C E Sという形でフレームワーク化できたことで、今後のボランティアマネジメントに使える知見を発信することができた。
- 多様な登壇者からライトニングトーク形式で調査結果についての分析を聞いたことで、主催団体のバイアスがかかっていない発見や気づきがあった。
- 年代や所属等、多様な層からの参加があり、グループワークの内容に厚みがあった。
- グループワークで具体的な事例を元にA S C E Sで整理できたため、ただの知識でなく、参加者それぞれが持って帰れるノウハウを提供することができた。また、主催者やファシリテーターにも知見がフィードバックされた。



## 3 主な内容

○プレゼン① 社会人のボランティア意識調査レポート  
 社会人のボランティア意識に関する定量調査の概要と、調査から得られた発見を共有。

### 調査概要

名称: 社会人のボランティア意識に関する調査  
 調査目的: 社会人の「ボランティア意識」を紐解き、ボランティア活動を広げるヒントを探る。  
 調査手法: インターネット調査  
 対象エリア: 全国(都市エリアと地方エリアで割り付け)  
 サンプル数: 424人(有効回答数)  
 対象者: 18才~69才男女個人(職業不問、ただし社団法人・財団法人・NPO法人などの有給スタッフは除く) 割り付け:  
 ◆ボランティア関与度; ボランティア活動層: 直近2年以内にボランティア活動(震災ボランティア除く)をした人⇒212人、ボランティア興味層: 現在はボランティア活動をしていないが興味はある人⇒212人(以前活動していたが、直近2年は活動していない人を含む)  
 ◆プロフィール(エリア・年代) エリア: 都市部エリア: 東京都・大阪府・愛知県/ 地方エリア: 上記以外の都道府県、年代: 大学生/ 20代/ 30代/ 40代/ 50代/ 60代以上※エリア・年代は、均等割り付けを行い、人口構成比に合わせてウエイトバック集計を実施  
 調査期間: 2011年9月9日(金) ~ 9月11日(日)  
 調査企画: NPO法人a-con、NPO法人二枚目の名刺  
 調査機関: 株式会社マクロミル

○ライトニングトーク  
 5人の登壇者から、今回の調査結果の中で特に気になったポイントや、自分の経験を踏まえた知見を共有。

○プレゼン② 調査結果から考える「ボランティア興味層」をひと押しするヒント  
 調査結果を踏まえて、「ボランティア興味層」を巻き込み、新規ボランティアを獲得するための5つのポイントを共有。更に、実際にボランティア獲得のために取り組むべき項目を「A S C E S」というフレームワークにまとめ、発表。

※A S C E Sとは  
 ボランティア興味層がボランティア活動に参加するまでの意識変化を分解し、フロー化したもの。Attention (知る)、Sympathy (共感する)、Contact (参加してみる)、Engagement (メンバーになる)、Share (周りの人に広める)

○グループワーク  
 各グループを6人程度のグループに分け、各グループにファシリテーターを交えながら、A S C E Sを実際に使って思考を整理するワークショップを実施した(登壇者も各グループに1人配置)。

アイスブレイク: ひとり20秒で、名前・所属・出身地・苦手だった教科とその理由を共有。  
 ワーク①: 過去の経験や他の団体の事例から、自分が良いと思ったボランティア募集の施策を付箋に書く(個人ワーク)。

ワーク②: ワーク①で書いた付箋をグループ内で共有しつつ、その施策がA S C E Sのどの段階に有効な施策なのかを模造紙の上で整理する

ワーク③: 架空のNPOの事例を各グループに配布。ワーク②で模造紙に貼った付箋を、事例のNPOにとって有効な施策と有効でない施策に分ける。A S C E Sの各項目において有効な施策が足りない場合、施策を新たに考える。

発表: グループ内で話し合ったA S C E Sプランをグループごとに共有

○まとめ  
 登壇者から、全体を受けてのまとめコメントを発表。  
 主催団体からのお知らせ(今後のイベントスケジュール等)をし、終了。

## 分科会 42

NPO長期インターンシッププログラム！  
～若者、NPO、そして社会に何をもちたらずのか？～

オープニングの様子

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 14人

会場 青山学院大学 2号館 231

## 出演者

## ◆コーディネーター

中村 陽一さん (立教大学 21世紀社会デザイン研究科 教授)

## ◆登壇者

芦沢 壮一さん (公益社団法人損保ジャパン環境財団 課長)

原 美紀さん (NPO法人びーのびーの 事務局長)

菅原 睦子さん (NPO法人ばれっと 事務局長)

佐場野 良子さん (SSCSインターンOG)

今井 迪代さん (SSCSインターンOG)



## 1 概要

NPOでの長期にわたるインターンシッププログラムは、参加した学生やインターン受け入れのNPOに与えるインパクトは大きいと思われるものの、その評価は未だ十分に検証されていない。この分科会では、長期インターンシッププログラムの主催事務局、実際にインターン受け入れ経験のあるNPO団体、そしてインターン経験者からそれぞれ長期インターンで得たことや課題等について報告していただくと同時に、NPOでの長期インターンシッププログラムが、これからの市民社会に与えると思われるインパクトについて語って頂いた。

## 2 主な内容

## ○オープニング

## ①分科会主旨説明

## ②NPOインターンシッププログラム比較調査

NPOで長期にわたってインターンシッププログラムを展開している(展開していた)事例の比較調査報告

## ③SSCSインターンシップ奨励プログラムの紹介

## ○パネルディスカッション

テーマ：NPO長期インターンシッププログラムのこれまでの工夫・成果・課題について

パネリストの皆さんから、NPO長期インターンシッププログラムについて、それぞれの立場で各10分ずつ報告して頂いた。報告の中で印象に残った一言をそれぞれ抜粋する。

## ①損保ジャパン環境財団 芦沢さん

今の学生は大人と接する機会や時間が圧倒的に減り、社会に出てからもまともに大人と話せない、表現できない学生が増えてきたのではないかと感じる。そのことからインターン活動は社会に出る前に大人と接する貴重な機会となるのではないかと。活動を通して度胸を身につけ、自ら考え行動する人となるよう期待している。その成果はすぐに出なくても、5年以上先でもかまわないと考えている。

## ②びーのびーの 原さん

学生が団体のミッションに共有し、そのことを外で説明してもらうことも貴重な外部発信となるのではないかと。活動の場として、学生に現場(子どもとの関わり)と組織運営のどちらに重きをおいて学びの機会を提供した方が良いのか非常に悩ましかった。組織としてもインターンを受け入れることによって大きな気づきがあり、貴重な学びの機会となった。

## ③ばれっと 菅原さん

柔軟な思考のうちに様々な経験を通じて学ぶことが、次につながり、成長になると考えている。学生の活動レポートでは、活動開始からおおよそ3ヶ月目くらいに問題意識が芽生え、9カ月、1年と過ぎるころはNPO全体に対する提言まで書き出せるくらい大きく成長する。これは長期のインターン活動ならではの感覚。

## ④インターンOG 佐場野さん

インターンはボランティアとスタッフの中間のような立場であった。学生ボランティアの意見をスタッフに伝え、スタッフの意見をボランティアに伝えるなどコーディネーター的な役割を担った。また同じ時期にインターン活動を開始した同期の存在は大きく、自分自身の支えとなった。

## ⑤インターンOG 今井さん

活動開始時はインターンシッププログラムの事務局としての業務とは違う業務に関心があったが、同期やOB/OGと関わり自分自身も活動を継続する中でインターン経験が若者を大きく成長させることに気づき、最終的にはインターンシッププログラムの成果と課題を検討する研究会を提案するまでに至った。インターンシップを若者・NPOの双方にとって有意義なものにするにはいくつか仕掛けが必要。例えば、インターン生と団体で密なコミュニケーションをとるためのメンター、インターン生の金銭的負担を軽減させるとともに活動の起爆剤ともなる活動奨励金の存在である。

## ⑥コーディネーター 中村さん

NPOでの長期インターンシッププログラムを社会に広めていくには、それぞれの立場で培った経験知をどのようにつなげ、発信していくことができるのか、合わせてリソースを集約していくことも考えていかなければならない。NPOでのインターン活動は社会課題に取り組むことのできる貴重な機会であると同時に、学生にとっても学生を受け入れるNPOにとっても大きな学びを得る機会となることを社会に伝えていきたい。

## 3 分科会担当者コメント

NPO長期インターンシップ、これだけを聞くと「ああ、そんな取組みもあるのね」で終わってしまう人が大半であろう。しかし今回の分科会で、NPO長期インターンシップが育む多様な可能性を、会場に来て下さった人々にお伝えすることができたと思う。

インターンシッププログラムの成果は見えにくいものだ。

必ずしもすべてのインターン生やインターン受け入れNPO団体が、劇的に変化するわけでもないし、若者がNPOに就職すればゴールかと言われるればそれも違う。

多様な人々と関わることで、組織に「異物」が入り込むことを通して、他者の存在に気づいてゆくこと。そのようなちょっとしたことが市民社会をじわじわと醸成する可能性、そしていくつかのプログラム運営上のコツ、最後に何より、性急に成果を求めるのではなく長い目で見る心持ちを共有できていれば、幸いである。



パネルディスカッションの様子

## 分科会 43 それぞれの働き方、これからの生き方



**日時** 11月13日(日) 9:30～12:30 **参加者** 55人

**会場** 青山学院大学 2号館 236

### 出演者

西村 佳哲さん(働き方研究者/リビングワールド 代表)  
青木 将幸さん(ファシリテーター/青木将幸ファシリテーター事務所 代表)



## 1 概要

多く人は働かなければ生きていけない。でもみんなが望む仕事につけるわけでもなく、仕事につくことすら難しい現実。また一方で、多様な働き方という考え方が広がる中で、働くことに対価以外の価値を求める人も増えてきている。私たちは何のために働くのか？働くことで何を手にするのか？ゲストのお話を伺いながら、それぞれの働き方、これからの生き方を考える機会とする。

## 2 主な内容

- ・西村さん、青木さん自己紹介。
- ・参加者同士、自己紹介。なぜ、この分科会を選んだか、何を深めたいか、何を期待するか。また、それぞれの働き方、生き方について意見交換。(3人1組)
- ・西村さん、青木さんの働き方、生き方に関する考え方、この分科会テーマについて思うことについて対談。
- ・ゲストの話聞いて感じたこと、疑問に思ったことなどを参加者同士でシェア。(3人1組)
- ・後半の時間でこんなことを聞いてみたい、深めたい、感じたこと、などを参加者から発表。
- ・会場内(ゲスト、参加者)で意見交換。
- ・仕事とプライベート、分ける派が分けない派で意見交換。(ライフワークとライスワーク)
- ・参加者からの質問についてコメント。
- ・まとめ、ゲストから参加者へのメッセージ

## 3 分科会担当者コメント

自分の好きなことを仕事にするというだけでなく、どんな仕事であれ自分の仕事を楽しめるようにつくっていく、という視点での話が非常に良かった。それが生き方につながる。また、働くことと、仕事をするという言葉の意味は完全にイコールではないのかもしれないと漠然と思った。

進行面では、ゲストの対談形式に加えて、合間に参加者同士が意見交換したり、想いをシェアしたりする時間を多く設けたことにより、参加者の満足度が高まったのではないだろうか。参加者の発言や問いかけを大切にしているゲストのお二人の姿勢もあたたかく誠実で、一方通行にならない非常に充実した時間を過ごすことができた。





日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 50人

会場 国際ファッションセンター 3階 ホールアネックス

### 出演者

#### ◆コーディネーター

鈴木 健一さん(認定NPO法人神奈川子ども未来ファンド 理事)

#### ◆事例発表者

〔事例1〕高木仁三郎市民科学基金—市民的立場から原発事故を問う  
菅波 完さん(認定NPO法人高木仁三郎市民科学基金)

〔事例2〕東日本大震災現地NPO応援基金—なぜ現地NPOにこだわるか  
坂本 憲治さん(NPO法人市民社会創造ファンド 事務局長兼プログラム・オフィサー)



## 1 概要

市民社会の新しい価値を創造し、さまざまな社会課題を解決するため、市民が主体となって運営し、市民から寄付を集め、市民活動に助成を行う「市民ファンド」が、10年以上も前から全国各地で設立されるようになった。そのような市民ファンドが、今回の東日本大震災においても、独自の活躍をしている。この分科会では、2つの事例を通じて、市民ファンドだからできるお金の集め方・使い方について報告し、参加者の皆さんと一緒に、今後の市民ファンドのあり方を議論した。

## 2 主な内容

### (1) 市民ファンドをめぐる経緯

一昨年11月に開催された「市民セクター全国会議2010」のセミナーでは、多様な市民ファンドをつくり育てるためのネットワークの重要性が提起され、その後、各地の市民ファンドや市民ファンド設立を目指すNPO支援センター等が集まり、昨年6月に「市民ファンド推進連絡会」を発足した。東日本大震災が発生し、被災地の支援活動の支援のため、各地で市民ファンドが立ちあがってきており、市民ファンドの仕組みや役割に期待が高まっている。

### (2) 高木仁三郎市民科学基金(高木基金)

高木基金の目的は、現代の科学技術がもたらす問題や脅威に対して、科学的な考察に裏づけられた批判的できる「市民科学者」を育成・支援すること。高木基金の考える「市民科学」とは、私たちの安全、人権、環境、社会、平和を脅かす諸問題に対して、科学者としての専門性を持ちながら、市民の視点にたつて解明、解決をめざす営みと言える。未来を切り拓く科学は、政府や産業界の出資と管理のもと、国家や巨大企業の視点からおしすすめられるものではなく、真の公共性、公益性を追求する市民の自発的な活動の中からこそ生まれてくるであろうという期待を込めて、高木基金では、若手研究者や、NPO・NGO・市民グループ等で活動しながら「市民科学者」をめざす人々を積極的に応援したいと考えており、今回の震災においても、こうした目的を達成するための取組みを行っている。

### (3) 東日本大震災現地NPO応援基金

3月、日本NPOセンターに東日本大震災現地NPO応援基金を設置。救援や生活再建のための活動を行う「現地NPO等」を資金的に応援。救援期(第1期)、生活再建期(第2期)とし、「臨機に、迅速に、柔軟に」行っている。原資は市民・企業・財団等からの寄付とし、日本NPOセンターが資金管理、市民社会創造ファンドが助成業務を担当している。

基金の成果としては、

- ①「臨機」～10月までを現地NPOによる救援活動への支援(第1期)、11月からは現地NPOによる生活再建支援活動への支援(第2期)とし、助成の仕組みや内容を直見した。
- ②「迅速」～震災7日後に現地のNPOを支援する仕組みとして基金を立ち上げたことにより、現地を応援したい市民・NPO・企業の思いの受け皿となり、その思いを現地につないだ。
- ③「柔軟」～現地のNPOとの対話を通じて、各NPOの状況(意志、活動内容、運営状況、外部環境など)に応じて、人件費、管理運営費、修繕費、事業経費など必要な資金を支援。

現地のNPOへの支援を対象としたことにより、被災により活動が停止または停滞していた現地NPOや震災後に立ち上がった現地NPO、いち早く救援活動に取り組んでいた現地NPO、これら現地NPOの後方支援に取り組む中間支援組織やネットワーク組織の組織基盤や活動基盤を支援できた。

さらに、助成を受けたことにより、現地NPOによる新たな人や団体を巻き込む仕組みがつけられた。また、助成先のインタビューを実施し、日本NPOセンターのWEBサイトで公開するなど、寄付者に対して現地の生の声を伝えることができた。



## 3 分科会担当者コメント

市民ファンドは、市民活動に助成をおこなう財団、行政、企業に比べ、その数が少なく、資金量も微かだが、市民自らが、大切に思う価値を守り、市民活動や市民運動を育み、新しい公共を創造する社会的な仕組みとして、今後ますます重要になると考えられる。

また、東日本大震災が発生し、被災地の支援活動の支援のため、各地で市民ファンドが立ちあがってきており、市民ファンドの仕組みや役割に期待が高まっていることが参加者間で共有できた。

## 分科会 45

## NPO法人会計基準～ボランティアの価値を換算すると？



日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 30人

会場 共和フォーラム 1階 AB

## 出演者

◆講師  
内藤 純さん(公認会計士/税理士)

◆ゲスト  
富永 一夫さん(NPO法人NPOフュージョン長池 理事長)



## 1 概要

NPO法人の活動は、ボランティアや物品寄付などの無償サービスに支えられる部分が多いといえる。従来は、これらを金銭に換算して、財務諸表で公表することができなかった。そのため、「真の活動規模」が過小評価されたり、ボランティアが事業を担うケースでは事業費が少なく管理費が突出してしまう、つまり事業を行っていないと見られてしまう等の弊害があった。

2010年7月に公表された『NPO法人会計基準』により、こうした無償サービスを金銭換算して計上できるようになった。では、どのようにその価値を換算すればよいのか？

会計基準の中でも特にこの点に的を絞って、考え方や事例を紹介しつつ、参加者と共に考えた。

## 2 主な内容

## ①「NPO法人会計基準」について

はじめに、『NPO法人会計基準』に沿って、記載例も参考に、「施設の提供等の物的サービス」や「ボランティアによる役務の提供」を受けた場合の財務諸表への表記について学んだ。

それによると、無償または著しく低い価格で、物的サービスやボランティア役務の提供を受けた場合、合理的に算定できる場合には注記できる。さらに、外部資料等により客観的に把握できる場合には、注記に加えて活動計算書(従来の収支計算書)に計上できる。

また、財務諸表に計上する場合には、重要な会計方針でうたう必要があり、明細及び計算方法を書くことが求められている。活動計算書等、財務諸表には、収益と費用を同じ額で計上することで、正味財産の増減はゼロとなる。

会計基準に付随する『実務担当者のためのガイドライン』には、会計上の基本的な考え方、具体的なケースが記載されている。ただ、会計基準はできたばかりで、内閣府に確認しても実際の事例は現時点では報告されていない。

そこで、NPO法人NPOフュージョン長池の事例を参考に、ボランティア活動や物品寄付の換算とはどういうことかを考えた。

## ②NPOフュージョン長池を例に考える

フュージョン長池は、八王子からの委託で長池公園自然館の管理運営などを行う。年間のべ5,119人のボランティアに支えられており、運営支援を行うスタッフボランティアと、体験活動に貢献するボランティアがいる。ボランティア活動時間数は30,763時間、時給1,000円で金額換算すると3,076万円に上る。

ボランティアの活動時間・内容は業務日誌に記録し、館長がサインして八王子市に提出する。こうした記録のあり方は、ボランティア役務換算の場合も客観性の根拠となるだろう。

物品寄付も数多く寄せられており、業務日誌に記録しリスト化している。スタジオジブリからの原画も寄贈品の一つである。

理事長の富永さんは、こうした「活動の可視化」を意識しており、ボランティア時間の公表などによって、お金以外の価値を世に問いたいと考えている。単にお金に換算されたくないとの思いもあり、また、ボランティアの支えが多いことを理由に市の委託金が減額されないかとの不安も抱いている。

③検討と課題:フュージョン長池の事例を、会計基準に沿って金銭換算する場合

●合理的な算定基準とは？

→地元のスーパーの時給や専門団体の料金表などを参考にできる。

●「活動の原価の算定に必要なボランティア」とは？

→対外的な事業や活動において従事しているボランティアを想定しており、単に組織内部の日常的な管理業務を行うためのボランティアの金銭換算は原則として認められない。

●「必要な受入額」のみ換算とは？

→ボランティア10名を募集したら15名の応募があり全員従事した場合、5名分は算定しない。  
理論上はわかるが活動実態を正しく反映しているか？

●金銭評価できない資産

→「歴史的資料:評価せず」等と財産目録に記載可。  
ex.スタジオジブリ原画。

※ボランティア役務を金銭換算して財務諸表で公表することについてはまだ事例も慣行もないため、今後の事例の中で引き続き検討の必要がある。ガイドラインにもその旨が記載されている。

## ④参加者との意見交換 ～それぞれの立場から

分科会後半は、参加者との意見交換を行った。

NPO法人会計基準策定時の事務局を務めたNPO法人シーズの丁理恵さんからは、NPO法人の信頼性を高めるための会計基準であること、1年4か月のべ3,058名関わった協議の経緯などをお話いただいた。民間策定の会計基準であるが、現在は内閣府に研究会が設置され、手引き策定のためのパブリックコメントを募集。当事者であるNPO法人の活発な意見が求められているとのこと。

また、助成側であるトヨタ財団の大庭竜太さんから

NPO法人の活動実態を把握する材料としてボランティア役務換算への期待や、助成額以上の成果を求めるにはNPO側に安定した基盤が必要とされること、使いやすい会計基準にするためにも関係者が内発的に議論を深め事例を積み重ねる重要性についての示唆をいただいた。

NPO法人側からは、今後ボランティア活動を記録し、来年度会計に反映させたいという意欲的な声があった。

## 3 分科会担当者コメント

ボランティア活動について、これまで事業報告書に記載しているNPO法人は多い。フュージョン長池のように正確な記録を残すのは大変なことだが、会計基準によって金銭換算されるとなれば、活動記録も必須で客観性・合理性が求められる。NPO法人の信頼性を高めるために、まず活動の可視化を進めることが大切。そのうえで、ボランティア活動を財務諸表に反映させる意義は、NPO法人にとっても助成・寄付する側にとっても大きいと考える。

今後、会計基準適用の実例が増えていくことで、さらに議論が活発になり、より使いやすい基準へ発展させられるだろう。本テーマに関しては今後も引き続き意見交換の場を持ち、議論を深めていきたい。



NPO法人会計に精通する公認会計士/税理士の内藤さん



フュージョン長池を例に。内藤さん(左)と富永さん(右)



日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 23人

会場 共和フォーラム 4階 A

### 出演者

#### ◆話題提供

関口 宏聡さん (NPO法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会 プログラム・ディレクター)

#### ◆聞き手

吉田 建治さん (認定NPO法人日本NPOセンター 情報部門主任)



## 1 概要

今年6月、非営利法人に関する税制の大改正が実現した。一定の条件を満たしたNPO法人や社会福祉法人などに寄付をすると、約50%の税額控除が認められているという今回の改正は、「税金を納める代わりに自分が選んだ市民活動に寄付する」という新しい形での社会参画を実現する画期的なものだ。

一方で寄付を受ける側の団体には、活動の公益性と市民への説明責任がより一層求められることになる。NPOが市民に支えられる組織として根付くことができるか。そして私たちは社会に必要なNPOを育てられるのか。この制度改正の意義について学び、自らのあり方について議論した。

## 2 主な内容

NPO法人のうち、一定の要件を満たした法人を国税庁が認定する認定NPO法人制度は、2001年の制度導入から今年で10周年を迎える。これは認定NPO法人に対して寄付をした場合、個人であれば寄付金控除、法人であれば損金算入を認められ、相続人であれば寄付をした相続財産が非課税となることで、認定NPO法人が寄付を集めやすくすることを狙っている。また、認定NPO法人はみなし寄付金制度を利用することができる。しかし、認定要件の厳しさや手続きの煩雑さ、それに対してメリットが少ないことなどから、2011年10月16日現在、認定NPO法人は、235法人しかなく、全NPO法人約4万3千団体の約0.5%にすぎない。また、東京都に5割(121法人)が集中しており、認定NPO法人が1つもない「空白県」があるなど、偏りもみられる。一方でNPOが行う社会サービスへの期待は年々高まっており、全国のNPOが組織基盤を強くするための支援税制拡充を求めて制度提案してきた。それを受けて平成23年6月に成立した改正NPO法と新しいNPO支援税制について、運動の中心を担ったシーズ・市民活動を支える制度をつくる会の関口宏聡さんより解説いただいた。

改正の主な内容は以下の通り。

#### (1) 寄付者のメリットの拡充

- ・個人の寄付金控除について、所得控除方式に加えて税額控除方式が導入された。
- ・税額控除と所得控除の有利な方を選ぶ。
- ・所得税からの控除に加えて、地方自治体が条例で定めれば、地方税からも控除できる。
- ・税制優遇が拡大されたことで、自分の応援したいNPOに今までよりたくさん寄付ができる。

#### (2) 認定要件の緩和など

- ・認定資格の1つであるパブリックサポートテスト(PST)に「3,000円以上の寄付をしてくれる人が100人以上であること」という基準が追加された。
- ・平成24年4月からは、「仮認定制度」も導入される。
- ・認定機関が国税庁から都道府県並びに政令市に移管される。
- ・NPO法人だけでなく、PSTなどの一定の基準を満たせば、公益社団・財団法人や社会福祉法人等でも、寄付者の税額控除が認められるようになる。

制度の改正点の解説のあと、関口さんは、新しい寄付税制の活用について、NPOに提言をされた。1つ目は税制優遇を活用した“志”金循環を創ろうということ。税制優遇資格のあるNPOが増えることで、寄付者の選択肢が増えることになる。寄付者の意思が活かされることで、より寄付者や頻度が増えるようになることが期待される。2つ目は認定取得に向けて、団体内の意思決定や準備を早めに行うこと。要件が緩和されたとはいえ、事務手続きや必要な書類の整理に時間がかかるため、早めの準備を行うことが望ましい。

最後に、関口さんから「NPOが寄付金の使途を明確にして寄付を積極的に募集したり、自らも寄付をすることで、新しい社会システムの構築を目指そう」という呼びかけがあった。画期的な寄付税制改正によって、新たな社会が生まれる、そんな期待感をもって、分科会は終了した。



改正NPO法などについて解説する関口さん



聞き手 吉田さん

## 3 分科会担当者コメント

分科会でも出ていた通り、2011年の税制改正は社会を変える可能性ある画期的なものである。税額控除は市民活動の公益性を大幅に認めるものであり、また税金の使途を一定の範囲で選択する仕組みであるとも言える。都道府県や市区町村の権限も強化されており、地域主権の時代にふさわしい制度改正となっている。こうした改正がNPOからの提言で実現したことが意義深い。税制優遇資格のあるNPOが増えるということは、一方でNPOに対して寄付市場における競争をもたらす。これによってNPOがより積極的に寄付募集を行うようになるだろう。魅力的で多彩な活動がたくさん生まれ、市民が応援したいNPOを自ら選べるようになれば、地域はもっと豊かになると期待している。



日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 90人 会場 青山学院大学 2号館 235

出演者 ◆コーディネーター

松原 明さん (NPO法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会 副代表理事)

◆事例報告者

上田 昌子さん (NPO法人陽だまり 事務局)

渋谷 達雄さん (損保ジャパン記念財団 事務局長)

山口 富士夫さん (NPO法人日本青パイ隊 事務局長)

青木 透さん (日本財団 海洋グループ海洋安全・教育チーム)

中條 桂さん (NPO法人トゥギャザー 理事長)

中井 敏郎さん (郵便事業株式会社経営企画部 環境・社会貢献室長)

上記の他、助成財団センター、キリン福祉財団、笹川平和財団、損保ジャパン環境財団、電通育英会、トヨタ財団、日立環境財団、三菱財団、読売光と愛の事業団等、NPO支援財団研究会メンバー財団関係者総勢25名

## 1 概要

助成財団の助成金活用の実例報告を通して、助成をめぐる財団の最近の動向、助成を決定した審査の考え方・ポイント等を整理し、助成金を有効活用したNPOの財政基盤の強化策や事業基盤の拡大策について考える。また、後半では、助成事業がその目的を達成するために、助成財団からの資金面(助成金)以外の支援(プラスαの側面支援)による多面的なつながりやネットワーク構築等について、当日参加しているNPO支援に熱心な十数の助成財団と、会場参加者同士が意見交換する。

## 2 分科会担当者コメント

NPOと助成団体の関係・助成金の性格等について理解を深めると同時に、助成事業の成果をより高めるために、単に助成金という資金的な支援にとどまらず、助成団体の持てるあらゆるリソースを活用していくことの大切さ、それが出来るようになる双方の関係強化について事例を参考に意見交換することを試みた。事例報告団体や助成団体もその趣旨をよく理解し、事前の準備も良くされており、限られた時間の中で的確な事例報告が行われた。会場との意見交換も質問票を準備しある程度集約した形での意見交換となり、時間的に物足りない面があったものの初期の目的を何とか達成できたのではないかと判断している。



## 3 主な内容

### ○基調講演

企画団体であるNPO支援財団研究会の田中皓代表(助成財団センター専務理事)の開会挨拶、主旨説明に続き、シーズ・市民活動を支える制度をつくる会 松原明副代表より、以下内容で25分の基調講演を行った。

- ① NPOの資金の性格を知ることの重要性
- ② NPOの資金の種類(会費・寄附金・事業収入・助成金・補助金等)とその特徴について
- ③ 民間の助成金の性格と特徴
- ④ NPOは助成金を経営上どう位置づけるべきか
- ⑤ 助成金申請にあたって心がけたいこと
- ⑥ 助成を受けた事業等が最大限の成果を上げるために(助成財団の有する諸々の資源の積極的活用)

### ○助成金・助成財団の活用事例報告

助成する側、助成を受けた側双方がパートナーとして成り立ち、WINWINの関係になった3つの事例報告がされた。

#### ① NPO法人陽だまり 上田昌子さん(助成:損保ジャパン記念財団 渋谷達雄さん)

NPO設立資金助成を受けて法人を設立。その後、基盤強化助成を受け、オリジナルの黒豆ソフトクリームの開発・販売を実現、さらに休耕田を有効利用するための農業機械・備品等の購入資金の助成を受け、原料の黒豆等を栽培するなど、活動の幅を広げている。財団の側面支援としては、贈呈式でのネットワーク構築や、マスコミ取材の実現による信用度・知名度の向上などが効果的だった。

#### ② NPO法人青パイ隊 山口富士夫さん(助成:日本財団 青木透さん)

あまりイメージのよくない(海の無法者扱い)水上バイクのイメージアップも狙い、もともと伊万里湾地域で災害の救助活動・保全活動をしていたが、助成事業を実施していく中、財団の支援でネットワークができ、青パイ隊の活動が関東・中国・九州・四国・近畿・北海道・沖縄と、全国に広がる活動になった。財団のネットワーク化への支援により事業が飛躍的に拡大した。

#### ③ NPO法人トゥギャザー 中條桂さん(助成:郵便事業株式会社 中井敏郎さん)

年賀寄附金の配分事業の中に「優先配分事項」として「郵便協働」ということがある。資金面の支援に加え、郵便事業のいろいろなリソースを活用できるというもので、施設でつくられた製品をギフト商品に仕立て、そのチラシを、近畿一円の3000の郵便局に置いてもらったり、郵便局のお歳暮のカタログにコマ載せてもらったりすることで、話題性があり、新聞にも取り上げられ、製品をつくった障害者施設の人たちの自信につながった。助成した郵便事業のネットワークや機能を活用した支援により話題性が高まることとなった。

### ○助成財団紹介&意見交換会

分科会に参加した全ての助成財団の紹介の後、会場参加者から出された以下の質問に対し、登壇者を含む財団・NPOが答えた。顔の見える関係での貴重な意見交換の場となった。

- ① 助成財団からパートナー(NPO)に対し求めること。(→財団に)
- ② 申請書の書き方について。(→財団に)
- ③ 助成してこれは失敗だったということはあるのか。(→財団に)
- ④ 助成金の自己負担の確保での工夫、事業規模のコントロールについて。(→NPOに)
- ⑤ 同じ団体への競合企業からの助成はどう感じるか。(→財団に)
- ⑥ 震災に関連して多くの財団が支援しているかと思うが、今後の復興に対し、NPOの事業に期待すること。(→財団に) 等々

### ○まとめ

助成を受けたNPOと、助成財団は、同じ目的の達成に向けて相互に力を合わせて取り組むパートナーの関係にある。助成事業の成果をより高めるため、助成財団からの資金面+αの側面支援をしてもらうためにも、NPOは助成事業等の進捗状況をきちんと報告しながら、日頃から必要な支援について財団と情報交換していける関係を構築していくことが重要。

## 分科会 48 遊びにきてね。おもちゃ図書館 <<第一日目>>



**日時** 11月12日(土) 16:00～17:30 **参加者** 42人

**会場** 国際ファッションセンター 11階 111

### 出演者

木谷 宜弘さん (全国ボランティア活動振興センター 初代所長/ボランティア研究所 主宰)  
小泉 康代さん (おもちゃの図書館全国連絡会 世話人代表)

### ◆進行

峯島 紀子さん (おもちゃの図書館全国連絡会 副代表)



## 1 概要

おもちゃの図書館の活動がもうすぐ30年を迎える。おもちゃ図書館のスタート時を振り返るとともにボランティア活動の原点を振り返り、おもちゃ図書館のミッションと未来について考えた。

## 2 主な内容

### ①おもちゃ図書館の成り立ち

日本では、ハンディーキャップのある子どもたちと健常者の交流がほとんどない。障害のある子と一緒に遊ぶことができる交流の場がおもちゃの図書館である。

スウェーデンの医療機関内にトイライブラリーがあり、この活動に目をつけた小林つる子さんは昭和54年に日本で初めて「子どもたちが遊びをつくる図書館」を作った。その後、全国に広がり、国際障害者年の年(昭和58年)におもちゃの図書館全国連絡会が開かれた。住民が参加できるように「おもちゃ」と「図書館」の間に「の」をいれることにより、思いやりと優しさや温かさを感じられるような名称の「おもちゃの図書館」ができた。

### ②ボランティアの原点(木谷さんの談話より)

中学時代(昭和22年)に对人恐怖症になっていた時に、先生のアドバイスにより、子どもたちに本の読み聞かせを行った。それを続けることにより、2ヵ月後には对人恐怖症がなくなっていた。それがボランティアの原点であり、相互実現であった。昭和57年の研修会でボランティアについて、若者は「ボランティアは自己実現だ」と言い、高齢の方は「ボランティアは他者実現だ」と言い議論になった。ボランティアとは、相互実現の世界を旅する人である。

### ③これからのおもちゃ図書館の役割(まとめ)

おもちゃの図書館は子どもたちの遊ぶ場所であり、友達と交流できる心のバリアフリーを作る場所である。遊びは心の栄養素である。遊びを通して、想像力や実現力、社会性を身につけ、異年齢の交流を行うことができる。

今後の役割は、心のバリアフリーを育てることと、異年齢交流を通し、若い世代がボランティアを育てることをおもちゃの図書館に期待している。

みんなの顔を見てほっとできる場、楽しい思いをできる場が、おもちゃの図書館であり続けることが大切である。



木谷宜弘さん

## 3 分科会担当者コメント

100名定員の中、50名弱の参加であったが、会場の広さから考えても今回の参加人数位が、話の内容を落ち着いて聞く事が出来たと思う。会場は、ホテルの客室と隣接しているので迷いやすく、道案内の看板を用意した方が良かったかと思う。

パネルを展示したが、会場内に展示をしたので、分科会に参加されなかった方でパネルを見たかった人が自由に見られなかった。会場外に展示をすればよかったと思う。

おもちゃの図書館全国連絡会 世話人 山本 文子

## 分科会

49

## ボランティア(法律対象外)としての移送サービスを社会福祉協議会を通して考える



日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 42人

会場 国際ファッションセンター 11階 112

## 出演者

岡田 竜一さん(品川区社会福祉協議会 さわやかサービス)  
 重盛 弘行さん(北区社会福祉協議会 地域サービス係)  
 荻野 陽一さん(東京ハンディキャブ連絡会 代表)

## ◆進行

伊藤 正章さん(東京ハンディキャブ連絡会 事務局長)



## 1 概要

都内の品川区と北区の社会福祉協議会(以下、社協)が実施する移送サービスについて、品川区社協の岡田さんには、道路運送法第79条登録での移送サービス(福祉有償運送)と運転協力者に対する認定講習の実施状況、北区社協の重盛さんには、登録外でボランティア活動としての移送サービスの実施状況について事例報告をしてもらった。その後、社協が行う移送サービスへの期待を連絡会代表の荻野さんがコメントした。

また、会場から開始前に集めた質問票をもとに、それぞれの事業に対して質疑応答を行った。

## 2 主な内容

## ○品川区社会福祉協議会の事例

さわやかサービスという会員制の有償在宅福祉サービスの一環として移送サービス(おでかけサービス)を実施している。基本は予約制。年会費3,000円、1時間800円。その他の経費は実費。協力会員というボランティアの方に1時間700円を支払っている。車両は4台を使用。

利用対象は、説明では車いすを必要とする人、介助を必要とする歩行困難者としているが、実際には法律の関係で、要介護、要支援の方を対象として、それ以外の場合は、職員が面接して判断している。車いすのまま乗車していただき、原則として介助者の同伴をお願いしている。送迎範囲は、品川区と隣接区となっている。

法律改正にともない79条登録としたが、運転者に義務付けられる認定講習の受講に対して、運転ボランティアの理解を得られずに、一時、登録が半数になったが、募集PRをして徐々に増えて、現在は、以前より登録が増えている。ただし、実際に活動しているのは半数程度。

法律上の登録の判断は、もともと有償サービスであり、事業が拡大傾向であったため、法律的に保障されるということで行った。認定講習については、当初は連絡会に実施してもらったが、費用の関係から自前で認定を取得し、実施している。自前で行うことで、運転ボランティアの力量も把握できるという利点もある。

運転ボランティアには、事前に教習所で運転技能研修を受けていただき、合格点をもらった方を対象に、その後認定講習を実施している。また70歳以上の方には、更に教習所で研修を実施してもらっている。これは運営協議会で、高齢運転者に対する安全管理について指摘があったため。これらの費用は全て社協で負担している。

## ○北区社会福祉協議会の事例

福祉車両の貸出事業として、平成元年に福祉車両1台の寄贈があったことを契機に実施。基本的に車両貸出しのため、利用者が運転者を手配することになっている。しかし、手配できない方もいるため、ボランティア募集を行い、完全無償型の運転ボランティアの派遣を始めた。その後寄贈などで車両は3台となり、ボランティアも口コミなどで増えて、現在に至っている。

年会費2,000円、時間は関係なく20km未満500円。100km以上の遠距離利用の場合は、満タン返し。利用範囲の制限は無い。原則は貸出事業なので、利用者が運転者の手配をするが、できない場合に運転ボランティアを派遣している。利用者は一月に1日単位で4回まで借り出し可能。運転ボランティアを利用する場合は、一月に2回まで。

事業についてチラシ等を作成してPRはしていない。利用対象者は、公共交通機関が現に利用できない方という条件であり、障害者手帳の有無は関係ない。運転ボランティア派遣の場合は、介助者同伴としている。

車両の維持管理は社協負担で行っているが、一部は区からの補助などでまかなっており、減った場合などは、利用料の値上げも検討しなければならない。車両の損傷などは原則利用者負担で修理してもらうことにしている。運転ボランティアの研修などは、連絡会の講習会に参加したり、内部研修で行っている。

体制的には、当面は現状維持だが、今後の情勢変化によっては登録も検討しなければならない場合もあると思う。

## ○東京ハンディキャブ連絡会の荻野さんより、道路運送法上の登録、非登録の判断基準及び社協の移送サービスについて。

- ・登録の必要性の条件判断を実際には誰がするのかという問題点がある。
- ・北区社協は、なぜ登録しない判断を選んだのか?  
→(北区社協)登録することにより利用者の利便性が損なわれることが考えられたため。
- ・社協の移送サービスの場合は、他の地域の方が利用できないという不便がある。これは法律上では制限がない。社協は地域住民サービスが目的だが、移送サービスとして考えた場合にいいのかという問題点も利用者視点からは考えられる。

## ○参加者より

- ・大分県の状況
- ・神奈川県横浜市の状況

## ○参加者からの質問

- ・駐車違反をした場合の対応
- ・事故が起きた場合の対応
- ・運転ボランティアの募集状況

## 3 分科会担当者コメント

一口に、社会福祉協議会による移送サービスと言っても、様々な形態があり、法律上登録するかしないかの判断も利用者のニーズと利便性、運営内容により判断が難しいということが、改めて理解できた。





日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 35人

会場 国際ファッションセンター 10階 108

### 出演者

高見沢 公彦さん(東京こころねっと 代表)  
渡辺 禮司さん(東京こころねっと 総務担当)

話し  
合う

## 1 概要

各都道府県精神保健福祉ボランティアのネットワーク団体が、毎年か2年に一度、ボランティアネットワークの情報交換と持ち回りで開催場所を決めるための大会を開催している。今回東京で第12回大会を開催するに当たり、この全国ボランティアフェスティバルの開催時期に合わせて開催した。私どもの団体の力量から独自での開催が難しいことから、全国ボランティアフェスティバルの中で開催を目指したものであり、このフェスティバルで精神保健福祉関係のボランティアの取組みを紹介することも目指した。各都道府県の代表の集まりのつもりで開催を目論みたが、参加人数が多く見込めなかったことから、代表者でなくとも、精神保健福祉ボランティアに興味のある方の参加も認め、開催した。

## 2 主な内容

- 精神保健福祉とは、何か
- 東京こころねっとの団体紹介
- 八王子精神保健福祉ボランティアの会
- 【活動での共通の悩み】

- ①ボランティア養成講座の作り方
- ②会員の増やし方
- ③お金の作り方

【次回開催場所について】

平成25年度 栃木県 平成26年度 群馬県

パワーポイントを使って、説明を行う。

- 精神保健福祉ボランティアという存在そのものを知らない人に向けて、オリエンテーションとして説明を行った。
- 地域で活動している八王子精神保健福祉ボランティアの会のような団体が、都内でネットワークを作って、お互い地域で生活支援の必要な精神障害者に向けてサービスを提供している。そのサービスの内容についての情報交換、活動内容、及び共通の課題である運営内容などの情報交換を行っており、そのネットワークが「東京こころねっと」で、その紹介を行う。
- 共通の課題であるボランティア養成講座の作り方、会員の増やし方、お金の作り方など運営の問題について理解するには、私が実際活動している団体で成果を挙げていることから、八王子精神保健福祉ボランティアの会の説明を、引き続きパワーポイントで行う。
- 共通の課題である①ボランティア養成講座の作り方、②会員の増やし方、③お金の作り方について説明を行なった。

担当・記録:渡辺 禮司(東京こころねっと)

### ①ボランティア養成講座の作り方

養成講座の作り方は、一番傾聴が必要。精神保健福祉ボランティアの中心的な活動は、傾聴が基本で、それを元に信頼関係ができ、生活支援の助けになるコミュニケーションなどの力が付いてきて、日常生活の自立へつながっていく。

この傾聴を講座の目玉として入れてプログラム作りをする。どこの地域でも高齢者の傾聴講座が主流で、開催の案内をするとすぐに予定をオーバーする位の人気講座なので、それを講座に入れることで、高齢者傾聴の流れを精神保健福祉へ引き込みたいとの考えもあり、プログラム化する。

プログラムの並べ方は、この傾聴講座を受講後、実習に入って実践的に使ってもらい、その手ごたえの一部も経験してもらいたいと考えている。また、講座は実習を入れて全6回を予定している。

1回目はオリエンテーションで、自己紹介。受講の動機、お互い知り合うことで仲間作りの一つとして考え、講座の終わりのころには仲間作りの効果が出てきている。

2回目は精神科医から病気の理解、市役所から精神障害者へのサービス内容、3回目は生活活動支援センターから精神障害者への接し方、精神障害者の生活のしづらさを当事者から語ってもらう。この精神障害者の方は、八王子で毎週土曜日に開催している、ティーサロン(たまり場活動、居場所作り)に来られている方に依頼している。またここに来られていて音楽をやっているが、所属団体なるものに関係していない方が発表する機会を作るため、保健所主催の心の健康フェスティバルのようなイベントでグループでエントリーする手伝いなどで、地域社会自立活動につながると考えて行ってもいい。

4回目が傾聴講座で、5回目が2週間の間に最低1ヶ所の実習を行うよう計画している。6回目はその実習報告と、精神保健福祉ボランティアを経験された方(この会の会員)から話をしてもらう。その後、入会の勧め、修了書の授与となり、毎年50名の参加者のうち17名の入会で、この後毎月フォローアップ講座を計画し、入会された方が定着されるようにプログラム化を図って行く。

### ②会員の増やし方

養成講座で増やすことだけでなく、普段の活動でもチラシを常備し、声かけを行う。また、いろいろな講座が市役所、保健所などで開かれるときは、その主催団体の了解を得て修了間近の5分を貰い、会の広報をして入会の受付を行う。またその場での入会が難しいこともあるため、チラシに私の携帯番号を書いておき、電話を貰って入会される方もある。多いときで1年間に7名の方の入会があった。

### ③お金の作り方

助成金情報をボランティアセンターなど、インターネットで検索して探してから申請する。

また、地域で市役所、会社関係などの助成金募集に参加する。また、養成講座を企画、運営報告書作りまでを行い、活動資金の一部を稼ぐやり方、また、地域の活動で講師になって講師謝礼を貰ったときには、講師料の2割を会に入れてもらうなど、されたらと思う。

## 3 分科会担当者コメント

所要時間が1時間半の中で、講義形式をとりながら、実践活動していて苦労されている団体などの苦労などを提言してもらうことで、運営の難しさ、大変さを理解していただき、どうしたらその解決のヒントになるかについて話を進める予定だったが、途中話を聴いている中で、一部の人の話でなく、参加している人の話を伺うことになり、時間の足りなさ、当初予定していなかったことからの時間配分などで、大幅に予定が延び、交流会の開催時間にずれ込んでしまった。



プレゼンテーションを行う渡辺さん

## 分科会 51 大震災！ その時、仙台の外国人は？



**日時** 11月12日(土) 16:00～17:30 **参加者** 30人

**会場** 共和フォーラム 4階 B C

### 出演者

須藤 伸子さん(財団法人仙台国際交流協会)

話し  
合う

## 1 概要

2011年3月11日に発生した東日本大震災について、宮城県仙台市も多くの市民が災害に遭遇した。とりわけ、言葉や習慣の違いから災害情報を入りにくく、支援を得られない外国人への震災(災害)関連情報の提供を中心とした支援活動について、仙台国際交流協会がその中心となって行った。

講演は、仙台市在住外国人への災害情報の提供内容、その後の外国人被災者からのアンケートの実施報告および質疑と意見交換を行った。

## 2 主な内容

### ①大震災の発生・支援活動

3月11日の東日本大震災は、大地震と余震、沿岸部を襲った巨大津波(死者のほとんどを占める)により、仙台市でも住宅が崩壊、ライフライン、交通機関(網)が遮断し、死者(含、行方不明)700人以上、建物の全壊・半壊など156,000棟以上(2011年9月2日現在)の被害を受けた。私も地震後3日間は東北の実家と連絡が取れない状態であった。

仙台市在住外国人は約1万人、市人口の1%弱で中国、韓国籍が7割とアジア出身者で留学生など学校関係者が多く流動性がある。仙台市では地震、水害などの大規模災害時には、言葉や習慣の違いから情報を入りにくく、支援を得られない外国人支援のため、市の災害多言語支援センターを仙台国際交流協会が市民ボランティアや関係機関と協力しながら運営することになっていた。

仙台市や関係機関からの災害情報を翻訳し、多言語による情報提供(内容は、被災情報、支援情報、ライフライン、交通、原発関連、医療等)をブログ、メルマガ、ラジオ、HP等、考えられるものは全て実施し、TEL、来館、Eメール等による多言語相談や避難所巡回を行なった。巡回では、英語、中国語、韓国語のスタッフが数名でチームをつくり、タクシーや自転車で外国人避難者がいる場所を回った。メディアや大使館対応などについても行ったが、日本人からの問い合わせも多くあった。

東日本大震災後、4月30日まで活動し、当初の1週間は24時間体制で英語、中国語、韓国語、やさしい日本語等で情報提供を行なったが、「やさしい日本語」での情報提供は、スタッフ間で一定のルールと共通理解がないと難しさがあることが分かった。

### ②外国人被災者アンケートから(例)

これらの活動の後、外国人被災者からのアンケート調査を実施(2011年5月～10月)した。被災時、頼れる人の存在の人がいたと答えた人は236人、その内訳(複数回答可)は、知人・友人174人、先生51人、近所の人46人、家族・親族45人、その他21人だった。(いなかった人は30人)

また、自由な意見の記入については、○地震、津波が怖かった、○生きていることに感謝、○非常用の連絡システムが必要、○日本社会と日本人に感心、○原発事故が心配。等の感想が寄せられ、また地震の後帰国した人は191人で、理由は、○母国で心配、○原発事故が心配、○母国政府の勧め等だった。とくに、日本政府の情報とネットによる母国情報との違いが大きき不安要因となっていた。

### ③質問、意見交換についてのコメント・まとめ

原発事故の問い合わせは今でも多いが、日々の生活のなかに隠れてきているようだ。日本人と結婚した人でも帰国した人、帰国を勧められた人、失職や離婚をした人等、深刻な問題が多くある。支援活動をする際はキーパーソンが必要だ。震災が起きてから見つけるのは難しく、日頃から通訳ボランティアやIT力のある人、人的ネットワークのある人が必要となる。東京では日本語教室はあまり頼りにされなかったとの話もあるが、外国人とのコミュニケーション力には心強いものがある。日常的な個人的繋がりが大切だ。情報が遮断された時の不安感の特徴としては、パニック状況の現出が多くあった。

## 3 分科会担当者コメント

講演は、実際の体験者からの生々しい被災状況のなかでの支援活動として報告され、資料とパワーポイントを使用してわかりやすく行われた。

在住外国人との共生をめざした日頃からの活動の積み重ねの大切さを再認識した。

担当:東京日本語ボランティアネットワーク 記録:岩佐 幹彦(東京日本語ボランティアネットワーク)



停電の中で支援活動



原発が心配(避難所にて)

## 分科会 52

遊びにきてね。おもちゃ図書館  
～被災地の子どもたちへ届けよう、楽しい遊びを！～ 《第二日目》

**日時** 11月12日(土) 9:30～12:30 **参加者** 58人

**会場** 青山学院大学 2号館 220

**出演者** 【第1部】

◆コーディネーター

鈴木 訪子さん (おもちゃの図書館全国連絡会 世話人/荒川区社会福祉協議会 地域担当課長)

◆パネリスト

戸田 上子さん (宮城県・おもちゃの図書館あそぼ 代表)

今井 昌子さん (長野県・塩尻おもちゃ図書館 代表)

浅野 芳明さん (おもちゃの図書館全国連絡会 事務局長/荒川ボランティアセンター)

【第2部】

松村 治美さん (よこはま布えほんぐるーぷ)

話し  
合う

## 1 概要

【第1部】

東日本大震災について、おもちゃの図書館全国連絡会として支援プロジェクトをつくり、被災したおもちゃ図書館への支援や子どもたちへの遊びの支援活動の報告、および支援活動を振り返り、被災した障がいのある子どもたちの状況や支援の在り方について共有した。

【第2部・ワークショップ】

被災された、石巻市と南三陸町のおもちゃ図書館へ寄贈する手作りクリスマスツリーを参加者一人ひとりが作った。



第一部の出演者の方々

## 2 主な内容

【第1部】

①戸田さん(東松島市在住)から、当時の様子を報告。

特に、ご自身と障がいを持つ息子さんと避難所での生活について、ケアが必要な子どもたちが置かれた環境など母親としての思い。また、仕事(養護教員)からも見えた、被災後の子どもたちの様子も報告された。(プロジェクターで、被災地の画像を提示しながら)

②浅野さん

おもちゃの図書館全国連絡会としての支援活動を報告。被災地で変化するニーズに合わせて、息の長い活動を今後も継続する方針を報告。

③今井さん

おもちゃ図書館の仲間として、いちボランティアとして、いち早く行動された思いと活動内容を報告。

④鈴木さん

まとめとして、おもちゃ図書館が持つネットワークと障がいのある子どもたちへの支援について、地域での役割を、活動を通して確認した。

【第2部】

参加者全員に、手作りクリスマスツリーを飾るリースを「よこはま布えほんぐるーぷ」の指導のもと作成した。最後に、第一部で報告した戸田さんへ寄贈し、南三陸町へは11月に直接現地へ届ける予定。



被災地に贈るリースやブーツの飾りを皆で作成

## 3 分科会担当者コメント

おもちゃ図書館は、全国に460館以上あり、すべてボランティアをベースにした活動を展開中。もちろん、東北地区にあるおもちゃ図書館そして、運営するメンバーや家族への支援活動から、連絡会が持つネットワークの力とすばらしさがわかった。また、被災された障がいがある子どもたちとその家族が、どのように避難所での環境で生活されていたのかがわかった。非常時こそ、周りの理解とケアが重要であるが、参加者の感想も同様のものではあった。

後半は、おもちゃ図書館らしく、クリスマスツリーへ飾る小さなブーツをつくった。参加者全員の思いが、被災地へ届くように気持ちを込めていた。被災地の早い復興を祈ります。



完成したクリスマスツリー

## 分科会 53

災害の際の在宅支援活動  
～食事サービス活動を通じて

菅原さんによる事例報告

日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 41人

会場 青山学院大学 1号館 123

## 出演者

## ◆事例報告者

菅原 敦子さん (けやきグループ代表・仙台市)

安岡 厚子さん (NPO法人サポートハウス年輪 理事長・西東京市)

## ◆コーディネーター

安藤 雄太さん (東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー)



## 1 概要

東日本大震災は、東北地方、関東の広い範囲に被害をもたらした。食に関する在宅支援活動を行っている団体は、そのときどう活動をしたか、また在宅のニーズはどうだったか。

被災地仙台と、東京の活動団体の事例を聞き、災害と在宅福祉について考えた。

## 2 主な内容

## ○事例報告

【仙台(報告者:菅原敦子さん)】

けやきグループは仙台市で週4回の配食サービスを行っている。仙台市で高齢者に配食サービスを行っているネットワーク組織「食事サービスネットワークみやぎ」(食ネット)の7団体では、利用者・会員に死亡者・行方不明者はなかったが、けがや体調悪化で入院、仮設住宅や子どもの家への転居、施設入所の方がいる。自宅の全壊・半壊は市内全域に及んでいた。

3月11日、けやきグループでは配食のお弁当の盛り付け中。こういう時こそ思い配達に向かったが道路が陥没してひびが入り、電線が垂れ下がり、水道管が破裂して水が噴出、信号が止まって車は渋滞、暗くなり雪が降る状態でやっとのことで配達を終えた。「こんなときによく」「今夜は夕飯が食べられないと思っていた」と感謝された。

食ネットの団体は、食材やガソリンが調達できライフラインが復旧する4月半ばまでは、燃料は炭火や卓上コンロ・プロパンガスで、水道が停まった地域では水くみをし、弁当は、おにぎりと簡素なおかずに変更してそれぞれの工夫で乗り切った。

この震災での苦労は、①電話が通じず外部との連絡が絶たれたこと。利用者の安否確認ができず情報が入らなかった。②ライフライン、特にガスが長期に使用できず調理ができなかった。③ガソリンが手に入らず、水や灯油や食材の調達に行けない。心細かった。

それを踏まえて今後取り組むべき点として、

- 1 災害対策マニュアルの作成と徹底。(自分自身の安全、避難経路の確保、火の確認、どのように動くか)
- 2 設備面の地震対策(重い設備の固定、食器戸棚に留め金、パソコンの固定とデータバックアップ)
- 3 ラジオ・コンロ・懐中電灯、せめて3日分の水と食材の備蓄
- 4 電気に頼らない調理器具の準備
- 5 利用者の連絡先を複数把握(本人と連絡がとれなくても安否の確認ができるよう)
- 6 地域・ネットワークとの連携。町内会・地区社協・民生委員・地域の包括支援センターなどとの常日頃からの付き合い

担当・記録:平野 寛治(老人給食協会ふきのとう)

食ネットの仲間「あかねグループ」は、弁当がこれからの生活を考える話し合いのきっかけになればとの思いで、仮設住宅での会食への「支援弁当」の差し入れを行っている。

震災当日利用者が待っているということで会員の危険も顧みず、とにかく配食して感謝されたが、果たしてあの状況で配達すべきであったのか悩んだ。仙台の街は何事もなかったかのようにきれいになったがいまだ行方不明の人、家族を亡くして立ち上がれない人、仮設住宅で不自由な生活をしている人、仕事を失い生活の目処が立たない人がある。まだまだ復興には程遠いが一日も早く元の生活に戻れることを祈っている。

【西東京(報告者:安岡厚子さん)】

1994年より、24時間在宅ケアサービスを提供する団体として設立。介護と食事があれば一日でも長く家で暮らせると考え、当初から食事サービスを行っている。

3月11日の地震発生時は夕食弁当の配達準備中だった。デイサービスとグループホームの利用者とスタッフの無事を確認し、夕食弁当は通常通り配達。デイサービス利用者(エレベーターが動かない高層マンションに住む方など)4名が泊まることになった。青梅街道沿いの立地から、徒歩で帰宅者へ水と軽食の配布、トイレを貸すなども。

12日以降は、計画停電対策(懐中電灯の調達に苦労)、義援金バザー、避難者への物資支援を行う。送り先が明確になっている義援金窓口や、救援物資の窓口が必要だ。

震災直後から食事提供を休まず行った仙台の活動団体の様子には強く胸を打たれた。首都圏で震災が発生したらどこまでできるのか。求められるのは「寝る」「食う」「出す」生活支援のサポート。雨露をしのぎ、温かい食事と気兼ねのないトイレの確保された状況をつくるための地域のネットワーク構築が急務だ。

## 3 分科会担当者コメント

3月12日、在宅の高齢者への食事支援という同じ活動をしている東北の仲間の安否が心配で、「こんな時に電話をしていいのか」と迷った挙げ句にかけた電話が繋がった。電気もガスも来ていないが配食サービスは休まないと言う。テレビでは大きな被害が報じられていた。こうした状況で、NPOはどうすればいいのか、どこまでやるのか、リーダーはどう決断したのかをいつか落ち着いたときに聞いてみたいと考えた。

大きな地震の後、電気・ガス・水道、通信が途絶えた非常事態に、いつも通り届けられた配食弁当がどれほどのものだったかを思うと胸が熱くなる。災害時に支援が必要な人を孤立させないためには、常日頃からの地域との関係が本人・団体に必要だということがわかった。また、支援する側も個人では様々な形で被災し、市内の情報も入りにくい。被害のない地域の団体が情報収集をして発信することとても重要だと確認できた。



安岡さんによる事例報告



事例報告を聞き、グループワークをする参加者の方々

## 分科会 54

市民活動としての移送サービス  
道路運送法と今後の活動展開

日時 11月13日(日) 9:30～12:30

参加者 17人

会場 青山学院大学 2号館 222

## 出演者

阿部 司さん (NPO法人国分寺ハンディキャブ運営委員会 理事長)  
 勝亦 武司さん (福祉移動サービスネットワーク静岡 代表)  
 荻野 陽一さん (東京ハンディキャブ連絡会 代表)

## ◆進行

伊藤 正章さん (東京ハンディキャブ連絡会 事務局長)



## 1 概要

市民活動として始まった移送サービスが、いわゆる「白タク」行為として道路運送法に抵触するとされてきた時期の活動上の苦労話から、法改正に向けた活動展開についてその一部始終に関わってこられた阿部さんに報告してもらおうとともに、現在の地方での状況について静岡でネットワーク活動を進めている勝亦さんより事例報告をいただき、今後の市民活動としての移送サービスのあり方を考えた。

## 2 主な内容

## ○アイスブレイクタイム

参加者に、分科会への参加動機と期待する内容、聞いてみたいこと、また「移送サービスに対するイメージを色に例えると」という質問をし、各自ふせんに書いてもらった。黄色とグレーが多かったのが印象的だった。

## ○阿部さんからの事例報告

国分寺ハンディキャブ運営委員会ができた当時、障害者の送迎を行い、経費としてガソリン代程度であっても、受け取ることは、道路運送法第101条(現:第78条)に抵触して白タク行為となると指摘されていた。そのため「運賃」という言葉は使用せずに「運行協力費」などと言い換えていた。寄贈でもらった車両を登録する際にも、団体名義にするために、会則を陸運局(現:運輸局)に提示すると、「利用料を収受する」という言葉はダメだと言われるなど、なかなか登録できないこともあった。

そのため、90年代半ばから法改正の交渉を国と行ったが、厚生省と運輸省が同席して、移送サービスに関する課題を話し合ったのは、われわれが国会議員に仲介を依頼して円卓会議として話し合いを行ったのが、初めてだった。その後、紆余曲折を経て現在の自家用有償旅客運送登録の仕組みが出来上がったわけだが、もっと使いやすくする必要がある。

また、通院等の命にかかわる部分については行政が足を確保すべきであり、なんでもボランティアでというわけにはいかないと思う。ある種の役割分担が必要と考える。

## ○勝亦さんからの報告

福祉移動サービスネットワーク静岡は、以前は静岡県内で認定講習を実施する唯一の団体で、運輸支局も当会を紹介してくれていたが、現在は他にも実施する団体が増えてきて、紹介してくれなくなった。実績があるため受講者は毎回多い。ネットワークとして安全安心な移送サービスのために情報を収集し、機関紙などを通して会員に講習会や法律の情報提供を行っている。

運行団体の中には、登録・更新手続の負担や、運転協力者に対する謝金が払えないということで活動をやめた団体も多い。移送サービスは基本的に赤字体質である。障害者の方の外出が増えていっている中で、福祉有償運送が必要だと考えているが、ネットワークとして、その為の講習会が続けていけるかという課題もある。

福祉有償運送が一般の方や利用者に理解が広まっておらず、福祉タクシーとされている。ローカルルールによる制約が多く、広報の制限や、運転協力者の条件、車両の過剰な表示義務、利用対象者の制限などいろいろと制約を受けている。タクシー業界からの圧力によるところが多いと感じるが、行政の理解が低く、支援が弱いという問題がある。

市民団体には、有償運送に該当すると思われるところでも登録せずに行っているところや、介護事業所によるぶらさがり許可の実態が不明なことが問題点と考えている。また、運営協議会が設置されない自治体もまだまだある。

## ○会場からの意見

たすけあい活動として自信をもってやりたいが、経費を貰う場合、どこから法律上の登録が必要になるか、またはいらんないかが分からない。行政に聞いても明確に答えが得られない。

## ○荻野さんの報告

法律改正は2006年だが、運用が改正されてからは約7年が経過している。しかしこの改正の中で、利用者に関わって使いやすくしていこうという動きにはなっておらず、いまだに移動困難者が簡単に使える仕組みにはなっていない。

運営協議会という仕組みが、この仕組みのネックになっている。一番は各運営協議会によるローカルルールの問題だと思う。法律や通達に書かれていないことが勝手に決められている。

国交省でも今年初めに、運営協議会に関する検討会を開いたが、NPO側とタクシー側の意見がかみ合わなかった。未だにタクシー側の中には、NPOによる福祉有償運送を気に入らない人もいた。それでも検討会では、一定のまとめを出したので、よく勉強してほしい。

もっと移送サービスをやりたいという人が、元気のでる仕組みであり、公共交通が使えない人が便利に使える仕組みになってほしい。

も登録もいらんないよ。」という声が上がった。無茶で乱暴に聞こえる言葉だが、私には懐かしく聞こえた。制度や仕組みがあるからやるのではなく、問題を抱えたり困っている人がいるから動いてきた、それがボランティア活動の真髄なのであるということに再認識した。もう一度、利用者本位の移送サービスを根本から考えてみたい。

参加者の中にこれからサービスを始めようかと考えている方もおいでになった。スタートの一步の背中を後押しするような場になってくれていれば幸いである。



## 3 分科会担当者コメント

移送サービスが法的根拠をもった登録制度に乗ったことで、ボランティア活動から離れたものになったようにとらえられがちである。しかし、この日の参加者から「ボランティアなんだから許可

## 分科会 55

映画『大丈夫。—小児科医・細谷亮太のコトバ—』  
上映後に伊勢監督との対話

日時 11月13日(日) 10:00～12:30 参加者 63人

会場 青山学院大学 1号館 125号室

## 出演者

伊勢 真一さん (いせフィルム 監督)

## ◆司会

長谷川 純子さん (関東地区病院ボランティアの会)

話し  
合う

## 1 主な内容

## (1)概要

40年来、小児がん治療の最前線で活躍されている小児科医細谷亮太先生の10年間を追い続けたドキュメンタリー映画を上映。

上映後は監督のトークと参加者との対話

## (2)主な内容(当日の流れに沿ってご記入ください)

10:00～11:25 映画『大丈夫。—小児科医・細谷亮太のコトバ—』を上映。

11:30～11:50 伊勢監督の話

10年間継続をして撮り続けた作品であること  
全く話しかけることの出来なかった監督が、続けているうちに  
子どもの方からの声かけや撮ってほしいと訴えがわかるようになってきたこと

11:50～12:30

## ○参加者からの質疑応答

- ・「寄り添う」とはどういうことか
- ・もっとみんなに観賞してほしいが自分たちに出来ることは？
- ・上映をお願いする時の費用

## ○監督から

- ・マスクコミにはのらず、地道に観てもらおう為の努力をしたい。
- ・上映のみではなく、参加した人たちとの語らいも大切にしていきたい。



## 2 分科会担当者コメント

アンケートに提示されたように、企画はとてもよかったと思った。

いせフィルムに寄せられたアンケート、ボラフェスに出されたアンケートでも手応えを感じてくださったと思う。

伊勢監督も映画製作の思いを語られ、参加者の質問に丁寧に回答して下さったこともあり、会場全体が一体となった感じがした。参加者が熱心に聞き入って下さったのが印象的だった。

## 3 伊勢真一監督からのメッセージ

映画『大丈夫。—小児科医・細谷亮太のコトバ—』は、10年間にわたって小児がんの子どもたちを記録したドキュメンタリー『風のかたち—小児がんと仲間たちの10年—』の姉妹編です。

四十年来、小児がん治療の最前線で子どもたちの「いのち」と向き合い続けてきた細谷亮太医師の世界を、細谷嘸々(先生の俳号)の俳句で綴るヒューマンドキュメンタリー。「大丈夫。」は生きることへの励ましのコトバ、祈りのコトバでもあります。



## 分科会 56

## 視覚障害者の読書をサポート～あなたにもできること～



長岡さんによる講演

日時 11月13日(日) 9:30～12:30 参加者 30人

会場 青山学院大学 1号館 120

## 出演者

長岡 英司さん (筑波技術大学 教授/視覚障害者)  
 山岸 秀和さん (シナノケンシ株式会社)  
 藤田 晶子さん (全国音訳ボランティアネットワーク 代表)

体感  
する

## 1 概要

「音訳ボランティアって何?」という初心者の方にも参加していただけるように体験型の内容を企画。

視覚障害者の講演のほか、音訳ボランティアの現状や活動に必要なデジタル機器の説明を行った。また、実際に録音体験をするコーナーや録音図書(雑誌・まんが・専門書・通販カタログなど)の試聴コーナー、マルチメディアDAISYや音訳関連図書のコーナーを設け、活動を分かりやすく紹介した。



録音図書視聴コーナーの様子



録音体験コーナーの様子



山岸さんによる講演

## 2 主な内容

○あいさつ「音訳ボランティアの活動内容の紹介」  
 藤田晶子さん(音訳ボランティアネットワーク 代表)

○講演「手や耳で読んで学ぶ」  
 長岡英司さん(筑波技術大学 教授/視覚障害者)

## ①情報アクセスの変遷

情報アクセスとは「読み書き」のこと。情報は視覚が80%を担っているといわれるが視覚障害者がそれを得るのが難しい。これに劇的な改善をもたらしたのが点字・録音・ITである。点字は1825年プライユが3点2行の点字を考案。録音は1950年代半ばにテープレコーダーが一般に普及し視覚障害者が自分の手で読む可能性をもたらした。オープンリールの時代である。1958年日本点字図書館で日本最初の「声のライブラリー」がつけられた。視覚障害者も一般大学受験できるようになったが点字の参考書など皆無。ラジオ講座を毎夜録音した。

やがてカセットテープができ視覚障害者の録音活用に大きく貢献。そしてアナログからデジタルへ。紙上の活字が社会全体に流通。視覚障害者もパソコン画面を合成音声で読み上げるソフトで文字情報にアクセスできるようになった。

## ②音訳による学習

大学進学が出来ても点字の専門書は皆無。公共図書館で対面朗読を頼み自分で点字にした。専門書(特に理数系)を音訳するときは「正確」に読むことが鉄則である。

## ③ITが変えた読書法

図書の電子化は検索性が飛躍的に向上した。またネットの利用で墨字のデータで読める。活字データを耳で読めるのである。

## ④デジタル時代の学習資料

視覚障害者の専攻が多様化している。音訳者も視覚障害者のニーズに合わせた読みのスキルアップを。電子化による利便性。精度もあがっている。しかし自動音訳の限界も。点字が音訳かという単一選択でなく、単一媒体から多媒体、複合媒体へとようになっていく。

## ⑤これからの音訳活動

音訳者の必要性は不滅。専門的コンテンツ、古文・数式・東洋医学・外国語などへの対応。言葉情報への変換力。画像・動画・色彩・位置関係の表現など視覚情報への対応など、聞き手が正確に状況把握できるよう多媒体へのメディア変換スキルの習得が求められる。全ての基本は聞き手の立場で考えることである。

○講演「読書に必要なデジタル機器について」

山岸秀和さん(シナノケンシ株式会社)

## 3 分科会担当者コメント

参加者は学生を含め、音訳未経験者からボランティア歴10年以上という方で様々でしたが、みなさん、音訳体験コーナーや試聴コーナーも熱心に参加され、にぎやかな会場になりました。「目の不自由な生活の中で、どのように情報を得ているのか理解できてよかった」「今のDAISYの進み具合、将来の展望を知ることができた」「分かり易く勉強になった」などの感想が寄せられました。

私たちの活動を紹介するよい機会になったと思います。

## 分科会 57 TOKYO油田と下町ツアー



**日時** 11月12日(土) 16:00～17:30 **参加者** 20人

**会場** 墨田区八広・向島周辺

**出演者**

染谷 ゆみさん (TOKYO油田プロジェクトリーダー/株式会社ユーズ 代表取締役)  
向島 梅鉢屋 (江戸野菜菓子)

体感  
する**1 概要**

話題のスカイツリーの周辺は、古い下町のまち並みや商店街、伝統工芸などをそのまま残しながら、カフェやアートの空間も生まれ、みどころがたくさんである。このまちで、「2017年、使い終わったすべての天ぷら油をeco資源へ！」を合言葉に、廃油を回収し、エコ燃料「VDF」などにリサイクルする工場の見学をした。後半は、江戸の名残を残す伝統工芸を守り続ける下町の職人さんたちの中から、野菜菓子をつくる「梅鉢屋」さんの見学をした。バスの中では、東京油田の仕組みや回収方法などについてのレクチャーもあった。

**2 主な内容**

## ○東京油田 工場見学とレクチャー

飲食店や食品関係企業から出される約20万トンの廃食油は、回収された後、飼料、石鹼、塗料などに再生されている一方で、一般家庭から出される残り約20万トンの廃食油の多くは、生活排水として河川に流され、環境破壊の要因ともなっている。染谷商店では、世界で初めて、廃食油(植物油)をディーゼル燃料化するという『VDF(ベジタブル・ディーゼル・フューエル)』の開発に成功した。2017年、東京で使われた全ての天ぷら油をeco資源に変えるために「TOKYO油田2017は回収ステーションを広げ、天ぷら油を回収している。今回は、廃食油を燃料化する工場を見学した。

## ○江戸野菜菓子 梅鉢屋工場見学とレクチャー

江戸より伝わる新鮮な野菜や果実を砂糖だけで煮込み、風雅な菓子に仕上げたもの。大根、蓮根、牛蒡、生姜、セロリ、茗荷…季節ごとの食材を、頑固なまでに江戸の製法・文化を守り続けることが、人気を保ち続けるサステナビリティの一番のポイントだ。

## ○スカイツリーを臨む

**3 分科会担当者コメント**

一時間半という短いバスツアーは、会場周辺の下町の街並みをぐるりと回り、バスの中ではしっかり廃油リサイクルと街づくりのレクチャー。楽しみのスカイツリーも堪能するよけりなツアーだった。東京油田の取組みは、参加者の町でも参考になるエコの実践活動。質問もたくさんあった。梅鉢屋さんのお土産もあり、ボラフェスの初日にふさわしい、楽しいひとときを過ごした。伝統のまちで生まれ育ち、文化を守りながら新たなアイデアを加えて、ネットワークでまちづくりをする方々との出会いは、参加者の皆さんに元気を届けた。



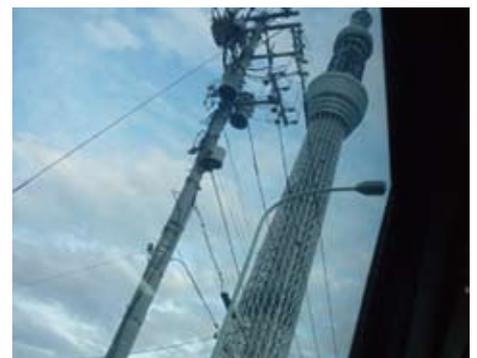
東京油田 工場見学とレクチャー



江戸野菜菓子 梅鉢屋工場見学とレクチャー



江戸野菜菓子 梅鉢屋工場見学とレクチャー



スカイツリーを臨む

## 分科会 58

## 賀川豊彦と関東大震災～日本のボランティア活動の原点について～



貸し切りバスで会場に到着

日時 11月12日(土) 16:00～17:30 参加者 50人

会場 日本基督教団東駒形教会

## 出演者

- ◆ごあいさつ  
服部 榮さん (財団法人本所賀川記念館 理事長)
- ◆ご講演  
戒能 信生さん (日本基督教団東駒形教会 主任牧師)
- ◆司会・進行  
大島 ひろみさん (全国労働金庫協会経営企画部 部長代理)

体感  
する

## 1 概要

賀川豊彦は、愛の精神に基づいて、人格や人権が尊重される公正で平和な社会を実現するために、その全生涯を捧げ、日本の近代化に大きな足跡を残した。

労働運動・農民運動・協同組合運動・普選運動・平和運動・幼児教育・社会福祉活動など、賀川豊彦が関わった社会改良運動は広範な分野におよんでいる。それらはまた、まさしくボランティアの先駆けでもあった。

日本基督教団東駒形教会主任牧師戒能信生さんのご講演では、ボランティアとはなにか・ボランティアの言葉の初出・ボランティアたちの実際・関東大震災救援活動からセツルメント運動へ・関東大震災についての賀川豊彦の言及・賀川豊彦の天譴論批判等をテーマに講演をいただいた。

## 2 主な内容

分科会の会場は、1923年の関東大震災の被災者救援活動の中から生まれた日本基督教団東駒形教会（財団法人本所賀川記念館の3階）。講演の概要を掲載する。

## ① ボランティアとはなにか

広辞苑・日本語大辞典を引用され解説いただいた。明治以降の大震災では、濃尾地震・明治三陸地震等が発生したが、陸軍・海軍・警察が食料や宿泊などを自給できる設備と能力を持って、初動の救援活動を担った。明治の時代、市民が手伝いに行こうとしても、むしろ混乱が起こるし、邪魔で危険だと考えられたようだ。

## ② ボランティアという言葉の初出

被災者救援活動を行う人びとを最初は「篤志奉仕者」「有志義勇隊」と呼んでいたが、「ボランティア」と関東大震災発生後から呼ばれてきた。賀川豊彦が主催していた1924年8月号の雑誌「雲の柱」に「松倉町のバラックより」というコラムがあり、「此夏はまた大勢のボランティアが助けて…」が掲載された。日本でボランティアの言葉が最初に用いられたのではないだろうか。

## ③ ボランティアたちの実際

賀川豊彦は、神戸から東京に木立義道・深田種嗣・薄葉信吾の三氏と木造船で向かうが、その三人の活動と田中源太郎・南京米のママさん・菊地千歳・東間清造各氏の活動をそれぞれ紹介していただいた。

## ④ 救援活動からセツルメント運動へ

震災直後の被災者救援活動は、次第に被災者の自立を支える活動へと転換されていく。当初は、職業相談・健康相談・栄養食指導・保育事業・簡易宿泊所提供など、被災者たちのニーズにそったセツルメント運動が中心になっている。被災者への活動の一部を紹介していただいた。

## ⑤ 関東大震災についての賀川豊彦の言及

賀川豊彦は、関東大震災に関わる執筆した散文詩・エッセイは多々あり、代表的なのは「地球を墳墓として」だが、「苦難に対する態度」という書籍の概要をご紹介いただいた。

## ⑥ 賀川豊彦の天譴論批判

賀川豊彦のほか、沢沢栄一・芥川龍之介・菊池寛・徳田秋声・生田長江・内村鑑三らの「天譴論」にかかわる発言・執筆をご紹介いただいた。

## 3 分科会担当者コメント

賀川豊彦の活動の概要を来場者の方々にお聞きいただき、そのパワーと幅広い活動に驚かれた方々も多くいらっしゃった。賀川豊彦の理念・活動を継承し、現代・現在に活用すべきことも多々あることに気づかされる。なぜ、このように賀川豊彦は、忘れられた存在になったのだろうか？との疑問も参加者の方からいただいた。本会場から送迎バス（東京都営路線バス貸切）で移動する時間が入り、講演時間が短く、見学する時間も殆ど無い状況下で、ご理解いただけたのか、大変不安でいっぱいだ。

参加していただいた皆さま、ごあいさつ、ご講演、司会進行していただいた方々に、準備・運営していただいた事務局の皆さま、無事終了できたことに感謝する。

担当・記録：市川 智弘(日本生活協同組合連合会)



服部さんによる挨拶



戒能さんによる講演



教会内にてお話を伺う

## 分科会 59

## 江戸文化と鬼平～長谷川平蔵の活躍の舞台をバスでタイムスリップ～



両国国技館前からバスに乗って出発

日時 11月12日(土) 16:00～17:45 参加者 29人

会場 深川江戸資料館、中央区佃周辺

## 出演者

佐々木 明さん (ジャーナリスト/独協医科大学 講師)

体感  
する

## 1 概要

江戸後期に、凶悪犯を専門に召し捕り、世界で最初に刑務所の前身とされる人足寄場の開設に貢献。小説「鬼平犯科帳」の主人公、長谷川平蔵を通して江戸の文化を現地学習。江戸の情景や住宅を忠実に再現した深川江戸資料館、江戸湾の入口、石川島の人足寄場を通して平蔵が軽犯罪者に示したボランティア精神を、250年前の江戸から「東京」らしさを学ぶ。

## 2 主な内容

長谷川平蔵が活躍した江戸時代の町並みを、実物大で再現、展示している深川江戸資料館や、現在の刑務所の前身である、人足寄場の跡地をバスで移動し見学する。

深川資料館では、米屋や八百屋が並ぶ表通りや、長屋での生活風景、火事の時に燃え移るのを防ぐために設置された火除け地などがあり、江戸時代の生活が見える展示であった。資料館には専属の学芸員がおり、参加者の中には、講師や学芸員に熱心に聞き入る様子も伺えた。人足寄場跡地では、現在、跡地の石碑のみ設置されており、開発により当時の面影は全く見えない場所であったが、見学コース途中には、江戸時代から変わらない平成の場もあり、江戸と平成が同居している場などを、講師に説明を受けながら『下町』を見学した。

バスでの移動中には、長谷川平蔵の生涯、時代背景などの講義を受け、長谷川平蔵が残した功績を学んだ。軽犯罪者の更生には「手に職を持たせたほうが良い」という考えから、職業訓練機能を備えた人足寄場を創設し、世界で最初の刑務所の原型となった。

また、創設にあたり、建設費などの費用は国からの補助もあったが、その多くを長谷川平蔵が負担し、軽犯罪者の更生へのただならぬ思いがうかがえ、その気持ちは現在で言うボランティア精神だったと考える。

## 3 分科会担当者コメント

参加者の方々が、様々な場所を巡りながら講師の説明をととても真剣に聞いていたのが印象的だった。楽しみながら、江戸文化や鬼平に関する知識を深めていくことができたのではないと思う。

参加者の出身地が全国に渡っていたことから、江戸文化や鬼平に関心のある方が全国各地にいたことがわかった。江戸時代からある太鼓橋の背後に高層マンションがそびえ立つ幻想的な佃エリアの風景がとても印象的だった。

「鬼平」の愛称が、あまりにも有名な長谷川平蔵。しかし、私財を投じ人足寄場で犯罪者の職業訓練を行ったり、更正した犯罪者を隠密へ起用するなど、厳しいだけではない、人間への温かなまなざしをもった平蔵の姿を知ることができた。

交通状況がスムーズで、早めに目的地に着くことができ、その分予定よりも見学時間を長く設けたり、講師から詳細の説明を付け加えることなどができた。その一方で、時間の制約があり、当初の予定よりもフィールドワーク場所を少なくせざるを得なかったこと、フィールドワークという形式上、質問や議論の時間をあまり設けることができなかったことは少し残念だった。

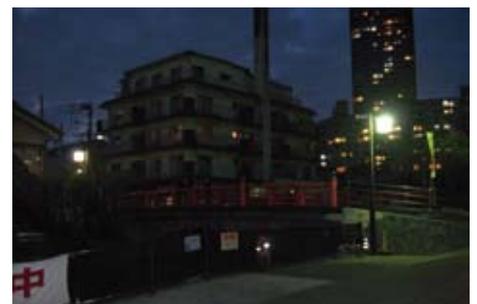
ボランティアの方を含め、協力いただいたスタッフが臨機応変に対応してくださり、無事にフィールドワークを運営できた。



深川資料館内を見学する参加者



佐々木さんの案内で現代に残る「下町」を見学



江戸と平成が共存する街並み

## 分科会 60

ミツバチが教えてくれた人と人のきずな  
～銀座のミツバチがつなぐ地域の連携～

日時 11月12日(土) 16:00～18:00 参加者 23人

会場 銀座フェニックスプラザ 3階会議室・屋上

## 出演者

## ◆講師・案内

高安 和夫さん (銀座ミツバチプロジェクト 理事長)

藤田 暁生さん (銀座ミツバチプロジェクト)

体感  
する

## 1 概要

15:50 J R 両国駅～J R 有楽町駅→徒歩でマロニエ通りや銀座の街並みを見ながら会場へ

16:25～17:45 銀座ミツバチプロジェクト現場見学及び講義

17:45 現地解散

## 2 主な内容

養蜂家の藤原先生と出会い、2006年3月28日、銀座紙パルプ会館屋上(12階)で西洋ミツバチの養蜂をスタート。ミツバチが住みやすい環境は、高さ50～60mほどで、中低層ビルの紙パルプ会館屋上は適している。巣箱は、風よけのフェンスで守られ、コンクリートの床で羽が折れないように人工芝が敷かれている。ミツバチが蜜を運べるのは半径2Kmほど。銀座の街中で蜂蜜が採れるのか不思議に思うだろうが、南に浜離宮、西に日比谷公園、北に皇居と緑の拠点がある。銀座ではマロニエ通りの街路樹、ソメイヨシノなどから蜜を運んでくる。ミツバチは皇居からの約1.5Kmを10分ぐらいで飛ぶ。1往復約30分、1日20往復銀座のビル群の間を飛び交っている。収穫量は年間約900Kg。

ミツバチの飼育を通じて、銀座の環境と生態系を考えるようになり、在来種を大切にするため、日本ミツバチも飼いはじめた。群れ、飼い方が異なるため、西洋ミツバチとは離れた場所に巣箱を置いている。共存できるよう一匹一匹のハチを大切に扱っている。

ミツバチは少量の農業で死んでしまうため、ミツバチが元気に飛んでいるということは、環境指標の基準となる。現在、銀座では、国内生産量の0.03%を生産。とれたての蜂蜜をすぐ銀座のお店で出せるので、蜂蜜そのものの香りが高い。採れた蜂蜜は銀座の技をいかして、老舗のお店で様々なスイーツやお酒が開発されている。銀座は元々職人の街であり、粋な文化の継承地である。職人の街という、眠っていた銀座らしさをミツバチが覚醒してくれている。

仲間と楽しみながら活動していく中で、たくさんの人々と知り合い、今では日本全国でミツバチプロジェクトが始動している。また、銀座の屋上の空き地を農園とする「銀座ビーガーデン」、地域の食や活動を紹介する「ファーム・エイド銀座」など、銀座から農業や食を発信する活動が展開されている。

2006年から始まったプロジェクトを通し、自然と共生できる銀座の街に出会い、様々なつながりの大切さに気がついたというお話しに、参加者は熱心に耳を傾け、銀座の事例に興味深く学んでいた様子だった。

高安さんより最後に、銀座から人と自然の共生を世界に発信していきたいとの素晴らしいメッセージをいただいた。



西洋ミツバチ養蜂箱



屋上で日本ミツバチ養蜂箱を見学



高安さんの講演を聞く参加者の方々

## 分科会 61

東京下町から山の手へ  
～てんぷら油バスで節電の町東京を走るナイトツアー～

交流会終了後、両国国技館前からバスで出発

日時 11月12日(土) 19:30～21:45

参加者 32人

出演者

畷岐 若子さん(有限会社リボン<エコツーリズム・ネットワーク>)  
さとう みかさん(ボランティアスタッフ)

体感  
する

## 1 概要

学校給食や家庭で使用された廃食油を回収・リサイクルした燃料「BDF(バイオディーゼル燃料)」100%で走る観光バス、通称「てんぷらバス」は、移動中に排出される二酸化炭素を大幅に削減する上、「BDF」は植物性の燃料なのでカーボンニュートラル。二酸化炭素±0のエコバス「てんぷらバス」で、震災後、節電の街と変わった夜の東京を走った。

杉並区の障がい者が主体となり、資源循環型社会の一旦を担い地域貢献を果たしていくことを目的とした社会福祉法人「いたるセンター」阿佐ヶ谷生活園が食用廃油を回収し、「BDF」に精製し燃料としてバスツアーに供給されており、映像を見ながら農村交流・被災地支援のお話しも聞けるエコバスツアーとなった。

## 2 主な内容

当日キャンセルはあったものの、当日受付の場でお申込みも何人かあり、ほぼ満員で国技館前より、「BDF」で走る「てんぷらバス」に乗り込み、時間通りに出発した。本日出演予定であった畷岐 健一郎さんは都合により欠席の為、奥さまであり、リボンマネージャーの畷岐若子さんとボランティアで活動を手伝っているサトウミカさんの出演となった。

早々に出発すると、てんぷらバスについての説明を聞きながら、建設中のスカイツリーを目指した。バスを路肩に停車し、完成時には634mになるスカイツリーは、バスの中からでは全景は見えないほど大きかった。また建設途中の為、暗くて良く見えなかったが、東京出身の参加者が少ないバスツアーであったため、皆さん熱心に見上げていた。スカイツリー自体も照明にはLEDを使用するなど、エコに配慮している。その後は高速に乗りベイブリッジを見ながら東京タワーへ向かった。

以前に比べ大分明るさを取り戻している高速から見た夜景はとても美しかったが、実際、LEDに変えるなど、震災がきっかけとなって節電に取り組む姿勢は変わってきている。バスの移動中にはリボン・エコツーリズムネットワークの活動のDVDを見ながら説明を聞いた。3月11日の震災の時も石油・ガソリンがなくても走れるてんぷらバスのおかげで、すぐに現地にボランティアへ行くことができ、捨てるものはないと実感したそう。また日頃から都市農村交流で求めている者同士をつなぐネットワークのコーディネートをしていた関係もあり、震災時ものつながりから早い時期に現地へ活動に入り、泥かきなどの他、学習用品の洗浄などの支援をした様子や、最近仮設住宅に入られた方々が引きこもり、孤独にならないように「ライフカフェ」のボランティアに行き、参加者手作りのお菓子や飲み物を提供するなど交流する様子を映像で見ながら報告を聞いた。

クリスマスの電飾の美しい東京タワーに到着。東京タワーにはアースデイ東京タワーの事務局があり、震災後のボランティアバスの出発地にもなっていた。その場所を全員で見学後、15分程の自由行動。

その後、再度乗車し、エコツーリズムのツアーの様子のDVDを見ながら、東京駅を經由し10数名が下車、それ以外の方は国技館前に到着後、解散となった。



案内を聞きながら東京の街並みを見学



スカイツリーを見上げる参加者の方々



東京タワーも見学

## 分科会 62

## 興望館セツルメントを見る・聞く・考える！



五十嵐美奈さん

日時 11月13日(日) 9:30～11:30

参加者 26人

会場 興望館

## 出演者

野原 健治さん(興望館 館長)

五十嵐 美奈さん(興望館地域活動部 コーディネーター)

体感  
する

## 1 概要

興望館は、大正8年に「セツルメント」として東京の下町で事業を立ち上げた。セツルメントとは、地域の人々とともに、福祉課題をとらえ、その解決のために実践していくことを目的としていくものである。当時の東京でもっとも人口が密集し、貧しい家庭の多かった墨田区において、このセツルメントの実践と興望館の現在を学んだ。

## 2 主な内容

○「戦前社会事業を育てた町」浦和大学

鈴木みな子先生の研究より

五十嵐美奈さん

(興望館地域活動部 コーディネーター)

はじめに興望館職員の五十嵐さんから、墨田区の地域特性についてお話をうかがった。墨田区は隅田川や荒川に挟まれ、その他小さな水路が多い地域であり、これが興望館誕生の背景となっているとのことであった。貧育会病院やベタニアホームなどセツルメントの考えに基づいた施設が多いこともこの地域の特徴である。

それは当時の運搬は、水運が主であったこと、また、墨田は沼地が多く土地が安価だったことが大きな要因となって、東京の産業の多くが密集していた。よって、低賃金労働者が多く流入し、ピークの昭和15年には20万6千人にもなり、住宅問題が発生し、家族を総合的に支援するセツルメントが展開されるきっかけとなった。

この地域には低所得ではありながら「意欲や向上心、知的関心の高い住民層」が多く、興望館の欧米文化に興味を持ち、セツルメントを積極的に受け入れ、また興望館はその住民に支えてもらい、育ててもらった。

○ビデオ鑑賞

墨田区の地域的特色や歴史、興望館の歴史などについての映像資料を鑑賞した。

工業地帯に変貌した墨田区は明治20年頃から低所得者の当番場となり、不安定な就労環境、貧困、栄養不良、苛酷な児童労働や女子労働など、多くの問題を抱える地域となっていた。

そのような状況を見たキリスト教婦人宣教師たちは、1919年に本所松倉町に借家をして、託児・診療などの事業を開始した。貧しさの為に犠牲になっている子ども、婦人、家庭の救済が自分たちに与えられた仕事だと感じたためである。

1923年に念願であった本館建物を建設したが、関東大震災による火災で焼失し、瓦礫と負債のみが残った。1924年は負債の返済に追われたが、東洋英和女学院のイザベル・S・ブラックモアは私財を投げ打ち、

興望館が苦難を乗り越える資金とした。震災後、地域の再開発により、1927年に寺島町へ移転した。

1929年、米国で社会事業を学んだ吉見静江が米国より帰国し、興望館の任務についた。興望館の新しい建物も完成し、幼稚園、診療所や授産事業、講習会などを実施した。1945年、東京大空襲により興望館周辺は大きな被害を受け、焦土となった。戦後は産院を開設し、海外から寄付されたミルクや生活必需品などの配布事業の拠点として地域の人々とともに地域の方々の生活を支えた。

現在の興望館は、保育園、児童養護施設沓掛学荘、児童厚生施設地域活動部の3つの事業を通じて、子どもたちの成長を地域と一緒に実現していく場所として運営されている。また、子どもたちは良質な人の輪の中でこそ多くの経験を得て成長していくことができるという理念の基、興望館はその拠点となるよう努力していく。

○館内見学 本部、体育館、保育園の見学

興望館館長の案内により興望館の各施設を見学した。

○セツルメント精神の現在の活動

野原健治さん(興望館 館長)

浦和大学の鈴木みな子先生がまとめたレジュメを使用し、セツルメントについてのお話をいただいた。セツルメント事業の特徴は、地域の中に拠点となる施設を設置し、従事者もその地域に定住し、地域住民の隣人となって、人々の生活困難の物質的・精神的救済を行って、地域全体の生活の向上を目指していく、というものである。現在のセツルメントの役割は地域福祉のお手伝いをする事だと考えている。

創立の精神である「隣人愛」、「セツルメント」の考えを基に実践し、感謝の関係で繋がっていくことが大事だ。それを示したのが外国人宣教師たちであり、その働きに感謝したい。

設立者たちの苦労は、興望館セツルメント20周年記念式典のライシャワー氏の挨拶文から読み取ることができる。興望館は必要なことをしていた団体、期待されていた団体として認可されていたことから、多くの団体から援助をいただいたが、これも苦労に苦労を重ねた努力の成果によるものである。

○グループディスカッション

4つのグループにわかれ、懇談を交えつつ感想や質問を共有し、最後にグループ内の意見をグループ毎に発表を行った。各参加者ともセツルメントに対して大きな興味関心を抱いており、非常に活発な意見交換が行われた様子であった。

## 3 分科会担当者コメント

本会場から遠く離れた興望館フィールドワークに多くの方にご参加いただき、改めてセツルメント

への関心が高まっていることを感じた。現代社会は家庭や地域における課題が多様化し、それらが複雑にからみあっている。それは画一的な支援では解決は難しく、その地域において、その課題を受け止め、地域に寄り添いながら支援していくことが必要であり、セツルメントの理念や考え方は、それらを解決する重要な糸口になるのではないかと感じた。

3.11以来、人々の絆の大切さを改めて強く再認識された今、本分科会に参加された皆様が各地域に戻り、ここで得たものが少しでも地域福祉の推進・向上に役立てば嬉しく思う。本分科会にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。



館内見学(体育館)



野原健治さん



グループディスカッションの様子

## 分科会 63

第五福竜丸展示館見学  
～核の脅威と放射能汚染被害を考える～

第五福竜丸の船尾

日時 11月13日(日) 9:00～12:00 参加者 13人

会場 第五福竜丸展示館

## 出演者

安田 和也さん(公益財団第五福竜丸平和会 事務局長・学芸員)  
市田 真理さん(第五福竜丸展示館 学芸員)  
第五福竜丸展示館ガイド・ボランティア

体感  
する

## 1 概要

第五福竜丸展示館は57年前に米国水爆実験により被ばくした木造漁船をそのまま保存し、核の脅威と被害を伝える都立の展示館である。核実験は広範な海域を放射能で汚染し、マグロ、放射能雨、野菜、子どもの健康不安など影響は国民的に広がりました。当館の見学により、核兵器のない時代への展望、放射能の汚染被害について、一緒に考えた。

## 2 主な内容

第五福竜丸展示館に参加者がそろうまで(集合場所は青山学院大学正門と新木場駅であった)、早めに着いた参加者は館内の自由見学を行った。

## ○学芸員からの説明(要旨)

安田和也さん

(公益財団第五福竜丸平和会 事務局長 学芸員)

## ①第五福竜丸の沿革

第五福竜丸は1947年に建造された。当時連合国に占領されていてGHQは100トン以上の建造を認めなかったが、検査官の接待等により、実際は140トンの船を造ることができた。このような木造船が当時は遠洋漁業で活躍した。そのため第五福竜丸の展示は、一つに産業遺産として、またもう一つに原子力遺産としての意義がある。

1954年の被爆事件以後、放射能除去が行われた後に東京水産大学の練習船となった。1967年老朽化により廃船となり、船体は東京都江東区夢の島(この展示館の前)に捨てられた。10年間の保存運動を経て、1970年6月東京都により第五福竜丸展示館が開館した。なお、エンジンは個人所有の船に取り付けられたが、1968年三重県熊野灘沖で座礁・沈没した。1996年12月、28年ぶりにエンジンが民間有志によって海中から引き揚げられ、東京都はエンジンの寄贈を受けて第五福竜丸展示館脇に展示した。

## ②被爆事件

米国は1954年マーシャル諸島で3月から2ヶ月半で6回もの水爆実験を行った。その第1回が3月1日に行われ、第五福竜丸が被爆することになった。

第五福竜丸が3月14日に焼津港に帰り着き、『読売新聞』3月16日の報道により日本中が驚いた。5月16日放射能を含んだ雨が降り、国民の不安が増した。被爆した船は12月末までで856隻にのぼり、汚染魚485.75トン全てが捨てられた。

第五福竜丸の乗組員23名は3月下旬、地元の病院から東京の東大病院と国立第一病院に移され、1年2ヶ月にわたり治療が行われた。しかし、無線長であった久保山愛吉さんは9月23日に39歳で亡くなった。また、他の船で被爆して具合が悪くなった120余名はろ

くに検査もされなかった。なお、第五福竜丸乗組員23名のうち9名が現在生存されている。亡くなった方々は全て肝臓ガンで亡くなっている。

## ③被爆事件後

米国は日本政府との間で被爆者補償の交渉を急ぎ、事件の決着を図った。1955年1月4日に200万ドル(約7億円)が支払われた。漁業関係の被害総額は24億円余とされていたが、第五福竜丸の乗組員23名のみ一人当たり僅か200万円が支給された。

東京・杉並区の女性たちが、1954年5月原水爆禁止の署名運動を始めた。8月には原水爆禁止署名運動全国協議会が結成され、翌年夏までに3000万人が署名した(当時の日本の人口は8000万人)。1955年8月には広島で、第1回の原水爆禁止世界大会が開かれた。

核実験・核兵器反対運動は世界に広まり、1963年には部分的核実験禁止条約が結ばれ、核実験は地下実験へと移った。現在2万発の核爆弾が地球上で存在している。

## ○グループに分かれての展示館見学

参加者が3グループに分かれて、各グループに展示館ガイド・ボランティアがついての説明があり、質疑応答を交えながら見学を行った。

## 3 分科会担当者コメント

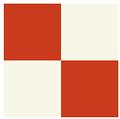
前回の広島大会を引き継ぎ、核爆弾の問題を取り上げた。時あたかも福島原発事故の問題が起こり、第五福竜丸被爆事件当時の日本国内の有様とダブって考えさせられるところがあった。参加した方々も問題意識が高く、説明された第五福竜丸平和会の安田さんのテンポの良い明解な説明を集中して聞いていた。グループに分かれて少人数で展示館ガイド・ボランティアに説明を受け、質問もして、満足のいく内容になったものと思う。



学芸員からの説明



グループに分かれての展示館見学



# 交流会



普段は土俵のある両国国技館のアリーナにて開催。全国から約600名が参加し、交流した。

「江戸」と「東北地方」をテーマに、助六寿司やつくだ煮、まめかんなどの東京名物と、東北六県の地酒や芋煮などを提供した。また、広島大会で実施した「紙相撲大会広島場所」に引き続き、「紙相撲大会東京場所」を開催した。



墨田区社協 深野紀幸事務局長による乾杯のご挨拶



助六寿司



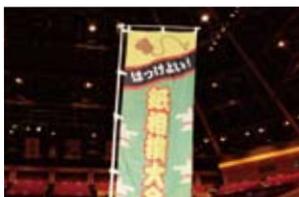
東北の地酒コーナー



渋谷区社協 星宮正典事務局長による締めのご挨拶



## ● 紙相撲大会



紙相撲大会東京場所 開催！



見合って見合って…



優勝者にオリジナル「ぼらせん」をプレゼント

## ● 次回開催県PR等



忍者の格好をした三重大大会実行委員の皆さんによるご挨拶と次年度のアピール



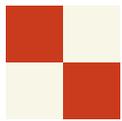
伊賀の忍者も交流

## ■ 工夫したポイント

- ・参加しやすい金額設定
- ・開催時間の短縮(交流会終了後、夜の東京観光を楽しめるように配慮)
- ・地元東京のもの・東北地方のものを取り入れたメニュー
- ・交流しやすく、料理もとりやすいような配置の工夫

## ■ 次へ生かすポイント

- ・料理提供の工夫(量・提供方法など)
- ・交流を促すような工夫



# クロージングセッション



## ● コーディネーター

枝見 太朗(第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 委員長)

## ● 登壇者

鹿住 貴之(第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 副委員長)

須藤 美智子(第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 副委員長)

## ● 分科会・シンポジウム報告者 5名

はじめに、この大会の柱となる4つのコンセプト「ボランティアな活動の本質・原点とは」「江戸から学ぶ“東京”らしさ」「これからの“つながり”のあり方」「市民の社会参加におけるあるべき姿」について、コーディネーター、登壇者で振り返った。それを受

けて、震災やコンセプトとの関連が特に深いものなど今大会のポイントとなる分科会から、4名の出演者に報告をいただいた。

出演いただいた報告者は、以下の通り。(分科会内容については、各分科会報告ページをご覧ください。)

## ● 宇田川 規夫さん

分科会15

大規模災害に備えよう！～東日本大震災からの学び～

## ● フィリダ パービスさん

分科会28

人が人とつながりあうために  
～世界各地の実践から学ぶ～

## ● 野原 健治さん

分科会62

興望館セツルメントを見る・聞く・考える！

## ● 岡本 榮一さん

分科会4

ボランティア憲章をつくろう！  
～日本人のボランティアズムを考える～



各分科会の報告を受け、1日目のシンポジウムのコーディネーターを務め、また、本大会主催者でもある山崎より、「強くしなやかな社会」についての思いを、1日目の報告も交えながら述べた。

## ● 山崎 美貴子

今回のフェスティバルの計画を立てるにあたり、様々なことを考えた。特に、「強くしなやかな社会とはどんなものか」を考えたいという思いから、多様なプログラムの企画へとつながった。

シンポジウムでは、阿部さんが「人間は人の間と書く、人と人の間でなければ生きられない」と話された。それを受け、分科会で無縁社会、独居の問題などある中、つながりこそ力になるということを確認されたのではないかと。

今回のフェスティバルを通して、市民(わたしたち)がつくる強くしなやかな社会とは、一人ひとりの願いがその人らしく、その人の個の原理に立って実現されるということが、今、私たちに与えられていることだと痛感した。しかし、個人でできることには限界がある。そこで、「NPOなど組織の力をどう創っていくか」、「他のセクターとどのように協働していくか」、「ボランティアの力量をどう高めていくか」といったことが大切だと思う。

また、「ボランティアは一部の人、特別な人」という意識をどう克服していくかも重要となる。ボランティアは特別なことではなく、市民の権利であり、義務である、というように広がりをもたせて定着していく社会をどう作っていくのか。そのためには、多くの人々が当たり前のように活動に参加できる社会づくりをしなければいけない。



この2日間を受け、日本の中に捨てたものじゃない多くの仲間がいることを実感することができた。日本中に、地球上に、誰も排除されない豊かな地域にしていくために、一緒になって闘っている仲間がいることを知り、眠れない思いだった。万感の思いをもって、皆さまに心からのエールを贈りたい。

最後にコーディネーター、登壇者の3名それぞれが、4つのコンセプトや、大会テーマ「<sup>わたしたち</sup>市民がつくる、強くしなやかな社会」についての考えや思い、また、約2年間にわたる準備期間からこの2日間に至るまでの振り返りなどを述べ、クロージングセッションのまとめとした。

## ● 鹿住 貴之

分科会25(まちとむらをつなぐ森林づくり)の進行を担当した。事例報告の中に、100人の高校生が集まって、昔から林業をやっている「森の名人」に話を聞きに行く「聞き書き甲子園」の紹介があった。高校生が最初の研修で集まった際、中にはタバコを吸っていたり、話を聞かず座ってられない高校生もいる。しかし、研修の最後には、聞いた話を10時間近くかけて、高校生全員がきちんと書き起こしてまとめてくる。それはやはり名人との関係性の中で、「仕上げないと悪いな」という気持ちや共感、信頼ができてくるからこそだと思う。

それと同様に、ただつながりをつくりましょう、といってもなかなか簡単にできるわけではない。出会う中で関係が生まれ、共感や信頼の中でつくられてくるものではないか。今回、「つながり」のあり方、つながりをどのようにつくっていくのかということが、とても印象に残った。



## ● 須藤 美智子

てんぷら油バスツアーや、東京油田と下町めぐり、東日本大震災と自然学校の取組み、銀座ミツパチなど、いくつかの環境に関わるフィールドワークや分科会を企画した。そのほかに、分科会29(「患者が先生」みんなでつくるこれからの医療とは?)を担当した。姉が医学部の患者講師だったことがきっかけで、大変素晴らしい取組みに出会い、紹介したいと思ったためである。これは一見、「ボランティア」とは関係ないように思えるが、医療に患者・当事者である市民が参加していくという視点が、本フェスティバルにふさわしいと思った。分科会を通して、その思いが、参加者の皆さんに引き継がれ、広がっていくことを感じた。

また、この分科会の前後に、次のような場面も目の当たりにした。分科会の登壇者の患者講師の方が、エレベーターのない3階の会場で、上の階へ上がるのに苦労していた。そんな時、ひとこと周囲に声をかければ、どなたでも協力してくれ、その方を椅子ごと担いで3階まで上がってくれた。それを見て、本フェスティバル自体が、つながりの始まりになっていることに気づかされた。

本フェスティバルの企画から開催までを通じて、様々な方と出会い、協力していく中で、つながりというものを実感するこ



とができた。この2日間も、実行委員は自分の持ち場でなくても、とにかく状況に応じてどのようなことでも行っていた。それが、たとえ夜中であっても、足りない部分は補い合ってきた。日頃全く別々の活動や仕事をしている人たちが、こうして一つのフェスティバルを作り上げるために頑張ってきたこと自体に、非常に価値があると思う。

## ● 枝見 太朗

2日間で62の分科会・フィールドワークが行われたが、一つひとつの分科会の参加が、一つひとつの小さな出会いであり、その小さな出会いの積み重ねが、いずれ日本を背負って立つつながりになる。その小さなつながりを、私たちがいかに守り合って育てていけるかが大切なのだと思う。本フェスティバルをつくる過程でも、実行委員会において、これからも生きてくる多くのつながりができた。同様に、ボランティアフェスティバルの1回目から20回目までのつながりはとても大きなことであり、これから先へもつながっていくことだと思う。

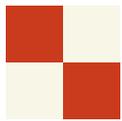
また、本大会のテーマである「市民(わたしたち)がつくる、強くなやかな社会」。強い市民(わたしたち)、しなやかな市民(わたしたち)とは、どのようなものかについて考えた。それは、「政治や行政、社会環境、自然災害など何か起こった際、自分を強く持ち、社会の中で生かされていることに気づきながら、どんな役割が果たせるか考えられる人が求められていく」、そのような社会だと感じた。

毎年のフェスティバルが、これからも、様々な気づきを得たり、新しい出会いがあったり、忘れてはならないことを振り返る大切な時間になっていくことを願う。



## ■ 工夫したポイント

- ・4つのコンセプトに沿った、分科会の報告を交えた構成
- ・大会テーマに対する考えを交えたまとめ



# 引継式・閉会式

## ● 引継式

これまで20回の全大会を見守ってきたフラッグを、東京大会の枝見実行委員長から、三重大会の森下推進委員会会長に、今大会の思いを込めて引き継いだ。



司会は昨日から引き続き  
安藤千賀さん



大会フラッグを東京から  
三重へ



固い握手で思いを来年度へ



三重大会推進委員会会長  
森下さんのご挨拶



三重県PRチームによる  
〇×クイズを実施

## ● 閉会式

2日間のフェスティバルを締めくくる閉会式は、「こどもの城児童合唱団」による合唱でスタートした。絵や手拍子、踊りを交えながら、時にはステージを下りて会場全体を使い、歌を届けてくださった。心のもった元気いっぱいの歌に、思わず涙ぐむ参加者やスタッフの姿もあった。

続く枝見実行委員長のメッセージでは、「幸せとは、自分がかけがえのない存在である」と実感しながら生きること」というマザーテレサの言葉を引用しながら、3月の東日本大震災で失われたかけがえのない「いのち」のこと、そして「われわれ一人ひとりが身近な命を守っていくことが、日本を支えていくのではないか」、「利害を超えたところに“共感”が生まれ、それが人々の心を動かすことにつながる。それはボランティアにしかできないこと」と述べ、この2日間の思いを三重に託し、閉会となった。



こどもの城児童合唱団に  
よる合唱



心と元気のこもった歌が会場に響きわたる



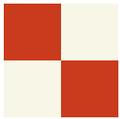
枝見実行委員長による閉会のメッセージ



2日間ありがとうございました！来年は、三重でお会いしましょう！

## ■ 工夫したポイント

- ・ 地元で活動する子どもたちを交えての実施
- ・ 次回開催地(三重)との連携による引継式



# ふれあい広場



## 1日目 11月12日(土) 両国国技館 会場外にて

墨田区内のお店や団体を中心に全41団体が展示・販売を行った。下町の伝統工芸の販売もあり、両国国技館とともに“江戸らしさ”を感じられる広場となった。

### ● 伝統工芸品の販売や展示

下町に残る江戸小紋・江戸更紗染製品や野菜菓子などの伝統工芸品や、2012年5月にオープンするスカイツリーグッズなど、墨田区ならではの商品を中心に販売した。

- ・墨田区伝統工芸保存会
- ・すみだ地域ブランド戦略推進協議会
- ・墨田区観光協会
- ・江戸木箸 大黒屋
- ・桑原ハム シュタット ヴァイデ
- ・紗蔵
- ・塩澤製作所 かざり工房しおざわ
- ・大松染工場
- ・向じま 梅鉢屋
- ・森田商店

### ● 墨田区のNPO・市民活動団体、作業所の活動紹介や作品販売

- ・あしたの会
- ・いきいきプラザ
- ・おいてけ堀かっぱ堂
- ・外国人生徒学習の会
- ・手話サークル「すみだ」
- ・墨田区肢体不自由児者父母の会
- ・墨田区聴覚障害者協会
- ・墨田区ボランティアサークル連絡会
- ・すみだ点訳 ひかり会
- ・すみだフレンドシップクラブ
- ・すみだ布の絵本の会「花」
- ・すみだNPO協議会
- ・点訳きつつき
- ・パソボラきつつき
- ・朗読奉仕 くさぶえ
- ・NPOだんだんカフェ
- ・NPO法人 雨水市民の会
- ・NPO法人こらーるたいとう
- ・NPO法人すみだ学習ガーデン
- ・NPO法人てーねんどすこい倶楽部
- ・NPO法人とらいあんぐる

### ● その他 関係団体の活動紹介など

- ・民間相談機関連絡協議会

### ○ 両日ともに出展

- ・障害年金実践研究会
- ・第21回全国ボランティアフェスティバルみえ実行委員会(次回開催アピール)
- ・日本おもちゃ図書館財団(おもちゃの展示や体験)
- ・ボランティア国際年+10推進委員会(「つながろう2011!笑顔でフォト」企画の実施)
- ・NPO法人 日本セルフセンター(岩手県や宮城県など被災地の作業所の物品販売)
- ・NPO法人 日本ボランティアコーディネーター協会
- ・Make a CHANGE Day 実行委員会
- ・東京都社会福祉協議会(書籍や被災地応援グッズの販売)
- ・東京ボランティア・市民活動センター(オリジナル煎餅「ぼらせん」や書籍の販売)

## 2日目 11月13日(日) 国連大学 中庭にて

毎週土日に開催されている「ファーマーズマーケット」と、環境ボランティアをやってみたい市民と環境団体の出会いを提供するイベント「環境ボランティア見本市」との同時開催で行った。

全55団体が出展し、ボランティアフェスティバルの参加者だけでなく、買い物で通りがかった方も立ち寄るなど、多くの方にボランティアフェスティバルや市民活動などについて知ってもらう機会になった。

### ● 渋谷区のNPO・市民活動団体、作業所の活動紹介や作品販売

- ・渋谷区障害者福祉センター はあとびあ原宿
- ・しぶやアートクラブのようなもの
- ・みどり工房
- ・むつみ工房
- ・ワークささはた
- ・ワークセンターひかわ
- ・NPO法人絆の会 福祉作業所ふれんど
- ・NPO法人渋谷なかよしぐるーぷ
- ・NPO法人すみれ福祉会 すみれ工房
- ・NPO法人はらっぱ ワーク&ショップくはらっぱ>

### ● 伝統工芸品の販売や展示

東京ボランティア・市民活動センターに常設された委託販売スペース「ふれあい満点市場」の団体が出張販売を行い、全国から集まった参加者と直接ふれあった。

- ・おあしす福祉会 ピアワーク・オアシス
- ・ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク
- ・東京YWCA「留学生の母親」運動 工房ひだまり
- ・チェルノブイリ子ども基金
- ・NPO法人国際エンゼル協会東京ボランティアクラブ
- ・NPO法人地球の友と歩む会
- ・NPO法人日本国際ボランティアセンター

### ● 環境ボランティア見本市(協力：一般社団法人 日本メディアアート協会)

- ・アイサーチ・ジャパン
- ・エコ・リーグ(全国青年環境連盟)
- ・グリーンピース・ジャパン
- ・公益財団法人オイスカ
- ・国際環境NGO FoE Japan
- ・コーラルネットワーク
- ・渋谷Flowerプロジェクト(シブハナ)
- ・ジャパン・フォー・サステナビリティ(JFS)
- ・村おこしNPO法人ECOFF
- ・認定NPO法人自然環境復元協会(NAREC)
- ・認定NPO法人JUON(樹恩)NETWORK
- ・BLUE BIRD
- ・NPO法人アースウォッチ・ジャパン
- ・NPO法人荒川クリーンエイド・フォーラム
- ・NPO法人共存の森ネットワーク
- ・NPO法人国際自然大学校
- ・NPO法人棚田ネットワーク
- ・NPO法人 地域交流センター
- ・NPO法人地球映像ネットワーク
- ・NPO法人地球緑化センター
- ・NPO法人千葉自然学校
- ・NPO法人樹木・環境ネットワーク協会
- ・NPO法人東京港グリーンボランティア
- ・NPO法人富士山クラブ
- ・NPO法人ECOPLUS
- ・NPO法人J-cheer
- ・NPO法人NICE日本国際ワークキャンプセンター
- ・NPO法人NPObirth

### ● その他 関係団体の活動紹介など

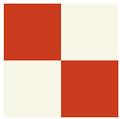
- ・東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県・NPO活動支援共同ブース(各県による取組み紹介や展示)

## ■ 工夫したポイント

- ・開催地に関わる団体の出展や関わり
- ・東京らしさを味わえる内容(伝統工芸品の出展という下町らしさ・スカイツリーや青山エリアという都会らしさ)
- ・フェスティバル参加者以外の方の参加(ボランティア・市民活動団体の普及・啓発)

## ■ 次へ生かすポイント

- ・団体同士の交流が深まる更なる仕掛けづくり
- ・フェスティバルの参加者がふれあい広場に参加するための時間の確保



# 広報実績

## ●メディア掲載

### ○新聞

- ・福祉新聞 記事(2011年9月12日)
- ・西日本新聞 北九州版 広告(2011年8月27日)
- ・フジサンケイビジネスアイ 広告(2011年9月20日)
- ・日刊スポーツ 大阪本社版 広告(2011年9月24日)
- ・毎日新聞 夕刊 広告(2011年9月28日)
- ・産経新聞 都内版 広告(2011年10月14日)

### ○機関紙・雑誌等

- ・ウォロ 広告(2011年9月号)
- ・WAM 記事(2011年9月号)
- ・月刊福祉 広告(2011年11月号)
- ・子ども未来 記事(2011年度第2号)

### ○その他

- ・危機管理産業展(R I S C O N T O K Y O)2011 オフィシャル・プログラム 広告(2011年10月19日～21日)
- ・ほか、関係団体、推進団体等を中心に、ホームページでの広報やバナー掲載等

## ●主なPR活動

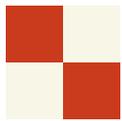
- 大会専用ホームページの開設(2010年9月～・計34,641アクセス ※開設～開催当日まで)
- Twitterでの情報配信を開始(2010年9月～・計346ツイート)
- 全国ボランティアフェスティバルひろしまでの告知および「紙相撲大会広島場所」の開催(2010年9月25日～26日)  
参加者数:354 賞品:東京・両国の老舗「巴湯」特製 海鮮ちゃんこ鍋セット
- 「ボラフェスなぞかけ」の募集(2010年9月25日～10月31日) 応募作品:140点  
【最優秀作品(賞品:iPod Touch 8GB)】  
・「ボランティア」とかけて「高性能マイク」と解く。その心は、「小さな声をひろいます。」(ドラゴンさん)  
【優秀作品(3作・賞品:iPod shuffle)】  
・「ボランティア」とかけて「噛んじゃったかも」と解く。その心は「ハートがあつたかい(歯跡が有ったかい?)」(Kahlua518さん)  
・「ボランティア」とかけて「シンクロナイズドスイミング」と解く。その心は「どちらもみずから(自ら・水から)手を上げます」(onigawara328さん)  
・「全国ボランティアフェスティバル」と掛けて「建造中のピラミッド」と解く。  
その心は「参画(三角)の為、堅い意志(硬い石)を持った人々が集います。そこでは(底では)、先駆者の築いた、礎を見る事も出来るでしょう。」(imo\_rockさん)  
【佳作(5作・iTunes Card 1,500円分)】  
・「ボランティア」とかけて「二人三脚」と解く。その心は「はじめの一步が大切です。」(shin78mk2さん)  
・「ボランティア」とかけて「出産」と解く。その心は「どちらも"さんか(参加/産科)"の"いし(意思/医師)"が必要です。」(takucchaさん)  
・「ボランティア」センターとかけて「バレーボールの日本代表チームと解きます。その心は「センターの働きが肝心です」(神田川一笑さん)  
・「ボランティア」とかけて「チョーク」ととく。その心は「どちらもおせっかい(石灰)が主成分です。」(mto\_communitasさん)  
・「ボランティア」とかけて「ワイン」と解く。その心は「どちらも「寄付(貴腐)も良いでしょう♪」(hiroturboさん)
- メールマガジンでの情報配信(2010年12月24日～2011年11月10日・計17回)
- 大会パンフレット、ポスターの配布(2011年9月～)
- ぐんまボランティアフェスティバルでのブース出展(2011年9月3日)
- 第48回東京都老人クラブ芸能大会でのパンフレット配布(2011年9月15日)
- 分科会ごとの個別チラシの作成・配布(2011年9月～)
- Ustreamによるシンポジウム動画配信(2011年11月12日・計161アクセス)

## ■工夫したポイント

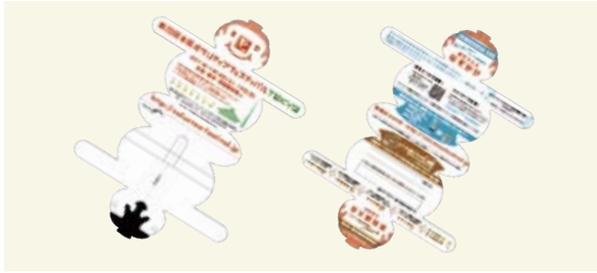
- ・学生や社会人など、これまでボランティアフェスティバルに参加したことがないであろう新たな参加者層の開拓
- ・TwitterやUstreamなど、ソーシャルメディアを積極的に活用
- ・関東に限らず、他地域へも告知
- ・分科会テーマに興味・関係のある団体などに的を絞った告知
- ・大学ホームページ、Twitterによる、情報の段階的発信

## ■次へ生かすポイント

- ・新聞以外(ミニコミ誌など)への記事・広告掲載
- ・広報開始の時期



# 大会制作物



紙相撲大会台紙兼チラシ  
(4,000枚)



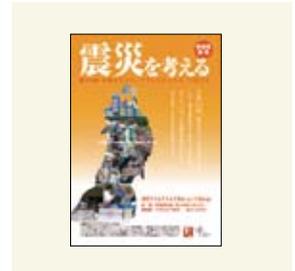
紙相撲力士シール  
(5,000枚)



開催案内パンフレット  
(3版・計40,000部)



開催告知チラシ  
(2版・約100,000部)



災害分科会チラシ  
(5,000部)



開催告知ポスター  
(2版・計3,000部)



資料袋  
(4,000袋)



スタッフジャンパー  
(1,000着)



当日パンフレット  
(4,000部)



会場案内・ふれあい広場地図  
(各4,000部)



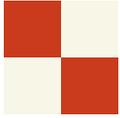
参加証  
(4,000枚)



大会のぼり  
(35本)



紙相撲のぼり  
(2本)



# 平成23年度全国ボランティアフェスティバル(仮称) 実行委員会設置要綱

## (設置)

第1条 平成23年度全国ボランティアフェスティバル(仮称)(以下「フェスティバル」という。)を実施するため、実行委員会を設置する。

## (名称)

第2条 この会の名称は、平成23年度全国ボランティアフェスティバル(仮称)実行委員会(以下「実行委員会」という。)とし、実行委員会内で決定する。

## (所掌事務)

第3条 実行委員会は、次の事項を審議決定する。  
(1)フェスティバル開催要綱、役割分担等基本事項に関すること。  
(2)フェスティバルの企画、運営、広報等に関すること。  
(3)共催団体及び関係機関団体等との連絡調整に関すること。  
(4)フェスティバル実施に伴う予算及び決算に関すること。  
(5)その他、フェスティバルの実施に際して必要な事項に関すること。

## (組織)

第4条 実行委員会は、第3条の事項を行うに適した者を、その都度、選任することとする。

## (役員)

第5条 実行委員会に次の役員を置く。  
(1)委員長 1人  
(2)副委員長 2人  
(3)監事 3人  
2 委員長、副委員長は実行委員から選出する。  
3 監事は東京ボランティア・市民活動センター運営委員会からの推薦のあったものを充てる。  
4 委員長は実行委員会を代表し、会務を総括する。  
5 副委員長は委員長の職務を補佐し、委員長に事故あるときはその職務を代理する。  
6 監事は実行委員会の会計を監査する。

## (招集等)

第6条 実行委員会は委員長が招集し、議長を務める。  
2 実行委員会の議事は、出席委員の過半数をもって議決する。

## (専門部会・正副部会長会議)

第7条 実行委員会業務の円滑かつ効果的な実施を図るため、専門部会を置く。  
2 専門部会については、委員長が別に定める。  
3 専門部会間の調整を行うため、正副部会長会議を置く。

## (事務局)

第8条 実行委員会の事務を処理するために、東京ボランティア・市民活動センター内に事務局を置く。  
2 事務局の組織及び運営に関して必要な事項は、委員長が別に定める。

## (経費)

第9条 実行委員会の業務に要する経費は、補助金、委託金、負担金、助成金、協賛金、共同募金配分金及びその他の収入をもって充てる。

## (解散)

第10条 実行委員会は、決算を完了し、その目的を達成したときに解散する。

## (その他)

第11条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は委員長が別に定める。

## 付則

この要綱は、平成22年4月27日から施行する。

## 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 実行委員

	名前	所属	実行委員会役職
1	阿部 陽一郎	中央共同募金会	
2	上田 英司	NICE(日本国際ワークキャンプセンター)	監事
3	枝見 太朗	富士福祉事業団	委員長
4	江藤 隆文	NPOコミュニケーション支援機構(a-con)	
5	尾崎 靖宏	「広がれボランティアの輪」連絡会議/日本生活協同組合連合会	
6	鹿住 貴之	JUON(樹恩)NETWORK	副委員長
7	吉良 裕美子	渋谷区社会福祉協議会 しずやボランティアセンター	
8	後藤 浩二	スープの会	
9	嵐 祐子	調布市社会福祉協議会 調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター	
10	笹島 潤也	東京青年会議所	
11	志波 一顕	「広がれボランティアの輪」連絡会議/日本赤十字社	
12	鈴木 啓太	墨田区社会福祉協議会 すみだボランティアセンター	
13	須藤 美智子	環境パートナーシップ会議	副委員長
14	高井 正	足立区教育委員会	
15	田丸 精彦	V C A S	
16	内藤 純	公認会計士/税理士	監事
17	新部 聖子	スープの会	
18	野崎 吉康	全国社会福祉協議会	
19	吉田 建治	日本NPOセンター	
20	渡戸 一郎	明星大学	監事
21	渡辺 禮司	東京こころねっと	

## Special Thanks

青柳 朱実/足立 陽子/石田 優/伊丹 謙太郎/市川 智弘/今井 麻希子/浦田 愛/沖 清司/小木曾 利英/加雅屋 拓/梶川 晃/河村 暁子/黒川 照太/後藤 務/佐々木 明/清水 志穂/霜田 美奈/鈴木 千冬/高見沢 公彦/多田 裕紀子/田中 皓/谷本 大樹/鶴山 芳子/橋本 洋光/原田 未来/山口 真由子/吉澤 卓/若林 明子/アムネスティ・インターナショナル日本/おもちゃの図書館全国連絡会/株式会社東京正直屋/監獄人権センター/関東地区病院ボランティア連絡会/興望館/赤十字語学奉仕団/全国音訳ボランティアネットワーク/ソーシャルブリッジ株式会社/東京食事サービス連絡会/東京聴覚障害者福祉事業協会 東京手話通訳等派遣センター/東京日本語ボランティアネットワーク/東京ハンディキャップ連絡会/リボン<エコツーリズム・ネットワーク>(敬称略・順不同)

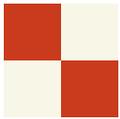
## 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会 事務局

### 【東京都社会福祉協議会】

山崎 美貴子/竹内 則夫/高山 和久/池田 明彦/小野 明子/宮田 幸次/吉田 真也/柳澤 更沙/北沢 真理子/井口 綾乃/小野 孝嘉/加納 佑一/清水 和良/瀬川 真穂

### 【株式会社セレスポ】

唐沢 洋平/鈴木 利佳/国田 弘道/田中 達志



## 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO 推進委員会設置要綱

### (設置)

第1条 第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO(以下「フェスティバル」という。)を実施するため、推進委員会を設置する。

### (名称)

第2条 この会の名称は、第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO推進委員会(以下「推進委員会」という。)とし、第3条に定める項目に協力する団体を推進団体と呼ぶ。

### (協力内容)

第3条 推進団体は、次の事項を協力する。  
(1)フェスティバルの広報について  
(2)貴団体の関連団体に対する周知について  
(3)フェスティバルへの参加について  
(4)推進委員会への出席について  
(5)その他、フェスティバルの実施に際して必要な事項に関すること。

### (組織)

第4条 推進委員会は、上記第2条に定める推進団体及びフェスティバルの主催団体により構成する。

### (役員)

第5条 推進委員会に次の役員を置く。  
(1)大会会長 1名  
(2)大会副会長 若干名  
2 役員を推進委員会を構成する団体から選任する。  
3 会長は推進委員会を代表し、会務を総括する。

### (招集等)

第6条 推進委員会は会長が招集し、議長を務める。

### (事務局)

第7条 推進委員会の事務を処理するために、東京ボランティア・市民活動センター内に事務局を置く。  
2 事務局の組織及び運営に関して必要な事項は、会長が別に定める。

### (経費)

第8条 推進委員会の業務に要する経費は、補助金、委託金、負担金、助成金、協賛金、共同募金配分金及びその他の収入をもって充てる。

### (解散)

第9条 推進委員会は、フェスティバル終了後に解散する。

### (その他)

第10条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は会長が別に定める。

### 付則

この要綱は、平成23年6月28日から施行する。

## 協賛団体

第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYOへのご寄付をいただきました。

教職員共済生活協同組合

松翁会

昭和池田記念財団

スーパの会

全国身体障害者施設協議会

全国労働者共済生活協同組合連合会

損保ジャパン環境財団

東京都共同募金会

トヨタ自動車株式会社

日本生活協同組合連合会

日本赤十字社

株式会社三菱東京UFJ銀行

## 協力団体

第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYOの実施にあたり、広報や資機材のご提供、ボランティアによる当日運営にご協力いただきました。

NECフィールドディング株式会社

ギャップジャパン株式会社

日本新聞協会

理想科学工業株式会社

## 推進団体

第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYOの実施にあたり、広報や推進委員会へのご出席、ボランティアによる当日運営などにご協力いただきました。

I AVE日本

JUON(樹恩)NETWORK

NICE(日本国際ワークキャンプセンター)

VCAS

朝日新聞厚生文化事業団

おもちゃの図書館全国連絡会

環境パートナーシップ会議

「関東地区病院ボランティアの会」運営委員会

キリン福祉財団

公益信託TaKaRaハーモニストファンド

国際緑化推進センター

こども未来財団

さわやか福祉財団

児童健全育成推進財団

松翁会

上智大学ボランティア・ビューロー

昭和池田記念財団

助成財団センター

スーパの会

全国国民健康保険診療施設協議会

全国児童養護施設協議会

全国身体障害者施設協議会

全国保育協議会

全国老人給食協会の会

全国老人福祉施設協議会

損保ジャパン記念財団

大和証券福祉財団

多摩信用金庫

チャイルドライン支援センター

中央労働金庫

長寿社会開発センター

東京YMCA

東京YWCA

東京食事サービス連絡会

東京新聞社会事業団

東京青年会議所

東京都共同募金会

東京都障害者スポーツ協会

東京都生活協同組合連合会

東京都民生児童委員連合会

東京都老人クラブ連合会

東京ハンディキャップ連絡会

都内区市町村社会福祉協議会

ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン

日本BBS連盟

日本おもちゃ図書館財団

日本環境協会

日本更生保護協会

日本自然保護協会

日本生活協同組合連合会

日本赤十字社

日本赤十字社東京都支部

日本チャリティプレート協会

日本フィランソロピー協会

ハウジングアンドコミュニティ財団

福祉医療機構

富士福祉事業団

フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団

毎日新聞東京社会事業団

みずほ教育福祉財団

みずほ福祉助成財団

三菱財団

明星大学ボランティアセンター

ヤマト福祉財団

ユニベール財団

読売光と愛の事業団

立教大学ボランティアセンター

労働者福祉中央協議会

早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター

(順不同・2011年11月1日 現在)

※紙面でのご紹介をもって、お礼に代えさせていただきます。

## 第 20 回全国ボランティアフェスティバルT O K Y O 報告書

発 行：第 20 回全国ボランティアフェスティバルT O K Y O 実行委員会

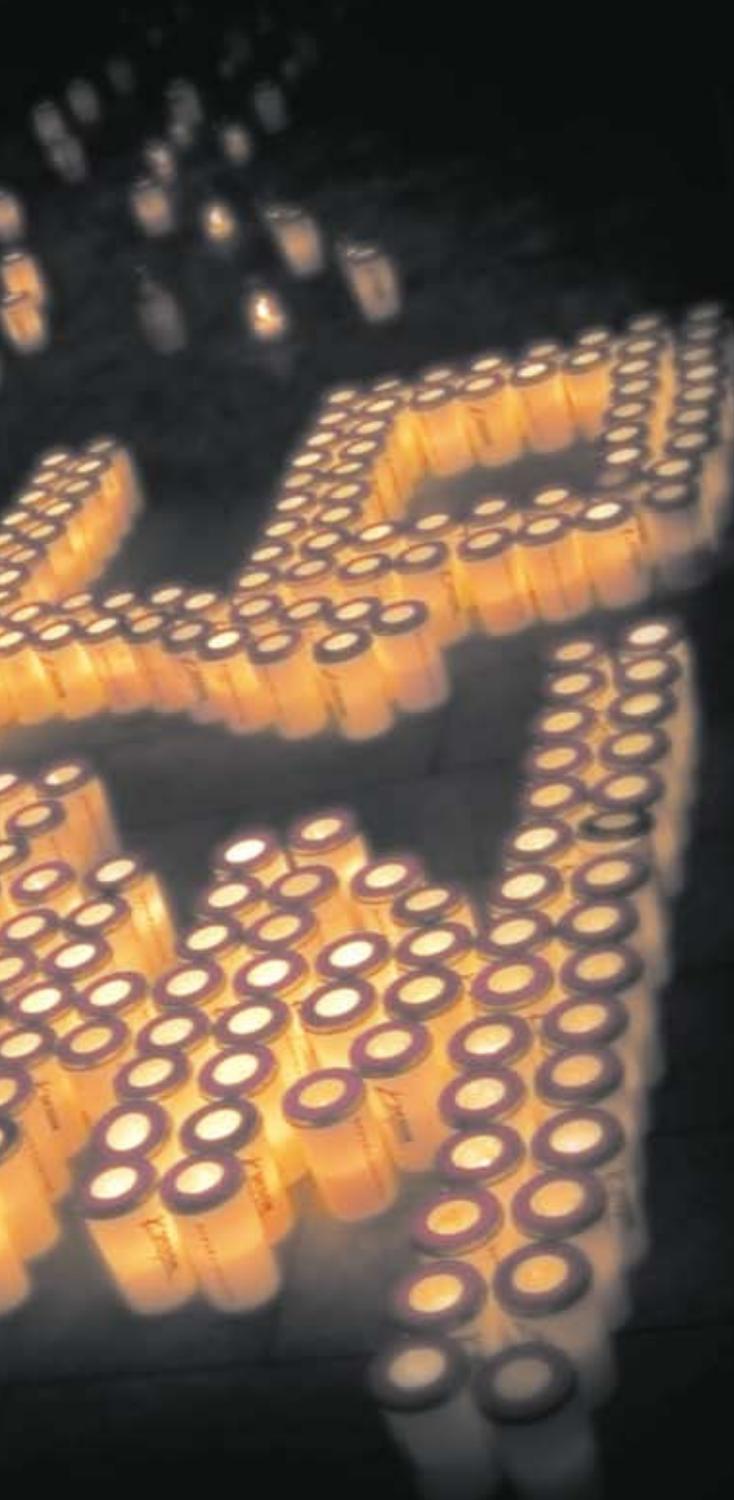
事務局 社会福祉法人東京都社会福祉協議会

東京ボランティア・市民活動センター

〒162-0823 新宿区神楽河岸 1 - 1

T E L : 03-3235-1171 F A X : 03-3235-0050

発行月：平成 24 年 2 月



3月11日、私たちは  
たくさんのものを失いました。

しかし、震災の痛みの中で、人と人とのつながりで動くボランティアが、この苦難を乗り越える力として大きく役立っていることも日々感じています。

そして、今までよりずっとずっとたくさんの人が、「私は今後、社会とどう関わっていけばいいのだろう」と考え、動き始めています。

これからの社会をより強く、  
しなやかで、暮らしやすいものに

今、ボランティア活動をしている人は、新しい仲間を見つけたり、普段疑問に思っていることが解決できるかもしれません。また、これからボランティアについて考えたい人は、自分らしい関わり方を見つけることができるかもしれません。

ひとりひとりが自分らしさを大切にして、様々なかたちでボランティアに関わっていくことが、これからの社会をより強く、しなやかで、暮らしやすいものにするんだ、全国ボランティアフェスティバルTOKYOは、そんな発見ができる2日間にしたいと考えています。

第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会

委員長 枝見 太朗

わたしたち  
「市民がつくる、強くしなやかな社会」

